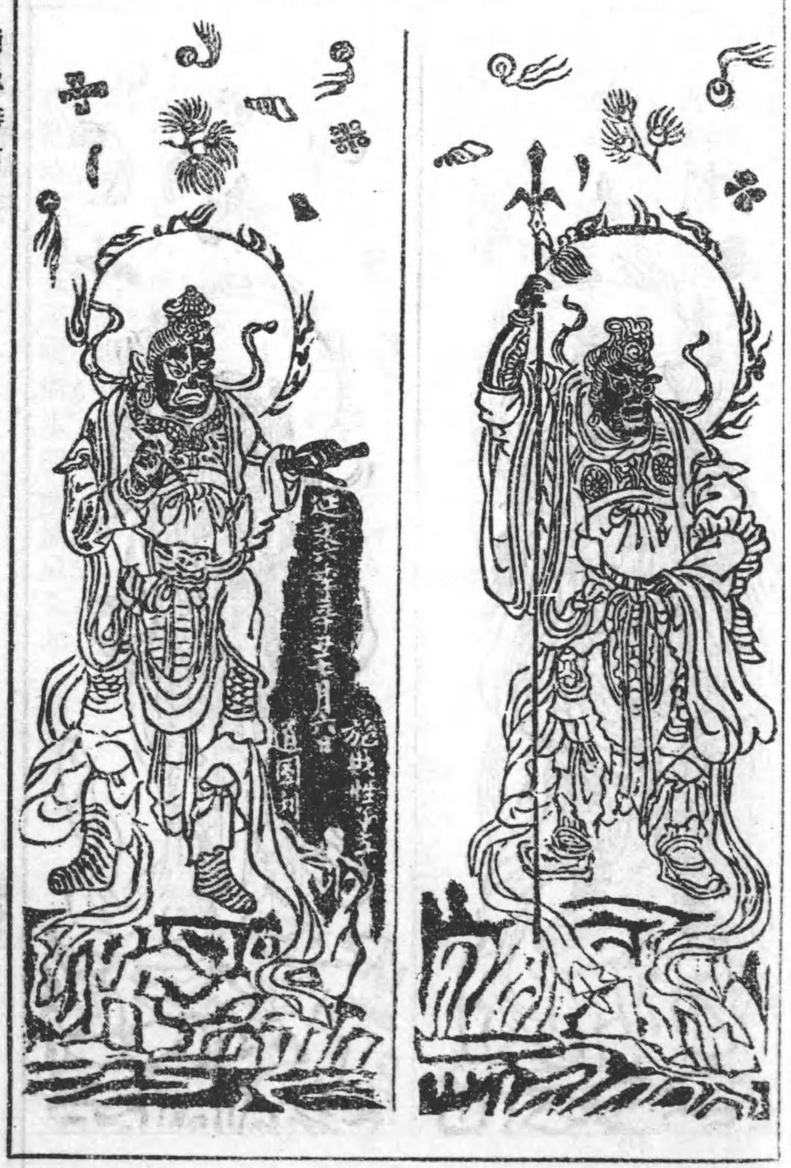


襄陽峴山羊公祠有石幢一枚。凡六面。高六尺。每面闊九寸。有蓋有座。一面直書下。第一行刻使帖襄陽縣。第二行刻淮慶曆七年十一月六日。中書劄子。襄州奏。當州城南五里。有峴山一所。上有古祠碑。又有晉太傅。(已下俱磨滅僅存聖旨字。末行上。有帖到速採石大字。書刻上件。其四面界作六層。刻詩下題名。又幢一臥峴山上。其文可辨者十三字。云々。

又按ずるに、「蒲州府志」(巻三)棲巖寺條下云、

寺外石幢六已折。其一幢。皆刻梵經。不知何人書。大要隋唐時也。

これによりてみれば、普濟寺の六面の碑も、蓋あり座あり、高さも六尺程にて、石幢といふものなるべし。此石幢といふ物、所々に有と見えたり。

天寧寺塔幢。塔高十三尋。塔前一幢。書體遒美。開皇中立。(帝城景物畧)

金剛經石幢。開元二十六年建。在襄陽龍興寺。(輿地碑目)

江陵府官石幢。貞元十年。吳仲舒撰。(輿地碑目)

尚書省石幢記。胡證作。元和八年。(金石錄)

白龍寺經幢。在寧國府水陽鎮。開成元年。(輿地碑目)

廣濟院石幢。在蕪湖縣。大中十二年。（輿地碑目）

廣濟院石幢。在蕪湖縣。乾符六年。（輿地碑目）

右の七幢の事は、「佩文齋書畫譜」（卷六十二、六十三）にみえし所なり。

又、「江西石幢記」。觀察支使試左武衛兵曹參軍來擇撰。泰和二年建云々。（下略）」「格古要論」に出たり。

（八）武州豐島郡赤塚といふ所に觀世音あり、東明寺と云。又松月院あり。むかし吾友岡部公脩、（名正懋、後剃髮號素觀）菊池叔成（名禎）と同じく此地に遊びしが、舊友南條山人（川名氏、名孟綽、字仲裕）、かつて松月院に寓居せしころ物語せしは、此地に廢たる寺あり、大堂といふ。古き鐘あり、といひし故に、たづねてみしに、日くれかゝれば燭をかけてみるに、

武藏州豐島郡赤塚（泉福寺眞福寺）兩寺鐘銘

驚沈潛之幽蟄。破衆生之大夢。莫先於鐘也。武州豐島彼兩寺者。前朝全盛之時所建。具體古招提也。獨缺簨簴之器。可謂缺典矣。今快賢阿闍梨。幹衆緣鑄巨鐘。厥志勤矣。若夫豐嶺霜降。祇園月明。揚音於大千沙界。傳益於未來無窮。命中岩銘。銘曰。

武之豐郡　州之重鎭　崇崇福山　裒我彥俊
皃氏范鏞　以落以釁　大扣大鳴　鯨吼霆震
啓昏迪迷　遐邇咸進　劫石有消　洪音無盡

曆應三年庚辰四月初八日筆執三位親慶
大工　平次五郎行次
勸進沙門右部阿闍梨快賢

簨簴―鼓を懸くる横木を簨といひ縱木を簴といふ

皃氏―周禮に皃氏爲鐘

范鏞―范は笙の誤歟、書經に笙鏞あり、鏞は大鐘

以釁―牛の血を鐘にぬる儀式

公脩は古を好むの癖ありて、都下より三里餘へだたれる道をいとはず、二日過て墨をたくはへゆき、三本を搨かへりて、叔成と予におくれり。安永六年丁酉十月九日の事にして、今は二子ともに泉下の客となれり。按ずるに、此銘を書し中岩は、圓月と號す。「中正子」をあらはせしもの也。「鎌倉志」（卷三）建長寺の下に、

梅洲菴佛種慧濟禪師。諱圓月。號中岩。嗣法東陽。當山四十二世。永和元年正月八日示寂。世壽七十。

とあり。泉福寺眞福寺の兩寺に一鐘をともにせしも、古質なることなり。

(九)「日蓮上人御書撰時抄」に、

彼漢土の嘉祥等は、一百餘人をあつめて、天臺大師を聖人と定たり。今日本の七寺二百餘人は、傳教大師を聖人と號したてまつる云々。

按ずるに、七寺僧徒の數、これによりてそのすくなきを見るべし。同書(錄外第七神國王御書)、

漢土の寺は十萬八千四十一所也。我朝山寺は十七萬一千三十七所也。又日本國の叡山七寺、東寺園城寺等の十七萬一千三十七所の山々寺々云々。

又(錄外卷十五垂迹法問御書)、

一日本國中社數一萬三千三十二所あり。一佛法住所十七萬一千三十七所也。

此書をみて其時の寺社の數をしるべし。

(十)南郭翁(服部元喬)「檜垣寺古瓦の記」のかな文一篇、翁手づからかきて、肥後の曇龍上人におくられしを、金地院よりしばしば翁に書給はん事をこはれしかば、うけひかれしが、いく程なくて身まかり給ひぬ。その草稿の家にありしを、其子仲英(名元雄)翁の志をつぎて、金地院におくれり。さるを青山妙有菴にいませし耆山上人のかり得て寫し置給ひしを、翁のかな文めづらしければこゝにしるす。

ひくとはなしに—陶淵明無絃の琴を撫して自ら娛む

ひがきのおうなのうた、その事をあはせて、「後撰集」「大和物語」にあらはれたれば、人みなしる所なり。今はその跡寺となりてなんあるといひ傳ふめり。肥後の曇龍上人、ふるさとよりふたゝび東にむかはんとて、ふるきをしのぶかたくなる翁が心ぐせを思ひはかりて、かの寺の瓦をもて傳へてあだへ給へり。朝夕なづさひみんに硯になしてんとて、其みちのたくみにことづけてこゝろむるに、いとかたしとていなびたれば、とゞめにけり。さばれ ひくとはなしに琴を手まさぐりて過せしためしもあらざらめやは。さるは、事がらのいみじうむかし覺えて、もてあそぶばかりも、こゝろ一つにをかしきわざなりや。おのれめでたしとみるのみかは、上人のはるゞゝふりはへたづさへたまへりしこゝろづくしの、海ふかき情もすてがたきまに、ならはぬ女もじしてかきつくれば、にげなくこそをこがましけれ。かつはかの白川のみづから思へば、老にける身の、今はた硯の墨の黑髪にたちかへるべきすぢもあらずかし。硯ならでも世をもてかぞふるものこそあれ。はかなきいのち毛の筆のすさみはながきもよしなしとて、かきさしてやみつ。

硯ならでも—唐庚古硯

銘序に、筆之壽以日計、墨の壽以月計、硯之壽以世計

寶暦八年　七十六翁

（十一）世俗に、新宅をつくれば三年の間煤を掃はぬ事、古きことなり。「東鑑」に、嘉禎二年十二月六日。爲大膳權大夫奉行。召陰陽師等於御所。歲末年始雜事日時勘申之。御煤拂事有相論。文元朝臣申云。新造者三ヶ年之内可有其憚云々。（中略）所詮此條無證據。然者無煤拂御沙汰可宜歟之由。被仰出之間。各不申子細也。

又明「袁中郎集」（卷十四）、

歲時紀異云。十二月云々。二十七掃屋塵。曰除殘。

又明王在晉が「海防纂要」「十二月二十六日。在軫。俗云掃塵風。」又淸の沈歸愚が「國朝詩別裁」（卷二十）に、張自超が掃塵行の詩をのせたり。

掃塵練日臘三七　細竹長竿風捲疾　歲々荒村守敝廬
家々淨掃迎新吉　掃遍瓦椽及四圍　甑中之塵凝不飛
朝來坐曝茅簷下　垢面相逢猶苦飢
此方の煤掃のさまにかはる事なし。今江戸の俗、十二月十三日を用ひ、京都の人は二十日を用ふといふ。南郭服先生（元喬）毎年十二月十三日、煤掃を避て、東洵寺の中なる少林院に詩會あり。これを掃塵會といひしよし。青山妙有菴にいませし耆山法師の物語なりき。

（十二）此方の人、十月五日を達磨忌といふ。「廻向双紙」（卷下）諸歎佛偈幷伏願句の中に。

群機有賴播揚少室之家風妙智無窮成就大乘之根器。（達磨千年忌之伏願之句也。大平五年乙酉十月五日東山建仁月州和尙作。）

とあり、十月五日のだるま忌もふるき事なり。今淸朝の時憲書に、「十月初五、達磨祖師聖誕」とあり。誕生日と忌日とはいづれか是ならん。

（十三）八丈島宗福寺の主僧契譽病ありて、その弟江戸深川六間堀にすめる山下宗德（稱嘉傳次）の家にありて、若州の醫官杉田伯元（名公勤）の治療をうけし時、八丈島の事をかたる。この僧は、鎭西八郎爲朝の後裔なり。保元年中爲朝伊豆の大島に流されて諸島を威服し、久く八丈島にありしが、又鬼が島にうつれり。（今の靑が島なり）其うたるゝ時、一矢を射て軍船をくつがへし、家にかへりて腹きりて死す。その地は今の小島にて、爲朝明神の社あり。爲朝の妾の子を爲宗といふ。長じて僧となりて、一寺を西山にたてて、父の冥福

をとひ、香爐山彌陀寺といふ。肉食妻帶帶刀して、子孫相つゞきて住持す。永享年中に西山に火おこりて、彌陀寺も又やけぬ。その時の主僧、寺を今の大賀郡大里原に移せり。時に武州金川に奥山宗鱗(一作林)といふ者あり、交易を通じて此島を奪ひし時、此寺も金川の宗興寺に屬し、甑峯山宗福寺とあらため、曹洞宗となる。是を中興の開山とす。それより以下、今の契譽にいたりて十五世なり。いつの比よりか、豆州下田の海善寺に屬して淨土宗となれり。爲朝より今にいたる迄七百年に近く、血統相つぎて絶ず。寛政の比命ありて新田を墾く事あり、此地も又他にうつりし時、二の石槨をほり出せり。その中に種々の器ありしが、鏡三面、斧一つ、硯一つ、皿一枚のみのこれり。佩刀の類もありしが、朽そこなはれて、その形もわかちがたし。伯元今は玄伯といふ。鷄齋玄白翁の子なり。

按ずるに、[今川記]に云、

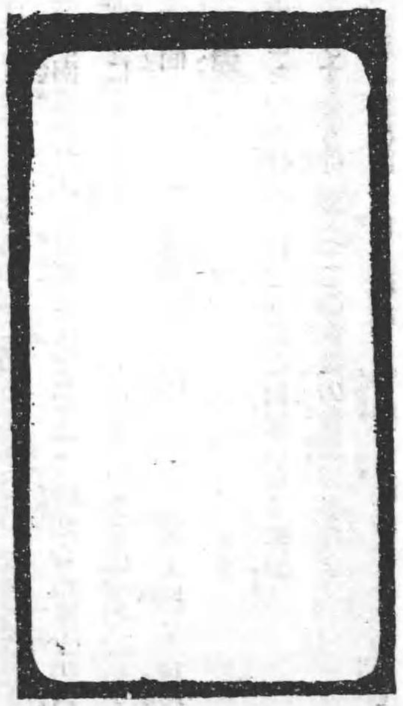
常時源氏の正統を申奉るに、義國の御子一男義重、新田初也。次男義康、足利殿是[　　]先祖義康の御子、一男矢田判官義清、木曾殿と同時に責上り、備中國水島合戰に討死也。二男足利判官義房者、頼政に一味し、宇治川合戰に討死し給ふ。三男上總介義兼ぞ、義康の家督をば御相續なり。義兼者實は八郎爲朝の子也しを、義康のひそかに養ひ給ひけると也。御長九尺計にて、ちから人に勝れ給ひ、義兼は此事知しめさずにや、頼朝はひそかに知し召給ひけると也。頼朝はきんし給ひ、人がらも穩便にましくければ、時政が聟になし被申けると也。然ば頼朝と義兼も從弟にて、又相聟なり。去程に新田殿より足利殿御末繁昌し、代々北條家と緣を結び給し也。

義兼の實父爲朝は、高名の合戰二十度、人を殺事數不知。然共一人として非義の敵を不打。古今無雙の強弓にてあれども、漁獵の遊を不好、慈悲を先として父母に孝あり、禮義を專とし、一心に地藏を奉念。去故にや、現在にて荒神の樣に恐しかども、子孫は殘りて、天下の武將として[　　]に殘り給ふ。不思議の御事也。

義兼の御子左馬頭義氏、御法名正義、北條義時の聟也。其御子一男足利五郎長氏上總介、二男義繼、三男泰氏宮内大輔、平石殿と申。此御母義時の息女の腹にて、左馬入道殿の家督を相續にて、惣領に立給ふ。泰氏又最明寺殿の妹聟にて、式部太夫頼氏を生給ふ。頼氏の御子家時、伊豫守、其御子貞氏讃岐守殿、其御子尊氏將軍等

鏡

硯



右三品

持院様是なり。其御弟直義大休寺殿、今の鎌倉の初なり。尊氏公は、北條相摸守久時の聟也。寶篋院御母是也。加様に代々先代の御縁邊にて、□の御威勢、源家の棟梁にてましく〳〵けるとかや。

予かつて「今川記」をよみて、爲朝の子孫繁昌せる事をしれり。今又八丈じま宗福寺の事をみて、ます〳〵積善の家の餘慶あることを信ずるにたれり。

（十四）北村季吟翁の墓は、池の端茅町正慶寺にあり。昔年ゆきてみし事あり。其墓に、

花もみつほとゝぎすをもまちいでつこの世後の世おもふことなき

再昌院法印季吟先生

寶永二乙酉年六月十五日八十二歳卒

と彫つけたり。此うた辭世の歌にあらず。しかれども、季吟翁「疏儀莊の記」の末に、

猶日ながき折は、鬼子母のおはす曹司谷も遠からず、護國寺の大悲者のみまへにも、たゞはひわたるほどなれど、老のあゆみに猶ちかければ、新長谷寺にまうでて、不動尊の堂下より、西南にかたぶく日影に杖をたてて、時知らぬ富士の白雪をながめ、千町の田面のみどりになびく風に涼みて、しばらくいきをのべつ。かくて、

八十年來筆硯間　道遙歌苑老心閑　一望士嶺千秋雪

雲帶清風往又還

初かりのいなばにおつる聲はあれどうゑし田面になく郭公

花もみつほとゝぎすをも待いでつこの世後の世思ふ事なき

となんよみて疏儀莊に歸れば、日くれぬ。宵過て月松の上にさし出てあきらけく、

大悲者―觀音

こゝにはけふみし花の色もみえず、鳥の聲も聞えず。かの桐火桶の餘薫、あるかなきかにものの端にとゞまれり。寶永二年五月初つかた、法印季吟口にまかせふんでにまかす。（以上文）

按ずるに、此うたまことに絶筆なるべし。元祿十六年正月二十九日、八十の賀の祝せし事も記中にみゆ。

（十五）東坡が前後赤壁の事は、人のよくしる所也。其年十二月十九日、又赤壁に遊ぶ事あり。「古文眞寶抄」卷首に、

韓私云、建仁常庵和尚之「古文眞寶」は唐本也。此本に云、「古文眞寶箋注釋大全卷之一」と。下に「松塢門人京兆劉剡音校、永陽鱗峯後學黃堅編集」とあるほどに無疑乎。但先輩不見此本」とあり。按ずるに、韓とは清韓長老にや。

前赤壁賦。凡赤壁と云處五あり。周瑜が曹公を破るは江夏の赤壁なり。東坡が賦つくるは黃州の赤壁也。元豐五年壬戌、東坡四十七歳にて黃州に在り。其年の七月既望に、赤壁に遊て赤壁賦を作る。又同十月望に赤壁に遊て後賦を作る。又同十二月十九は坡が生日也。此日赤壁に遊、と「施宿年譜」「傅藻が「記年錄」等にあり。然ば元

豐五年壬戌一年の中、三回赤壁の遊をなす。賦は七月と十月とに兩度作る也。「東坡文集」、又「紀年錄」には前の字なし。後人開板の時加之乎。

按ずるに、傅藻が「東坡紀年錄」に云、

元豐五年壬戌(先生四十七歲)七月云々。既望泛舟於赤壁之下。作赤壁賦。

又懷古作念奴嬌。十月望步自雪堂歸於臨皐。二客從之。過黃泥之坂。復遊赤壁之下。作赤壁後賦。十二月十九。東坡生日也。置酒赤壁磯下。踞高峯俯鵠巢。酒酣笛聲起於江上。客有郭古二生。頗知音。謂坡曰。笛聲有新意非俗工也。使人問之。則進士李委。聞坡生日。作新曲。曰鵠南飛。以獻。呼之使前。則青巾紫裘腰蹇而已。既奏新曲。又快作數弄。瞭然有穿雲裂石之聲。坐客皆引滿醉倒。委求詩。作一絕句。王郎以詩見慶。次其韻。

又按ずるに、僧万里の「帳中香」(卷五)に云、

子瞻詩句妙一世。乃云。效庭堅體。蓋退之戲效孟郊樊宗師之比云々。詩赤壁風笛句。注。漁隱叢話後集二十六。東坡云。元豐五年十二月十九日。東坡生日也。置酒赤壁磯下。踞高峯俯鵠巢。酒酣笛聲起於江上。客有古郭二生。頗知音。謂坡曰。笛聲有新意。非俗工也。使人問之。則進士李委。聞坡生日。作新曲。曰鵠南飛。以獻。呼之使前。則青巾紫裘腰蹇而已。既奏新曲。又快作數弄。瞭然有穿雲裂石之聲。坐客皆引滿醉倒。委求詩。作一絕句。足矣。坡笑而從之。詩云。

山頭孤鶴向南飛　載我南遊到九疑　下界何人也吹笛

可憐時復犯龜茲

苕溪漁隱曰。西清詩話云。余嘗觀唐人西域記。言龜茲國王與臣庶。知樂者。於大山間。聽風水聲。均節成音。後飜入中國。如伊州涼州甘州。龜茲至也云云。仙溪傅藻所編東坡紀年錄云。元豐五年壬戌。先生四十七歲。七月既望。泛舟於赤壁之下。作赤壁賦。十月望。步自雪堂歸於臨皐。二客從之。過黃泥之坂。復遊赤壁之下。作赤壁後賦。十二月十九。東坡生日也。置酒赤壁磯下。踞高峯俯鵠巢。酒酣笛聲起於江上。客有郭古二生云々。與漁隱叢話同。

某謂。漁隱叢話并仙溪紀年錄等所載。元豐五年壬戌。東坡遊黃洲

之赤壁蓋三度也。其第一則七月十五前赤壁也。其第二則十月十五後赤壁也。其第三則十二月十九日。爲吹笛李委作詩之時也。云々。

又五羊王宗稷が「東坡年譜」、元豐五年壬戌の下には、十二月十九日の事を載る事なし。「古文抄」に引所の「施宿年譜」なるもの、未考。但王宗稷が譜には、

仁宗皇帝景祐三年丙子。先生生。於是年十二月十九日乙卯時。按先生送沈逵詩云。嗟我與君皆丙子。又有贈長蘆長老詩云。與公同丙子。三萬六千日。又按玉局文云。十二月十九日。東坡生日置酒赤壁磯上。

と見えたり。

享和二年壬戌十二月十九日に、七月既望の盟をつぎて、再び墨田川に舟を泛べて月見し事ありき。同遊の者七人、所謂篠本廉竹堂、鈴木恭白藤、井上玖子瓊、鱸文猶人、山本鄰德甫、中村亮子寅、書肆樂地堂等なり。予戲に賦のやうなるものをつくりて一時の遊を記せり。人みなこれを後々赤壁賦といはんなど笑ひ興じき。

遊墨水賦并序　杏園主人

是歲壬戌七月既望。與諸子泛舟墨水。飲於蘇公赤壁之遊也。十月之望。有疾不果。若夫諸子則復遊之矣。按蘇公年譜及紀年錄。十二月十九爲生日。置酒赤壁。然則壬戌三遊赤壁。而前後二賦贍炙人口。生日之遊。人不或記。蓋以無其文也。是日陰雲新霽。天氣肅然。乃與井鱸二生。昏暮鼓竹堂門。主人欣然相迎。酒二三行。豪氣十倍。又促山村二子。訪白藤書齋。相携而出。道過樂地堂。與會牛門市。買舟復遊於墨水之上。斯遊也。不期而得友七人。亦不奇乎。因不自量。作爲斯文。其辭曰。乘墨水之長流。擬赤壁之舊遊。提挈芝蘭之交。容與竹葉之舟。廻茗溪。下柳堤。出曲岸。望東西。兩國之橋。宛如虹蜺。霜氣滿天。北風淒其。積陰蒼茫。不可端倪。時乃萬物閉塞。群動滅息。流光湜々。水波如織。寒月揚色。玉缺石泐。裂三派之素練。啓九重之淵默。皎兮如氷雪之逼。卓乎如斷山之嶷。恍焉惚焉。如神仙之不可測也。客山德甫有操絲桐者。新得古琴。沈思而高吟。器冷絃調。山盧水深。羲々之德。洋々之音。得之敏手。而應於閑心。漸近自然。餘音愔々。於是合尊促坐。獻酬交錯。放肆大川。談笑嘔噱。不知舟楫之載形骸。抑形骸之載營魄。邪。蘇公逝矣。天地非昨。至今七百二十甲子。孰知有今夕者。

上下千年唯有孤鶴。

（十六）僧周興が「半陶稿」にいはく、古の人生を養ふものは、その枕を高くせず。おほむね始はこれを高くして、やうやくこれを低くす。故に紙を以て枕とし、日ごとにすこしづつ減ず。是第一養生の妙術なり。服藥百裹不如一宵低枕。といへるもこの事也。

高枕表號の說、代桃源師の文にみえたり。

（十七）同書にいはく、宋人西湖詩に曰、却將錦樣鷺花地變作元暉水墨圖。元暉とは何人ぞ。吾雪舟首座是也と。四景圖一景一幅楊知客筆に題する文に見えたり。元暉といひ楊知客といふ、みな雪舟の事にして、そのいにしへより賞せらるゝ事かくのごとし。

（十八）足利氏の頃、五山の僧の學問に、史記家と漢書家とわかれ、書物に師行未師行といふ事あり。（臥雲日件錄、文安三年の條に、施行未施行とあり。假名書にて通用するなるべし。）僧蕉了が「史記抄」に云、

今史記家と漢書家との讀癖を見るに、史記家の點は猶も念比にくはしい讀癖があるぞ。漢書家は尋常なる文字讀がまだ多ぞ。さるほどにか、妙智のあそばすを、家の人はまだも本式にはないとてそしる人がある、と古老僧のあつたが云はれたを、貶所で云はれたと思たが、史記家からはさふ思ふ事もあらうぞ。妙智のおせられしは、「史記」と「後漢書」とには、家の點本があるぞ。師行したほどにぞ。「前漢書」は未師行程に家の點本はふつとあるまい、とおせられたぞ。さあればこそ世間にいつとうなかるらうぞ。一條關白殿には、帝紀十二卷ばかり家の點本があつたぞ。偖は東山に、昆布屋の山莊に列傳がありたが、多缺て全備はせぬぞ。つよくしつした本と見えて、金銀薄紙を以て、有說と面に貼して、其裏に師說をかいたぞ。師說が重寶ぢやぞ。「史記」にも師說とてあるぞ。さては常德慶雲と云寮に一部折本の家點あり。其わざ程の點でもないぞ。さる時は未師行は治定なり。小くあるも全はないぞ。往々にはあらばやぞ。妙智は惠林院の御影から相傳してあそばしたぞ。惠林は家の人に傳授あつたぞ。さる程に、「漢書」の家と我もおぼし、世人も皆心得たぞ。既に師行がなくは、惠林妙智の師行が本なり。帝紀の第一からして列傳の四十三までは、聽聞して聽がきをして置たぞ。其中に二十二から二十六までは、用堂の死なれて中陰に居たほどに、闕所あり。偖は一度も不闕ぞ。さるほどに遲く參れば御待あつたぞ。坐敷でもあれ、かはらなんだぞ。益之や月翁もつかれたぞ。亂前に麟統淑之三子を携へて禮にまゐりたれば、酒

を御出あつて、御氣息よげにあつしほどに、「漢書」未了遺憾不淺を申したれば、樣もいるまい。只以前の讀だを以て讀め、とおせられた。そあれども、同くは受まゐらせたい、と申したれば、其時分はや御目が一向に御みえなかつたほどに、目だに見えば易い事なれども、ちつとも不見ほどにかなふまいぞ、とおせられたぞ。そこで愚が、ささふらはば、身御前で讀さふず。ちがふ處で御なほしありて、義理をも、おせられう處をばおせられて御聞せあれ、と申したれば、さらばよい事ぢや、此邊にも聽たがる人どもがあるほどに、とて四五日の中に始めうとしたれば、淑侍者が執爵申したに、湯(按に、湯は般若湯なるべし。禪家語殊勝なり。)を御すごしあつてから欵漱をめされて、わきへひきつめ〳〵するとて、若なほりたらばさうを申さふ、とて御のべあつて、不幾此亂が出來たほどに、今迄の遺恨なり。帝紀十二卷と列傳二十一より至三十一迄の聽書をば横川の借て、人にあつらへて寫すとて失はれたぞ、嵯峨に普明國師の弟子に施玉林とて「漢書」を讀まれたぞ。近比の幢立之は其弟子也。是も「漢書」の家と思はれたぞ。立之の法眷に西堂のあつたが、名譽の史學に達した人であつたぞ。小人でゐられたし時に、此人によつて念者が人を殺たほどに、其樣な事

さう―左
右、沙汰
小人―若衆

にちつと輕忽な事があつたと云ぞ。天龍寺參暇、西堂で稜嚴會(稜は楞の假名がきなり。)の中で、維那が三段の燒香を遲するとてわるく云はれたほどに、維那かはかてむずとくうで、こきやうてから、龍華に延慶と云寮のあるにひつこうで居られたぞ。西胤の弟子に等慶藏主とて、史學を專にした人があつたぞ。其の西堂に習たぞ。「宋元通鑑」をも講ぜられたぞ。おれは三劉宋祁の本はもつたり、喝食でから袖に入て、巢雲へいつてかくし〳〵「漢書」を習て、帝紀の始から列傳の二十四五卷迄いつたぞ。さるほどに、等持院のあそばすを聽がやうもなかつたぞ。今は玉林の傳授も絶つ、漢書家は自彊の一派迄なり。前等持綿谷瓏西堂は、愚が聞たより先に一遍聞て、三劉宋祁の本を書して、委く點じてもたれたぞ。近來三十餘卷迄人に講じて聽かせられたぞ。綿谷の行狀に、竺雲の「漢書」を聞く者、いか程にあつつらうなれども、綿谷一人爲後生授此書とあそばしたが、是も此で絶たぞ。可惜ぞ。「史」「漢」のかはりめをば、史記家と漢書家とのちがひと思ふべし。ちがうたとてどれをも不可譏ぞ。

按ずるに、此比學問のかたき事を知るべし。

(十九)同書(六卷)に云、

丁亥(應仁元年)歲五月。諸侯分黨相爭。東諸侯以細川氏爲首。西諸侯以山名爲首。深溝高壘於畦步之間。而細川公戴天子。挾相公。以令諸侯。山名則無適從。故我爲官軍。彼爲賊虜。諸將斬營而攻。則彼亦嬰城而守。呼聲動天地。飛矢如雨。一敗一勝。殆無虛日。京師喋血。天下洶々。余也脫身於兵馬之間。一錫飄然。岩栖谷飲。有年于此。江州之變亦不一也。及賊勢稍疆。勤王之兵日益少。黨逆之卒日益多。蓋人勝天之秋乎。

甲午(文明六)年之秋。余讀易至屯六二曰。屯如邅如。乘馬班如。匪寇婚媾。女子貞不字。十年乃字。解之者曰。屯難之世。勢不過十年者也。十年則反常。反常則本志獲矣。余是以知其十年而天下定一焉。自爾以降。僂指而數者久矣。

乙未(文明七)歲。官軍進討江賊。筮之得乾之九五。吉莫大焉。而軍不利而却。人皆以爲聖賢之言無驗矣。余獨不然。其敗死者。皆鄉者彎弓其主之徒焉耳。其餘無亡矢遺鏃之費。則是未十年之謂也。去歲丙申(文明八年)已當十年。而未見其應矣。今茲十月。畠山賊入寇河內。所過殘滅。復無噍類。其勢略與項籍相若。於是乎諸州之黨賊者。意氣揚々可見。河內賊又攻記之根來山。敗績走保河內。十一月十一日夜。防賊無故棄營而亡。新出河公君皇與登濃二賊不攻而破。被甲者。不遑其冑。執弓者。至失其矢。官軍乘勝逐北。其敗散之卒。父不知子所之。弟不知兄所在。死傷者不可以十百數之。二三賊魁館于江守(守疑寺)者。一宿去。蓋以其黨與也。嗚呼天之亡時。其在斯乎。原夫亂之初起在五月者。廼姤卦也。其初六者。一陰之始而與坤初六同。臣弑其君。子弑其父。非一朝一夕之故。其所由來者漸矣。是也。十月賊勢大振。若坤卦純陰用事之月。極則必變。是將亡之策也。十一月軍破者。一陽來復之初。小人道消。君子道長也。其爲日也。又十一也。寔冬至後二日也。言其年數。則十有一年。言其月日。亦同其數矣。易之言也。如合符節。余適講史記項羽紀。而河內賊盛。高祖紀而防登濃諸賊一時敗亡。不亦韙也哉。文明丁酉十又一月十四日記。

江守—守は寺か(作者自記)

これその時の實錄にして、應仁記を補ふべし。

(二十)去年の秋、深川のある書肆の、朝鮮本の「法華科注」二卷を持來り示す。上層并

蜡月―十二月
人日―正月七日

に傍注を書いれし書もまた拙からず。蠹のはみたる所せく、全部八卷ありて、價も又貴しとときけば歸しぬ。ことしの春、書肆曬書堂全部をもて來しをみれば、同じ本なりしが、事しげくてかへせし後、重て持來りて、此經あまた所にみせたれども售れず、今は價もひきくなりぬれば買ふべきやといふ。三たび同じ經の來れるもめづらしく、その奥書をみるに左のごとし。

余曾托法住院景春藏局曰。若逢鬻法花科注者。請告而知焉。前年蜡月二十七日。景春以好本被送。雖不堪舞踏。以闕第一爲恨矣。翌年人日雲頂院仁如藏局。相過見之歎賞。且曰。往歲店上見一卷於故帋堆中。不知猶在也否。待我遣人搜之。須臾仁如蒼黃自携來。則如合符。不亦異乎。聞此經者。應仁亂後。西陣除饉男某得之。而施與於慶雲僧某。其端闕者殆數十年也。嗚乎余何幸不出十日以補之乎。屏山先生所謂。神寶去來自有定數。不可以歲月而測焉。寔知言者也矣。時永正戊寅孟陬上浣日。東樵瑞佐。書于相國寺裡長得禪院。

永正十五年戊寅より今年文化十四年丁丑にいたるまで、三百年にみてり。應仁の亂の後、西陣の人慶雲の僧に施せしとあれば、三百五十餘年のものなるべし。其後織田、豐臣の代をへて、今の世まで傳はりし事、めでたき經にあらずや。況や朝鮮征伐の時など、かの國にありても恙なかるべしや。わが家父祖の時より此經を信じたまひし値遇の緣にもやと、速に買ひ得て家に藏む。實に文化丁丑四月二日也。

(二十一)僧虎關の「濟北集」に云、予少して黃山谷の書を學ぶ。戊申の年の夏元國にゆく。歸る時眞本を得て歸る者あり。數々の舶數本を持來れり。予之を怪しみ思ふ、昔泉涌寺の芿師山谷の書を好み、宋の盛なる時、宋國に留る事十三年にして歸し時、篋中の墨本數千紙。皆眞蹟にあらず。今をさる事百年にして、何ぞ眞蹟の多きや。遠游の者のいへるは、今元朝の士大夫黃山谷の書を好まざるが故に、敝じて此方に入ると。嘉曆二年の文に見えたり。

(二十二)「本朝文粹」に、都良香が道場法師の傳あり。敏達天皇の時尾張の國に農夫あり。夏の頃田に水をそゝぐ時、空くもりて雷雨せしかば、木蔭に耒を支へて立ちしに、雷おちぬ。形小兒のごとし。農夫耒をあげて擊んとせしに、雷かたりていふ、汝われを害せずば、汝に恩を報じて、汝がために異なる兒を生ぜしめん、といひしが、いくほどなく

てその妻男子を生めり。年十餘にして甚力あり。元興寺の鐘堂にすめる鬼を殺せり。童子僧となりて、道場法師と號せしよしをしるせり。今に小兒を怖す諺に、元興寺にかませんといふは是なり。寶暦五年乙亥、聖武天皇千年の御忌に、南都元興寺にて開帳ありし靈寶の中に、古き面あり。其形左のごとしといふ。

道場法師一面龍雷五魂

八雷變相惡魔降伏神像

文宝[illegible]

(二十三) 文祿慶長の比盛に行はれし一節切尺八といふものあり。今はふくものまれなり。按ずるに、「羅山文集」(卷十九)、元和九年作

唐太宗貞觀年中。有起居郎呂才者。善知音律。依破陣樂舞圖。教樂工百二十人。被執甲執戟而習之。以寓偏伍魚麗之兵法。又造尺八八十二枚。而獻之。太宗大嘉焉。於是景雲見。河水清。協律郎張文牧。制景雲河清歌。名曰讌樂。奏之管絃。爲諸樂之首。其樂器若干數。尺八居其一矣。(中略)吾國近代有宇治菴主狂雲子一路叟者。并避世之徒也。俱吹尺八。(下略)

同書「餘音尺八記」に云、

我邦尺八形制者。擇奇生之竹。挑截本末。規摹矩。間一節上短下長。鑿桐其中。虛如解谷而無底。四孔在面。一孔在背。炳表點縣。睆裏順樸。大於笛稍短。而竪吹之焉。頃有大森宗空者。善吹尺八。嘗手自截一管。聲調適意。號曰餘音。蓋取諸赤壁客吹洞簫。餘音嫋々不絕如縷之語也。宗空平日雖造若干管。然未有過餘音者。故祕之年久矣。堀丹州太守爲政講武之暇吹尺八。宗空於是取餘音以呈焉。(下略)

按ずるに、一路老人の名は、僧横川が「京華集」(卷四)にみえたり。

依一路老人詩韻

白髪高僧來得々　茅椽雖小有三條一　迎川蘊苴梅横水
送濟風顚雪滿橋　尺八數聲雲起處　尋常一樣月沈宵
扶桑國裏無二人會一　唉破山中旦過寮

又狂雲子は一休なり。一休自書の詩に、

一枝尺八恨難禁　吹入胡笳塞上吟一　十字街頭誰譜曲
少林門下少知音一

此詩狂雲集には見えず。

糸竹初心集に云、

一先一節切尺八は、其濫觴まち〳〵にてさだかならず。其かみ異人有て宗佐老人に傳へたるよし、代々いひ傳へたり。然しより、宗佐は高瀨備前守につたへ、備前守は三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森宗君に傳へてより世にひろまり、文祿慶長の比尤盛也。此宗君は、昔は豫州の大森彦七が末孫、勇士武略の後胤なり。織田信長公につかへて人に名をしらる。信長公逝去し給ひしより、ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ露をかなしむ觀念をこととし、尺八の

ぼろ〳〵
虛無僧

妙音を味ひ、此道中興開山となれり。流れの末をくむ我等まで、遺風をしたふといへども、夢にだもみず。わづかに其かたばかりをうつして、今書にしるし、宗君門弟の外、餘力有て音をしらべんと思ふ人の一助となさんとおもふのみ也。虛無僧尺八といふは、長尺八寸にきるゆゑ、尺八といふとぞ。濫觴はたしかに不レ知。そのかみ由良の法燈此道の祖たるよしいへども、了簡せず。昔よりぼろ〳〵の家に用るものと聞えたり。梵字、漢士、色おし、しら梵士などいひしもの、此尺八の修行者ときこえたり。近き比不人といふ虛無僧有て、ごろといふ事を吹出し、其外れんぼながし、京れんぼ、さむなり、井川、よし田など云さま〴〵の手有て、いづれも呂律の調子にあはせたる物とは聞えず。されども我道にあらざれば、其深事をしらず。

一、一節切尺八切やうの事。節を一つこめ、長さ一尺八分にきるゆゑ、此名を附といふ。節より下は七寸、上は三寸八分にきる也。但竹のふとほそによりて調子違ふものなれば、極て寸は定まらず。筒音を黃鍾の調子にあはせたるものなり。（下略）

此書二板あり、［寛文四年甲辰卯月吉日　秋田屋五郎兵衛板］と、［寛文十二年壬子林鍾日　中村宗三］

寛文九年板本　丈室摸寫

山形屋吉兵衛板」とあり。

洞簫曲（巻下）に云、

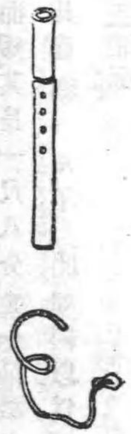
抑〻當流尺八者。宗左老翁相傳高瀬備前守。備前守傳實相房竝尼子同宮内少輔。實相房傳教院。教院傳大森宗勳大居士。宗勳傳愚以。愚以傳惠海。是相傳村田宗清。依一流之義者。無滯覺習畢。爲一毛所誤不可有之。予雖爲祕書。一向之所望依難默止。贈書之者也。

于時明暦三四月壬寅嚴島暫居賤所狹家　注記　大坂　村田宗清

（絲竹大全第四巻）「紙鳶」に云、

實相房は教院に傳へ、教院は安田城長につたへ、城長は大森宗勳につたへ、宗勳より中興して、今の世に是齋、宜竹、洞中節、指田一音など云あまたの吹手蜂起せり。

元祿十二己卯暦



「和漢三才圖會」に云

永田調兵衛板行

按一簡切。似尺八而短。其長一尺八分。止一節故名之。近世之製與尺八同類異音。遊興之具。其音嫋々不絶如縷。以爲謳歌之語。與三絃相比。

宇都宮由的が「日本人物史」に云、

大森宗勳翁

宗勳者。其先出自彦七。幼好音樂。頗以尺八鳴世。曲節無施而不可也。一日宗勳登樓奏曲。時有鳴鶯來和之。豈不同聲相應之謂乎。後陽成帝有詔。使宗勳製五調子之尺八。此名譽彌高矣。至今言尺八者。以宗勳爲法。

黒川道祐が「雍州府志」(巻七)土産門(下)に云、

笛尺八。所々造之。其内宜竹所作爲妙。近世指田某所造亦佳也。吹笛有數流。所謂牛尾流。一草流。守田流是也。尺八倭俗稱洞簫。今按洞簫其製與尺八異。考之。中華所謂短笛是也。倭俗專弄之。近世吹之有兩流。所謂宗左流。西實流是也。宗左弟子有理菴宗勳者。於尺八也。世稱美之。其次曰宗捃。今西實流絶。凡弄尺八者。多出自宗勳者也。尺八之發好音者。多有稱號。是謂名管。

村瀬栲亭(名之慰)が「藝苑日渉」(巻四)尺八の條に、委く一節切の事を辨じ、體源鈔を引きて、

尺八之制。凡六。曰黄鍾切。曰盤渉切。曰壹越切。曰雙調切。曰平調切。曰新黄鍾切。切者國語云調律裁管也。蓋管之長短。依律損益。最短者爲壹越切。(俗讀云非都越祇黎)長曲尺一尺一寸。最長者爲平調切。長曲尺一尺四寸。近世所傳。唯壹越切之一管耳。余幼時猶有善此管者。今之尺八笛盛行。而壹越切遂廢云々。

天明の比深川にすめる調理家望汰欄のあるじ祝阿彌、一節切を學びて吹しが、名管の世にすくなきをうれへて、今の世に一節切を吹ものすくなくなりし故、古人の銘ある管多くは茶人の蓋置にきられて失へり。といへり。惜しむべきの甚しきにあらずや。

市橋家の臣山崎(正峰)の所藏一節切十九枝。

柯亭銘　黄鍾調　三百年來の物なるべし

無銘　樺卷　同　四百年來の物なるべし

新枕銘　同　紹窓作

鶴舞銘　黒塗樺巻　同
無銘　樺巻　同　法橋宜竹作
鶴音　鳧鍾調　法橋宜竹作
無銘　樺巻　神仙調　法橋宜竹作
同　同　鸞鏡調　作不知
七夕銘　同　黄鍾調
山里銘　黒塗樺巻　鳧鍾調

吹おろすあらしならではとふ人もなぐさめがたき秋の山里　歌蒔絵

初郭公銘　黒塗樺巻　黄鍾調

我も人も卯花垣のへだてなく聞くぞうれしき初ほとゝぎす　歌蒔絵

無銘　蕪蒔絵
浦風銘　樺巻　黄鍾調
妃聲銘　同
此君銘　同

無銘　樺巻　同
雪山銘　同　同
寝覚銘　黒塗無樺巻　同
なら柴銘　同　同

尺八笛箱

筥　黒塗　秋草蒔絵　東山の比の物なるべし
同　同　鶴頭蒔絵　東山の末の比のもの歟
同　絡石　銘書　裏書　蒔絵
江州中野蒲生氏。城跡古木定家かづらもて是を造る

今の世に殘れる名管は悉く山崎氏に藏む。數十年の精力を盡て是を得たりといふ。文化十三年丙子十一月二日夕に一見する事を得たり。又永祿年中の古文書「洞簫曲」に載する所と同じ。尺八十二調子之次第、

一越　●　●　●　○　○
斷金　●　●　○　●　○

平調	●	●	○	○	●	●	○	○	●	●	○
勝絶	●	○	●	●	○	○	●	●	●	●	●
下無	●	○	●	●	○	○	●	●	●	●	●
双調	●	○	○	○	●	●	○	○	●	●	●
鳧鍾	○	●	○	○	●	●	○	○	●	●	●
黄鍾	●	○	●	●	○	○	●	●	●	●	●
鸞鏡	○	○	○	○	●	●	○	○	●	●	●
盤渉	○	○	●	●	○	○	●	●	●	●	●
神仙	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
上無	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

永祿九年閏八月日　　清彌

按ずるに、大森宗勳の名、元和の「羅山文集」に宗空とあり。寛永の「尺八手數目」といふものに宗勳とあり。明暦の「洞簫曲」に宗勳とあり。寛文の「絲竹初心集」に宗君とあり。享保の比ある人の記せる尺八譜引書に宗薫とあり。いづれも代々ソウクンと號せしなるべし。山崎氏云、宗薫の名三代に及べり。初の宗クンは名人也。中の宗クンは多能なり。末の宗クンはさもあらざりけりと云々。又一節切尺八は洞簫にあらざる事、委く「藝苑日渉」にみえたり。

（二十四）「榻鳴曉筆」に云、

調子肝要事。觀應年中、後醍醐天皇兩六波羅を亡し、帝道を再興せんと思召せども、終に南方に引籠り玉ひき。其頃樂人豐原龍秋と云者有。文筑後が先祖也。樂の名人也。宮商の調子を伺ふに、宮がしづみ、商がかるゝ程に、タツアキ是を不審す。又大原に聲明者のなにがしの僧都、聲明の宮の調子がしづみ、商の調子がかるゝ程に、是を不審して、京へ被上。タツアキは大原へ行くに、賀茂河原で行逢たに、是を互に語りて、不審はれずしてはてた。さて宮は君の位也。商は臣下の位也。宮の天子は南方に引きこもり、商の臣たる武士は都を取り、故に天地宮商角徵羽の五音と通じた物也。人君の心惡ければ、夏も寒く冬溫也。

（二十五）明譚友夏（名元春）「答李長叔表兄書」に云、

又平嘗好爲人涉筆。作帋箋數字。而知與不知。固來相强。敗楮退筆率滿

床几。刻期追索。有如連一負。虚火攻中。對飯不食。常自思惟。日月逝于上。體貌衰于下。前有未了之事。現有當卜之歡。而枉費精神。供人之一刻之求。眞有何益。不如已之。已之不信。遂作一札。有來乞者。擧以塞之。此既一事矣。云云。

とあり。予が平生人に書を乞はるゝ事多し。此書をよむにいたりて嘆息にたえず。此方の人は、一札をつくりて責を塞ぐとも、中々に聞いるゝ事かたかるべし。

(二十六)「聯珠詩格」、周南峯閩浙分水界の詩あり。

古驛頹垣不記春　隔籬雞犬舊比鄰　東家纔過西家去
便是閩人訪浙人

此方の美濃と近江の寢物語に似たり。

(二十七)「元史類編」に、「貴竹有呼應泉。呼之水卽湧出」。按ずるに、美濃の念佛橋の類なるべし。

(二十八)今江戸目黑の事を、延寶板の「江戸案見圖」に、妻驪と記せり。詩人驪山と名づくるもこれによれり。按ずるに、「仁部記」(權中納言資宣卿)弘長元年七月の下に云、「御牛妻黑(炎暑天爲用意。今一頭二文字內々儲之。)」とあり。之によりてみれば、妻驪は黑馬にあらずして黑牛なるべし。又「長秋記」(皇后宮權大夫師時卿)相撲人名「九番左伴固季。武藏國住字目黑丸。」とあり。此地より出し人なるかも知るべからず。

(二十九)梅岡松村子長(名延年)云、孟子に滕國壤地褊小なることを云。今山東省袞州府の滕縣は、古の滕國の地也。(古今四竟、一彼一此、沿革出入もあらん。今の界を以てしるす。)今淸朝の書に、滕縣の租稅の數を載るに、徵銀四萬二千七百四兩、雜稅二百五十兩、米九百八十二石、とあり。是公儀へ取箇の數也。其四萬二千七百四兩は、今日本の金にして七千百十七兩一歩五匁也。(中華の銀一兩十匁)雜稅銀二百五十兩は、此方の金にして四十兩二歩拾匁也。(金相場今の六十匁のつもり)兩件合せて金七千百五十七兩五匁也。米九百八十二石は、此方の現米四百九十一斛也。(中華の量半分也。其一石は此方の五斗也。)此米を金にして四百九十一兩也。(金一兩に一斛のつもり)前二件を合せて都合金七千六百四十九兩五匁也。是を倍にして(中華は正銀通用、今日本の南鐐と云ものなり。此方の銀賤しき故、唐銀一兩の所へ、此方の文銀二十匁のわりの勘定なり。)一萬四千三百三十三兩五匁也。然れば滕文公は、今日本の大名にしては四萬石ばかりの身代也。褊小

と云こと宜なる哉。按ずるに明張鼎が、「山中讀書印」に云、「吾過滕縣見碑刻滕文公行井田處云々。」

又云、「漢書食貨志」に、穀の中價を云て、石三十とあり。漢代の米一石にて銅錢三十文の相場を、平中の價とつもりたり。漢の一石は日本の一斗弱也(九升九合八夕二撮に當る。)然れば此方の一石にて三百文也、此方の一石の價金一兩(六十匁)と云ふもの中價なれば、漢の一石平均此方の六匁也。(漢の穀を米としてつもりたる也。もし粟ならば、今少し價宜からんなれども、倍には至らじ。漢書には穀とあれば、粟やら米やら知るべからず)銅錢一文は此方の銀二分に當る。(金相場今の六十匁を用てつもる。漢の時似せ錢を鑄、又は錢の鎔をすり取の盜あり。是にて漢代錢の貴きこと知べし。)又云、漢の時諸侯の封地より納むる租稅一戸より銅錢二百文づつ也。(此方の銀四十匁なり。)千戸侯なれば一年の收納二十萬錢、卽銀四十貫目也。金にして(一兩六十匁のつもり)六百六十二兩二歩拾匁也。日本武家の祿にして(一石金一兩のつもり。)僅千六七百石ほど也。是祿にて千戸侯の朝覲聘享より、衣食祭祀病喪音信、奴婢の給分、牛馬の飼料、諸器雜用居宅の修理等まで、一切營辨せしなれば、漢代諸物の價甚だ下直なりしことと知べし。同志に云、衣人率錢三百とあり。今此邦の極下賤のつもりにして、綿布五端(綿入一つ袷一つ單もの一つづつ)綿花百五十匁(冬衣の料)を用べし。右の三百文にて營辨すべし。綿布一端にて銅錢五十文ならん。(今日本の銀十匁)

又云、漢の昭帝崩じて御子無ゆゑ、昌邑王賀を天子に立しに、行ひ淫亂なる故、太后の詔を以て廢し、湯沐邑二千戸を賜ひ、故邑へ歸し、宣帝を立たり。後宣帝心内に賀を猜忌したまひ、山陽太守張敞に璽書を賜り、昌邑故王の狀を察せしむ。張敞昌邑に行て故王に對面し、委細樣子を言上す。其書中に云、奴婢中に在もの百八十三人、妻十六人、子二十二人とあり。(漢時妻妾の目混ぜり。)王の身共に都合二百十六人也。又王より錢を出し人を雇うて夜巡りをさすることあり。其湯沐邑二千戸は、(一戸日本銀四十匁のつもり)八十貫目也。金にして(六十匁一兩なり。)千三百三十兩餘也。今武家の祿にすれば三千五六百石の身上なり。此祿にて貴賤二百十六人の衣食病喪諸雜用。居所の修理、夜巡の雇錢まで營辨すれば、漢代諸物の價下直なること、此文にても見ゆるなり。

(三十) 清の乾隆四年(此方元文四年)麒麟の出し事あり。左につまびらかなり。

乾隆四年二月一日午時。鳳陽府靈璧縣。天產麒麟麕

身牛尾馬蹄五彩。腹下黄。一角々端有肉。縣宰卽繪圖
申報。進呈
御覽。

東呉程致遠臨

雷州縮圖

一乾隆四年二月。牛産麒麟於江南省鳳陽府靈壁縣民間王煥文者家。因民間不敢隱藏。即速呈報官府。官府著畫圖形。即刻進上北京御覽。將此麒麟進上

帝都之後。即放之内苑。此事恪因傳聞。特於官府衙門内。設計覓求圖樣。即託畫師程致遠。臨而帶來。但此麒麟乃王煥文所蓄之牛。同龍交而所産。因今乾隆帝極是聖明之君。萬民稱爲小堯舜。故天産此靈獸。以顯其瑞耳。

元文四年六月　日未第六番廣東船主龔恪中具

一乾隆四年當二月、江南省鳳陽府之内、靈壁縣之民間王煥文と申者の所へ、牛麒麟を産申候。民間に是を隱し置候事難し成御座候に附、其節右の者、所の官所へ訴出候を、官所より繪圖を以、早速北京へ差上、入御覽申候。其後右の麒麟、帝都に差上候處、内苑に被召置候由に御座候。右の段私承り候に附、此繪圖も官人に手寄を以相求。則程致遠と申畫師に寫せ候而持渡申候。且又右の麒麟は、王煥文飼ひ置候牛産之申候。牛と龍と相交候而産み候由申候。尤唯今乾隆帝殊外聖君に而、小堯舜とも萬民相唱へ候程に御座候。依之天右の靈獸を産し、其瑞を顯候と申候。

元文四年六月　日未六番廣東船頭龔恪中

唐通事二人

按ずるに、乾隆帝、乾隆元年丙辰（此方元文元年）二十五歳にして即位ありしより、同六十年乙卯九月、在位六十年、八十四歳にして皇太子に傳へ、明年丙辰（此方寛政七年）を以て嘉慶元年とす。乾隆四十六年辛丑著す所の「欽定蘭州紀略」にいふ、

朕即位初年。戸部庫銀不過三千萬兩。今四十餘年以來。仰荷上蒼嘉佑。年穀順成。財賦充足。中間普免天下地丁錢糧三次。蠲免漕糧兩次。又各省偏災賑濟。及新疆兩金川所費。何啻萬々。而賦稅並未加增。非如漢武帝用桑弘羊。唐德宗之用裴延齡。以掊克爲事而致府藏充盈也。現在戸部庫銀。

尚存七千萬兩。朕又何肯稍爲斬惜乎。且卽以歲支頓增三百萬計之。至乾隆六十年歸政之時。所用不過四千餘萬兩。加以每年歲入所存。其時庫藏較卽位時。自必尚有盈餘。云々。

財用は國家の要なり。十四年以前にあらかじめはかる所、思ふにたがはざるべし。その代のはじめにかゝる瑞ありし事も、また宜なるかな。

南畝莠言跋

我師からもゝの園の大人、年比この國かの國のふる事ども、何くれとなく書あつめおき給へるを、此まゝにうちおかんもいと念なく、人にも見せまほしうて、大人へその事きこえまゐらせしに、さらばおのれにものせよと宣ふまゝに、なりはひのいとまあるをり〳〵これを拔書しつゝ、ふみやのあるじとはかりて、木にゑらせつるを、一わたりみ給ひて、南畝莠言と名づけ給へれど、これはしも、もとよりはぐさにあらず。此草一たびつむ人は、二たびつまん事を思はん。摘にしたがひてをかしきくさぐさ、さま〳〵なることのはどもあ、またおひ出なん。されば維莠驕々として、やがて世の中にはひひろごりぬべし。かゝる事、つたなき筆もてしるせるもをこがましく、謝肇制がいひけん、莫廷韓は書才ありて書學なし、

邢子愿は書學あれども書才なしとか。おのれは書學もなく書才もなく、たとへば時にあたれるわかうどらが、わざをぎの聲まねぶにひとしく、いと益なきわざにしあなれど、師の宣ふ事いかゞはせん。これやことわざにいへる、目しひのくちなはにおそれざるたぐひならんと、みる人わらひ給はんかし。

文寶亭しるす

俗耳鼓吹序

からうたの鼓吹俗耳のいしばりとうち誦しつゝ、肴なりける小柑子をとりて、酒たうべてや聞きはやしけん、唐人の鶯にはあらぬ、濁みたる聲に鳥がなく東訛に、いひ傳へたる都のてぶり、書いつけぬれば、かの大なる聲の里人の耳にいり難き類にはあらじとてなん、俗耳鼓吹といひ侍るもかたはらいたしや。

天明八のとし水無月

杏花園

俗耳鼓吹

惰農子著

のろまの玉子ー馬鹿の芽ばえ

○地口變じて語路となる。語路とは、詞續によりて、然もなき事の、其ときこゆる也。たとへば、

九月朔日いのちはをしし

「河豚はくひたし命はをしし」と響の聞ゆるなり。

市川團藏よびにはこねえか

「うちから誰ぞよびには來ねえか」と聞ゆるなり。

一年淺草正直蕎麥の亭にて語路萬句あり。その時宗匠の句、語路萬たま子也。のろまのたまごといふ事なるべし。此頃の佳句とて、人の物語せしを聞けば、

田舍侍　茶店にあぐら

「死なざ止むまい三味線枕」なり。

ぶざな客には藝者がこまる

「芝の浦には名所がござる」なり。

○金羅（俳諧宗匠）が點は、言懸の句を好む故に、卷中の秀逸に、言懸の句多し。思出して一二をしるす。

お目にかゝるはお初徳兵衛

あはれ柳の下へうめ若

姉女郎に顔も二丁目

夕べも一人きりしたん坂

朝々粥をくふや上人

猿寺の下は赤城の組屋敷

鍋島の尻は黒田の表門

組やしき通りぬけすべからず

市川團十郎三升、市川八百藏の後家と（名はおるや）密通の沙汰ありし時、

金羅—夜雪菴

二町目—第二流

くふや—空也

猿寺—江戸牛込

八百藏が後家へさんじやう仕つり（三升参上）鬼娘の見世物ありし時、

きぬをめくりの鬼のみせもの（メクリカルタの札に鬼あり）

してやんしてどうした、といふ歌流行りし時、

駈落をしてやんしたがどうしたへ

この金羅は、

首を斬られにきたの御番所

にくいやうでも川井次郎兵衛（其頃御勘定奉行にて高名なり）

といふ句が高點にして出せしを　宗匠仲間衆議して、禁忌の句なりとて大に恐れ、金羅を破門せしといふ。

○戲場の切落の天井は竹の格子也、名づけて葡萄棚と云ふとぞ。

○信濃善光寺如來、回向院にて開帳ありし時、（安永七年戊秋なり）川柳點の前句に、

後からゆるい髪だと如來言ひ（本多髷の事をかくせり）

二菩薩は歩かつしやいと本田言ひ

切落—看客を容るゝ所の一部分

曾我祭―五月二十八日芝居にて曾我兄弟の祭を行ふ

善光も初手は河童とおもつて居

○（此一項省略）

○宴席の戯に、衆人頭をさげてドグハンスウといふて、一度に頭をあげ、いろ〳〵の顔つきをなすをドグハンスといふ。是は藤屋伊左衛門夕霧が許にて初めてせし戯なるよし、平賀鳩溪の話なり。

新町細見澪標には、藤屋伊左衛門と云ふものは、作りものなりといへり。

○古今の事を附會して、時代違ひの咄をなすを青特といふ。是は龜成といへる俳諧の宗匠の始めたる事也とぞ。青特は龜成が號なり。（龜成が墓在牛島弘福寺）

○俄と茶番とは似て非なるもの也。俄は大坂より始る。今曾我祭に役者のする、是俄なり。ナンダ〳〵と問はれて思ひ附の事をいふ是なり。茶番は江戸の戯場より起る。もと樂屋の三階にて、茶番にあたりし役者は、いろ〳〵の工夫を思ひ附き、景物をいだせしを、茶番々々といひしより、何時となく今の戯場になれり。獨狂言の身振ありて、その思ひ附によりて、景物を出すを茶番といふなり。今專ら都下に盛也。（大坂板に、「古今俄選」といふものあり、俄の事を記せり。）

菱川吉兵衛―師宣

○元祿の頃の板にて、「月次の遊」といへる繪本ありて、菱川吉兵衛畫也。中に芝居の顔みせの事をしるして、つら見世といへり。

○歌舞妓の役者の異名ある事、もとは少かりしが、近頃にいたりて甚多し。二朱判吉兵衛などこそ人もよく知りたり。その外にもありしや聞きもわたらず。

親玉　四代目市川海老藏・小玉　五代目市川團十郎

顔　篠塚浦右衛門　さまよ　松本大五郎

松伯　山下次郎三

猶あるべし。是もまた伏柴加賀、榎僧正の類ならん。

○塚越菜陽（二三次）は狂言の作に老いたるもの也。一とせ森田座の顔見世の名題に、

柏木の衣紋坂　梅津の掃部宿　蕁替月吉原

といへる柏木梅津の對聯、狂言の名對といふべし。此年（明和八辛卯）吉原火災ありて普請出來し比なれば、蕁替へてといへるなるべし。（蕁替てといふも狂言の詞なり。）菜陽かつて作れる狂言の名題に、其名月色人といふあり。此狂言よりして菜陽が作衰へたりといふ。其名も盡ぬるといへる讖語にや。今、月も吉原といへるは、祝ひ直せし意なるべし。

民間歌之―楊貴妃寵を受けし時のこと也
招隱の詩―文選

○「通鑑」玄宗紀、「民間歌之曰。生男勿喜女勿悲。君今看女作門楣」（門以楣而撑拄。言女能撑拄門戸也。）今の人はじめて女子を生るを賀して、門開きといふに似たり。

○予かつて風雪の朝爐邊にありて、最明寺雪の段を誦讀する事一過、左太沖が招隱の詩に代ふるにたへたり。

○淨瑠璃作者紀海音は、狂歌師油煙齋鯛屋貞柳が弟なり、と稻毛屋東作の話なり。

按、油煙齋狂歌集「置土産」の序に、愚弟紀海音堂貞峨とあり。

○紀海音が作に、青梅撰食盛といふあり。おちよ半兵衛の元祖なるべし。おちよ半兵衛の名を忌しにや、お長半平とありて、板行の本に、埋木したる樣に見ゆ。故に末の方ところどころに、おちよとありて、お長と直さぬ所も間々見え侍る。

第二段目に、半平が濱松へ行きたりし留守に、女房お長を姑が去りしを、お長が伯母は半兵衛も同意と心得、途中にて半平にあひ、恨むことば妙也。

しうとめごのさがなうて、取りにくい御きげんに、辛防するは何ゆゑぞ。男の顔を樂しみに、くらす女房に口出して、最負こそあるまいけれ、蔭日向になるほどの、氣骨は折てやられても、さのみ人はしかるまい。いふではないがかはいそに、物も見

ちんくー大睦まし

んごと縫ひまする。書出し一つする程の目は、親達があけておく。うみつむぎなら人あいなら、標致はこなたの覺えてなり。ちつとのおちめは派手なれど、若い時は二度はない、さのみ無理にもあらぬ筈。（下略）

手を書く事を、書出し一つとは、老婆の聲色、奇妙々々。末に七郎兵衛がことば見合すべし。きりやうは云はぬ處も、又妙也。

此はでの字、始終に照應あり。此所に島原の駈落ものにまぎれて、追手のかゝる所あり。これも此はでの字に眼をつくべし。この次に姑のことばを書き抜き置く。見合すべし。

同所お長が詞、

此世の縁はうすくとも、未來はながくそふべしと、たのしみにした我身をば、むごくと計半平を、じつと見やりし目の内に、恨と戀の二瀬川、みちくるしほぞ涙なる。

深情妙語、多言するに及ばず。妙々。

第三段姑のことば、

アヽ太郎兵衛樣よい推量。半右衛門殿（半平養父なり）は佛樣。めうとの中はちんち

ん。いなしたは此母。お前の様なよい衆の嫁子にしては似合はふが、此方づれの内にて、飯をも炊かにやならぬ身で、はだには小袖、はながみは、のべでなければ手にふれず。わしらはお寺の奉加さへ、百目の銀は太儀なり。五兩とやらの櫛をさし、鳥かぶと程つと出して、太夫の道中する様に、せばい所を八文字、そこらあたりの青物は、踏みつぶされて芥になる。（下略）

この姑がいふ詞を、半分はかけねと見ても、よほど派手とは見えたり、はじめの伯母の口からも、おちめはちつと派手なれど、と見える位なれば、姑の丸で無理ともいひがたし。

七兵衛にじりより、（中略）どこを聞いても其様に、よい事計はそろはぬ物で、身共が嫁は隨分と、世體はようする、歩くにも、八文字は踏まねども、一文字をえ引かいで、是も又きのどく。（下略）

一文字をえひかぬとは、始の書出し一つかく程の目は明いてゐる、といふお長が手をかく事に對していへり。細か〳〵。

右の通りのこまかき文章の照應、一々かぞふるに遑あらず。後世の作者も斯る文段ありや。如何々々。

道行のうちに、お長半平が辭世をのせたり。

はる〳〵と濱松風にもまれきて涙にしづむざゝんざの聲　半平

古へを捨ばや義理も思ふまじ朽ても消ぬ名こそ惜しけれ　於長

○松葉屋瀨川を、烏山撿校が請出せしより後、天明二年寅四月朔日、つき出し瀨川いできたり。

竹村蒸籠自分明　松葉屋中第一名　撿校昔時金已沒

瀨川今日水猶清

松ばやのちりうせぬ名をつき出しや瀨川の水に蒸籠の山

となんロずさみ侍りし。

同三卯年秋、瀨川を後藤手代のもの請出せしよし。（千五百兩をもて贖ひしといふ。）

同四辰年四月朔日、瀨川出來る。（このもと云ふ禿也。うたひめが禿なり。）

天明八申年三月、瀨川請出さる。主は松前公子文喬也。五百兩也と云ふ。

同四月朔日より、瀨川といへる出來る。

後藤―金座
後藤庄三郎

わつと一輪にかけたり

望陀欄―當時の有名なる料理屋

○すまひ人谷風梶之助、(與四郎)身のたけ[　　]力強くして、一度も負くる事なく、淺草藏前八幡の社内にて、相撲ありし時、小野川榮藏にはじめて負けたり。天明二年寅三月二十八日の日なり。

手練せし手をとうろうがをの川や勝つと車のわつといふ聲　菅江

谷風はまけた〳〵と小野川が鰹より直の高いとり沙汰　赤良

○同じ年彌生五日の日、祝阿彌、文竿、五淩など、洲崎のほとりを逍遙し侍りしに、秋葉の宮居の内に、猿をつなぎおきたり。めぐりに垣結ひまはして札を建てり。讀みてみれば、「猿の近所へよるべからず」とあり。童などのたちよりて、いろひなどして怪我あやまちもやありし時、親のむづかり言ひけんに懲りて、かゝる札をや書きて置きけん。いとをかしかりき。

○ひと日洲崎の望陀欄にて、酒に醉ひて物かくとて、硯の左にありけんをも知らず、書きはてぬれば、あるじ祝阿彌いとをかしがりて、戯言をかきて見せ侍りき。

白雲が柄袋は旅にあらず。赤良が硯は右にあらず。

○いつぞや四谷邊にて、「三國志」を講じける講師の、ある日門に札をはれり。「今晩より孔明出る。」

出合

藏前八幡の普請小屋に(天明四年)「でやい無用」といへる札はりてありし。

○「小便無用」、「車無用」等の札は見なれたれど、一年牛の御前の堂の上に、をかしき札をたておけり。「堂の上にて晝寢無用」とあり。その寂しさ是にておしはかるべし。

又牛込改代町の路次に、「がらくおくべからず」もをかし。がらくとは骨董也。

「寛政二年八月朔日より、築土明神八百五拾年忌、平親王將門御玉首也」といふ札もをかし。

○浪花の一本亭芙蓉花は狂歌に名あり。ことし(壬寅)東に下りて、淺草觀世音の堂に、一つの繪馬をさゝぐ。自ら寶珠をゑがきて、傍に狂詠を添へたり。

みがいたら磨いただけはひかるなり性根玉でも何の玉でも

ある日何者かしたりけん、一首の落首をなしおけり。

磨いてもみがいただけは光るまじこんな狂歌の性根玉では

京都にても落書あり。

光ろかの蒟蒻玉も藍玉も炭團玉でもふぐり玉でも

訥子—澤村訥子
表德—號

○小祿の事を稱して、はつち坊主の報謝米ほど、といふ名言は、訥子が由良之介となりし時云へるといへど、それより前に、近松作の「大經師昔暦」中の巻に、梅龍といへる講釋師のことばに見えたり。

○一日、今戸橋のかたへの船宿にいこふ。壁にかゝれる帳あり、題して曰く、「客人大人帳」。

○「現金かけねなし」の、「かけ賣不仕候」の、といへるは聞きたれど、髪結床の定書ほどをかしきはなし。「懸職一切不仕候」。又青山の餅屋の見世に、「居喰不仕候」もをかし。

○淺草日輪寺にて、能狂言をなして見物させしが、見るものなし。

落書

狂言に能なし猿があつまりて見ざる聞かざる入はあらざる

○竹本住太夫俗稱は田中文藏、(表德文起)石町に住居す。

○局岩藤中臈尾上鏡山舊錦繪(容楊黛作)天明二年寅正月より中芝居(名代薩摩屋小平太、座元豐竹新太夫)座にて大あたり也。此時、竹本八重太夫下りて、堀川の段をかたる中に、猿の場大あたり也。その唱歌、

猿廻し傳兵衛近頃河原立引に見ゆ。

お猿はめでたやな、婚入姿の、のつしりと〳〵、詞コレさりとは〳〵、ノホンホヨホ〳〵、あろかいな、さんなまたあろかいな、合の手コレ〳〵〳〵、戴くものじやさかづきを、さんなまたあろかいな、合そこでおはつが戴くものじや、コレ戴くのふ盃を、さんなまたあろかいな、コレ嫁御のひるねは、ころりとせ〳〵、ナァコレ、ノホンホヨホ〳〵、あろかいな、えいコリヤ〳〵、ヤイコリヤ、さりとは〳〵、ノホンホヨホ〳〵、あろかいな、合起きたら、たがひにだきつきやれ、オヽそれで機嫌がなほつたぞ、キツ〳〵、あろかいな、さんなまたあろかいな、合くるりとかへつて、立つたりな、立つてくれ、コレ〳〵〳〵、立たしやませ、ついでに日和を見てたもれ、よい女房ぢやの〳〵〳〵、ノホンホヨホ〳〵、あろかいな、さんなまたあろかいな、合日和見たらば、起きてたも〳〵、そうじや〳〵、お猿めでたやめでたや。

この猿廻しのうた、竹本八重太夫かたれり、大に流行せり。八重太夫俗稱泉屋平兵衛、人皆いづ平と稱す。

文化五年戊辰、中村歌右衛門（芝翫）中村座に下りて、この猿廻し大あたり也き。

○去年（辛丑）あたりより、京都にてはやりし歌とて、文竿の見せ待りし。

三下り

「しやうなら〳〵くぜつをしやうなら、宵の内にしやれじや　合上　あけのからすがなくといな、中なほりするまがない、くちすふあひだに、あけむかひのかごのしゆが、やかましういふ、やかましい〳〵、やかましいのめい物茶きん餅。

「しやうなら〳〵、喧嘩しやうなら、さめざや新介、かりがね文七五人組、濡髪長五郎放駒長吉、黒舟の忠右衛門に、ざぜんの庄兵衛ざぜんの庄兵衛、庄兵衛のさるもん薄雪さ。

庄兵衛のさるもん―園部の左衛門のしやれ

○この頃酒宴にもてはやせる歌、

「そも〳〵われらは、西の宮の夷三郎左衛門の尉、色の黒いが大黒天、顔の長いが福禄壽、頭巾々々かぶつて、おいこみ姿の親仁どの、言はねど知れし壽老人、布袋はどぶつ、その中に、合美くしいのは辨才天女とほめたれば、そこで毘沙門はらをたて、そこで毘沙門腹をたて、なぜ譽めたなぜ譽めた、七福神のその中で、辨天ひとりをなぜほめたと、いうたも野暮かいな、わらふ門には福來る。

「そよ〳〵風にさそはれて、はぎもあらはに、ねみだれて、ヨイ〳〵〳〵ヤサ。アリヤサ、ヨイヤサ、ヤツトセイ。（此歌をうたひて手拍子をうつなり。）

○（此一項省略）

近松戯文評　（惰農子著）

曾根崎心中―近松の心中物のはじめ

○「曾根崎心中」徳兵衛おはつ上巻、徳兵衛縁の下に忍び居、おはつ足にて喉を摩づる所妙々、可斷腸。下巻

此世のなごり夜もなごり、死にに行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢のゆめこそあはれなれ。あれかぞへてか曉の、七つのときが六つなりて、のこる一つがこんじやうの、かねのひゞきの聞きをさめ、寂滅爲樂とひゞく也。

祖來先生云、近松が妙處、此中にあり。外は是にて推はかるべしと、宇佐美惠助（名は惠、字は子廸）の話也。

「摩訶十夜」に云、

涼菟―俳人岩田涼菟

一曾根崎心中の道行の中に、何々として何々と死に行く身の道の霜、一足づつに消えて行く、と云ふ所迄作りしが、言葉盡きて心たらず、いかに〳〵と案じほけたる。其頃伊勢の涼菟嬉に來合はれけるを悅び、いかゞして取續けんや、御助言し給へ、と投かけたり。菟叟聞きながら、外の咄して酒飲み、物云ひて笑ひ遊ぶ。門左衞門只管にすゝめて賴めるにぞ、菟何やかや雜談しながら、夢のゆめこそはかなけれ、となりともやり給へ、と云ひしに、近松大に悅び、やがて作り入れしとなり。まことに詞情の盡きたらんに、いと佳く轉じたる文體、すら〳〵として、行跡のいがやうにも取つけやすき、元彼決前生後の文法。涼菟は奇異の作者。

明和二乙酉年八月板

右は古素堂五十周忌追善之俳書、右小石川紅東自書。

怪胎―奪胎などの誤か

○「嫗山姥」（五百番之内）全篇、賴光の逡巡退避を以て文をなす。第一段、惜むらくは敵をうつ事早し。第二段、姫の奥へ入るところ、散しの妙を得たり。不如此則山姥となる事あたはず。第三段、美女御前以怯割愛、讀髻中書而始識其志。一哀深於一哀。第四段、山姥必ず奥を見まいぞと云ふ、是安達原の怪胎也。第五段、無味。

詹々―多言する貌

○「百合若大臣野守鏡」後世義太夫本の名に似たり。第一段、第二段、さして評すべき事なし。第三段、有馬湯處、此老本色、子竊父刀、使人感泣。別符殆死於浴室、忽如脫兎。奇々怪々。第四段、島中事妙々、鷹化爲女妙一層。母子情態、宛然如睹。俊寛島物語及道滿大内鑑子別等、不能出於此範圍中。第五段、僞盲女餘波可笑。

○「淀鯉出世瀧徳」（小言詹々たる者）

上　卷　名言、

こゝぞうき世のだての大木戸、あけぬは銀のこがしの關、それつら〳〵おもんみれば、

狂　文、

大じん容衆の秋の月は、小判の雲にひかり、小傳よびましや長へんじ、おどろかすべきよはもなし。

滑　稽、

新町橋のはしのうへ、橋辨慶が長刀の、さや落したるごとくにて、うろ〳〵として

立たりしが、

下　卷　妓東殺客藤五郎之條下、

詞「ヤアこりや、なんで殺さう及物がない。帶を解いてしめころさうか。いやゆるりとする間は有るまい。烟草でふすべころさうか、醉うてさきへ此方がしなう。

評云、痴態妙々。

本庄―本所

○本庄押上村、長行山大雲寺に古き石塔あり。

寛文十二子年

寶安林清信士　　中村長十郎

十月廿五日　　十七歳

七三郎―名優中村七三郎

如此紋ほりてあり。今の七三郎が紋　也。その先祖歟。

寛政十一年己未九月一日、大雲寺へ立寄り見るにこの墓あり。

此寺に役者の墓多し。瀬川菊之丞代々の墓あり。委くは瀬名氏の役者墓詣に見えたり。

寛延二年九月二日

圓學院卽譽源阿是空居士

初代菊之丞なり。

寶暦六閏十一月十三日

功德院淵譽水阿仙魚居士

菊次郎なり。

寶永二閏三月十三日

正覺院響譽十阿方順居士

王子路考なり。

表德―號

○原富五郎（後稱武太夫）表德は原富、三線に堪能なる人なりけり。いつの年にてやありけん、市谷長流寺にて、原富の三線に白獅（市谷袋寺町一向宗淨榮寺先住）が尺八を合せて、道成寺の曲をなせしに、頃しも秋の末なりしが、空俄にくもりて雨降りけるとなん。此座にありあふ人々、その妙を感嘆しければ、原富笑うて、かゝる三線は、淫聲にて雅樂にあらず。道成寺の淨瑠璃、また古の曲にあらず。何ぞ天の感じ玉ふ事あらん。ほどよく雨のふりたるは、己が幸ひなり、と申しき。此時先新九郎、（鼓の名人）山彦源四郎、

（三線の名人）歌舞妓役者尾上菊五郎、（梅幸）市村龜藏、（五代目羽左衛門）も聞居て感じけるとぞ。

此時白獅が吹きたる尺八は、放下著といへる竹也。此竹長サ一尺二寸、もと越後國のある山僧、此竹をきりて所持せしが、これを吹けども音いらざれば、久しく床の間に置きしに、ある日秋風ふきて、その竹に入りしに、而白き音の出でたるを聞きて、その竹を吹き見るに、よき音出たり。それより二なく祕藏せしが、鈴寶寺の普淨といへる僧、尺八に堪能なりける者、之を借りて吹きて、返すとき甚だ是を惜み、放下著と名づけて返しけり。山僧其志の切なるにめでて、すなはち是にあたふ。普淨是を白獅につたふ。白獅死にいたるまで是を祕藏し、ある門生某に傳へしが、そののち門生死して、又淨榮寺（白獅子の住寺）に藏めけるとぞ。

寛政三年己亥上巳、同近郊庵主人觀放下著於市谷淨榮寺。

○坂東と吾妻との二の名字は、市村家の名字なり、と市村五代目家橘の咄なり。

○市村家橘、狂名を橘太夫元家といふ。天明五年二月十八日より、堺町へすけに出て、三ツ人形の所作事大入也。此時狂歌連中、三枚の摺物各二百枚づつおくる。これ芝居狂歌摺物のはじめ歟。

碪の辯

○月の前のヲ、マきぬたはア、マ夜さむをつぐるヲ、雲井のヲかりがねは、琴ぢにまがへて面白やア。（此間に手あり）夜半の砧は、時雨か雨か、うちつれだちて通ふ賤が家。是古代本手のきぬたなり。碪は秋氣にして平調の調子、行においては金をつかさどる。律はかなしむ聲に應ず。さればその心をもつて彈ずべきを、花やかに手をひく事になりゆき、聞く人もさまぐ手のある事とのみ覺えしは、大なるあやまりなり。名づけてきぬたとあるに心をつくべし。唐大和ともに、きぬたの聲は感情のものなれば也。又いはく、近世おしなべて長唄といふは、意味有ることなるに、其わけも辨へずして長唄とはいかなる事ぞや。

古歌に、

月前擣衣

小夜ぎぬたうつ音さびし秋風に更行く袖に霜や置くらん　兵部卿　長綱

あはれ又誰ゆゑ長き秋の夜に月にうらみて衣うつらん　爲家
夜をさむみ賤が衣をかりかねの聞ゆる空の月にうつかな　爲遠

右碪彈方、并七段獅子祕曲、傳授せし名曲、

長井谷助　金子氏世野女　勝原氏悅女　多田氏たち女　西川德藏　にしきや惣次
佐々木市藏　杵屋佐次郎

此外懇望に附、自筆して送り遣候名曲、

觀世古新九郎　市村羽左衞門　尾上菊五郎　山彥源四郎　山彥百次　高橋孫左衞門
小松屋三左衞門

安永元辰十二月　原武太夫盛和　行年七十六歳

○松江老侯（出羽の隱居也）葬送は、天明二年十月十三日也。

芝天德寺に葬る。高名の諸侯也。（辻々見物多し、餡うり抔出たり。）

墓の石扉に十六羅漢有り、榮川典信の下畫也。めぐりに櫻を植う。又退筆塚あり。

松江老侯―松平直政南海と號す、不昧侯の父

○すべて東都士太夫の家、慶弔の事ある毎に、盲人多く來て施物をうくる也。朝四つ時前に來りて、四つ時に受取るといふ。その盲人、鞘町組、傳馬町組とて二組あり。

○「手れんいつはりなし」と挑灯に書きしは、いにしへの遊女奥州、「ずるけなし」と張札せしは、今の講釋師馬谷なり。「みれんなし」は、芝居三階の餅の名、「かけねなし」は現金正札なり。

○友泉染といふあり。友泉は繪師也。かれが書く所をうつして染めたるなり。尤墨繪にて書きたるも有り。友泉は祇園町に住すと、沽涼が「世事談」に見えたり。按ずるに、貞享板「友禪ひながた」（四卷有）序に、「宮崎氏友禪といふ人有りて、繪にたくみなる事いふ計なく、古風のいやしからぬをふくみて、今樣の香車なる物數寄にかなひ」とあり。

○此頃狆の名とて、人の見せけるを見れば、

壹まい黑　壹まい白　白黑ぶち　目黑　鼻黑　赤ぶち　栗ぶち　かぶり　むじな毛
毛ながー　耳は大耳べつたりだれ　毛づまり
當世は　（地びくの毛長流行申候）
上田すぢ　こくすぢ　治郎すぢ　小田すぢ　大島すぢ

○天明五年巳八月廿五日、六代目市村羽左衛門家橘死。致興院讃譽保壽居士。寺は本庄押上大雲寺。

○同年顔見世より、中村仲藏（六代目）中山小十郎と名を改む。是は仲藏養親にて、この外世話になりしものの名なりといふ。歌うたひの家也。右歌に。

中村のワキ師はきねや江戸けいしやふりは志賀山歌は中山

志賀山の江戸一流は兩座にて中村生島ふりの三ヶ所

これは古市村家橘吾妻藤藏（園枝）に傳へしといふ。志賀山の家は身ぶりの家也。元祿二年の板にて、「舞子式正稽古本」といへるものあり。予が家に藏め置けり。志賀山萬作（まひ子の師匠）が弟子の名、并唱歌をのせたり。

寛政二庚戌年夏、中村仲藏死。

○天明五のとし七月十四日頃、御旗本藤枝外記といへる人、新吉原大びしや綾衣といへる遊女と、田圃に住める餌まきの家にて心中せしに、藤枝氏五千石を領する家なれば、その頃吉原にての歌に、

君と寢やるか五千石とるかなんの五千石君と寢よう

といへるを、三味線にあはせてうたひ興じけり。予たはぶれに古樂府の詩を摸す。

羽林衛藤枝氏。與北里菱家倡綾衣狎。親戚諫之。將幽藤枝氏于一室。藤枝氏走至菱家。携妓入所識農家共死。里人哀之作新歌。

寧與君同寢　將守五千石　徒見五千石　不如一歡夕

烏亭焉馬云、それより前にある歌なりとも聞けり。予按計府簿、

知行上り候書留

寶暦元年未年　三浦肥後

一高五千石（下總下野安房）

天明五巳年　藤枝帶刀

一高四千石（武藏相摸）

然らば此歌、三浦氏の時の歌なり。焉馬老人の語徵あり。

文化十一年甲戌七夕後日記

○文彌といへる節は、文賀といひし座頭の三味線に、彌太夫といへるものの淨瑠璃をあ

はせて、語りし聲なり。よつて文彌とは名づけけると、名見崎喜惣次（剃髪して大喜都）の物語り也。

此說、文字太夫の方にて傳ふる所と異也。

○不忍の池の蓮、天明六年丙子七月中旬の大水よりして斷えたり。近頃菱の多くなりたるも、蓮のために害ありしや。そのとしの七月九月頃、津田胡蝶子、植木氏、井上氏などと蓮見侍りしが、又寛政二年庚戌六月七日朝、徐德卿、鈴木一貫、井上子存などと蓮見にいき侍りしに、去年頃よりして、蓮やうやく處々に生ひたりといふ。

○河東節の文句のうち、おもしろき所を左に抄出す。

女に―女有餘布男有餘粟園、家殿宮上下交足

神樂獅子

○扨も其頃、女にあまんの布あり、男にあまんの粟有り、（以下麒麟その園にいたるとはといへる迄、文選賦の語也。起し得てよし。）ひとつ星をみつけたら、長者にならうな。（以下俗語のうつりよろし。）

九軒―大坂の游廓

神樂獅子忍の段

○じつは九軒に隱れなき、とげも花さく茨木や、難波なれどもあづまとて、かの楊貴妃がはえぎはに、王昭君がおひさがり、また李夫人がひとつまへ、西施がはける上草履、花の鼻緒をふみしだく、鶴のあゆみのゆたやかに、よめりくるわのすがゝきや。

つもりのうらみ―津守の浦、積りの恨

有馬筆

○暮れなば、雨と契りにし、うき世の人のそらごとを、集めてうめて見るならば、淺くなりなん天の川、星もあま夜のなぞ〳〵なに、それは見えねど、とく〳〵ござれ、軒の玉水おちやすき、身よりながるゝ川竹や。

○こぬ夜つもりのうらみては、我さへ身をもわすれつゝ　心づからやかれぬらん、萩やきやうを其まゝに、つくらぬ顏の寂しさは、遠山の暮秋の色、はら〳〵と吹きぞ散る、人もあらしの音ばかり。（蕭敬）

○くゝり枕のあひおひも、まつとは知らぬ君ゆゑに、枕ひとつでよいものを、殘らひとつのおもかげは、蚊屋のおさへとなりにけり。（結得妙）

鶴のはし小袖

○男をみがく玉くしげ、心のおくのひきだしも、はや秋風のふくさぎぬ、ぬぐふ油のしみ附し、比翼のけぬきとりいだし、かぎはよくこそ。

○さゝに一夜のゆかり有り、たなばた様と書きちらす、禿が筆のかさゝぎの、はしたないやら戀じややら。

水上蝶の羽番

○なるもならぬもながし目の、ながれにそよぐ川竹の、あふさきるさにさはぐ〳〵と、さはるその夜は賞うてあうて、とんとねじめの一二三。（曲調如流）

○みつとや、みつありとてもてふ〳〵ぞ、蝶はおぬしの替紋と、つねに縫はせて染めさせて、ひよくのはねをうちかけの、うへにみだるゝ洗髪、しやんとあげはの諸翼。

○これは手越の少將の、夜はくれどもひる見せぬ、忍びすがたは朧夜の、つき出し女郎はつまくら、いほりの内にふたり寐は、風情なりける次第也。

帶曳をとこ結

○義秀聞て、ヲヽそれこそ、いともやすけれど、からいと組のやへ織の、板のやうな

金輪際―地底

奈落―地獄

る幅廣帶、二重ながらむんずと取り、あけんとするに動かばこそ、金輪際よりはえ出たる、大磐石のごとくなり。（中略）時致も、むかふまさりの大力、引けども推せどもゆるがばこそ、よもやぬけじのかなめ石、奈落のそこへとつゝ立たる、膝は枯木のちから瘤、すつくと足を踏占めしは、石になりたるくすの木に、櫻の咲きしごとくにて、綿帽子とつて八方を、にらみ附けたるありさまは、身の毛もよだつ斗也。

唐團扇（此文琵琶行を摸擬す。意をとりて文をとらぬあり、文をとりて意をとらぬあり、その文の妙所は下に抄出す。○を印とす。錯綜の妙、言外にあり。）

○潯陽のほとり江上の秋、秋風客を送つて一葉かろく、蘆間をわくる船の中、酒をすゝめて白居易は、月にうそぶくあまの原、八重のしほぢの末遠く、千さとの外もくまなくて、水のよどみもふかき江や、みぎはの霧の絕間より、なほ下もゆる漁火の、ほの見えそめし苫のうち、浦ふきかよふ秋風の、幽にそれと琵琶のねか、おほつかなみの調かも、○四絃一聲すればともにうらみを語る、まれにだに、みぬめ

の浦のあま小舟、いかなる風によるべ定めん、ワキ「船こぞり居て聞もなほ、秋の哀も身にしれて、袖に涙のおもほえず、たぞやと問ふも浪の上、シテ「こたふる人もなく鷗琵琶聲やんでおともせず、ワキ「なほしき浪のうつゝなく、千こゑよびもゝ聲よばふ船の内、シテ「忍ぶとすれどあり明の、さやけき月に色もれて、苫ふくかげの花薄、ほのめく袖に露かゝる、ワキ「時に樂天言葉をやはらげ、いかでかく波にうきねの船よせて、妙なる琵琶のいとゞなほ、おほつかなしやさるにても、御身はいかなる御事ぞ、シテ「あまのかる磯の玉藻の下みだれ、うき言の葉もしらいとの、びはをいだきておもはゆく、なかばかくせしかほばせは、卯月に残る葉櫻や、木の間の花の露おもく、打たれがみをそのまゝの、すがたもよしやにくからず、ワキ「樂天いとゞあやしくて、たれか比目の浪枕、かたねの夢をうらみてや、いぶかしさよといひければ、シテ「くちなしの色に染むてふ山吹の、花もあだなる身のむかし、ワキ「かたるもさすがはづかしの、もりてうき世の定めなき、いく宵々のかり枕、かはすちぎりも河竹の、ながれの末と御らんぜよ、ワキ「扨はあだなる河竹の、ながれの水の末とほく、などてや爰にすむ月の、行衛をかたりましませと、ワキ「なほさしよする船のうち、つなでかはして

シテ「花と見し、昔のはるは夢なれや、芙蓉帳のうち、せし手枕のかずゆるく、ワキ「肘の環のはてしなき、思ひに痩てとぶ螢、ながるゝ水の影うすき、あやのうちはのおひ風は、かぶろが袖の香ににほふ、けしきもよしや里わけて、片日夕だつ空もすゞしき小村雨、かさの長柄をさしかけさせて、伽羅の足駄にこぼるゝ露の、つゆにぬれぬれぬれてほす、きくの盃ゆらぐ手も、はでな心かくれなるの、もすそにすそにしたみ酒、シテ「また待宵に、ふけて廓のもゝ羽がき、ワキ「まぶな男のかすり歌、聞くに心のまゝならぬ、つとめの客に下紐を、とく〳〵しぼる露涙、シテ「そよや浮身を巫山の雲の、行衛とはれて寢る宵々に、たれか身うけのかねごとも、かしこはまゝよこの人の、涙ぼくろもうるさしと、シテ「男えらみに今年も過つ、またくる春も、ワキ「あだに散る姿の花もうつろひて、今はねびきのまつ人も、誰にすがらんよるべも浪に、身をうき草の根を斷えて、さそふ水とて行くふねの、ともにこがれて〳〵ここに、茶をめせ茶をめせ、小うり茶うりて世をわたる、その人にさへ忘られて、やがてといひて出船の、片帆なみ間のよすがなく、こと浦風のおとづれを、磯山松のよそにして、心にふくる有明の、つれなく残る身はひとり、涙の外にとふ人も、な

くねを琵琶のもろごゑに、伏沈みてぞ居たりける。ッキ「けにや商人は、利をおもんじて、別離をかろんず。今樂天が身のうへも、都を出でて遙々と、斯る邊土に謫居して、古鄕の秋のなつかしく、絲竹のこゑも稀なるに、いと珍しき琵琶のねの、ひなにはあらぬ思ひでに、今又かゝるうき涙、むかしにかへす花の袖、都の春もあだ夢と、おもひ比べてげにまこと、ともに天涯淪落の、ッヒ「あひ合うたりし身の上と、シテ「耳歎息のことのはに、なほ濡れまさる紅の、なごりの袖に琵琶とりて、いとかきならしさう〳〵と、シテ「むら雨つたふこずゑより、くだけて落る玉水の、岩にせかるゝ瀧川や、流れもあへずせきとめて、たちまちさくる銀瓶の、水ほとばしる一曲も、是迄なりとゆふ汐の、さしてわかれのこゑ〴〵も、遠ざかり行く船のあと、月ぞたゆたふなみだの袖、しぼらぬ者こそなかりけれ。

此文まことに一唱三嘆と云べし、因て全文を載す。白氏が琵琶行をうつして、斧鑿の痕なし。本文と離れて合ひ、合ひて離る、何等の筆力ぞや。意は琵琶行の詩を主として、調は謠曲の趣を得たり。

狂女草枕

黃河一拾遺紀、黃河千年一清聖人之大瑞也

○おきまよふ身は淺茅が原、人をおもひの草かれて、嫁菜土筆は有ながら、茅花ほうけしおもかげは、くしせぬ髪のかたよりに、よりもあはねばおやと子の、面變りせばいかならん。

角田川船の內

○黃河千年過ぎて後、一たびすめる角田川、牛田によする水の玉、かゝる例はあらかねの、土とり船のわれら迄、豐にすめる御代のはる、君にすゝむと書くとかや。

(謠に似たり)

○あの念佛について、日本に一つのあはれの候を、語つてきかせ申さん、紙仕度して聞き給へ、涙がやがて出ましやうと、棹の雫ぞはじめなる。

○ひでりの櫻色さめて、心ばかりはしめれども、口には綿の轡をはめ、さけべど聲の出でばこそ、不便なりともあさましし。

はつね聟

○梅でなければねぬ鶯の、梅でなければ腰さへかけぬ。(春情可唱)

山かつら

○二人が中にあくる夜は、結びもわけぬひとへ帶、かけし島田のかみかけて、いつはりならぬ床の山。

待宵

○簾もしめるよるの露、消ゆるおもひのけぶり草、かをりは餘所へ漏らさじと、きせる相手に待つ宵の、月はながれへやどかりて、ぬれて干るまもなき盃を、さしてさはりの雲もなき、月見小袖の裾模樣。

○ほんにおもへば假の宿、とめ木はぬしへやどる身の、つとめといふは名のみぞと、すゝむ言葉のいみじさは、なほも思ひのます鏡。

袖若葉

○あけぼのも、紫だてる筑波根や、今朝しらぐゝと富士のかほ、袖のにほひもわかやかに、そろふすがたぞ憎からぬ。

○わか草も、かぶとぬけけり土手の霜。（發句歟）

けぶり草ー烟草

紫だてるー雪は申さじまづ紫の筑波山、嵐雪

雪間

○廓はひとへふたへ帶、緋無垢の椿白無垢の、梅がかをりをあそびつれ、誰がためぬらす衣手の、つむ手もしろし若菜には、きのふもけふもゆきの間を、かよふが實か待つもまた、になうてみせん田子のうら、よきはいり江の波うちよせて、枕のふさの磯菜摘、戸さへ細目に月かげも、道たどゝし土手の馬、くわんをむけにくさの花。

○宵ふる雨をけさ見れば、下はくもらぬ袖のいろ、寒きをあます山おろし。

袖かゞみ

○かざせばぞ、柳は袖のふりはじめ、そらは霞の人はおしろい。

○とくゝと、はるの行衛のすだれして、一寸呼ぶにも書いてやりけり。

○さす棹はすゞみにきあめくれの月、乾かぬはだにきて夏衣。

○見よかしの見るやみよかしみよかしの、身は身上りの夜をそとに立つ。

○きひとつの暖簾をないておしだまり、鴛も惜むかさはらせぬ鬱。

○戀すれば人はわか木にかへり花、解くも結ぶもおなじ盃。

此曲、俳諧の句を以て一曲とす。妙々。

助六後日道行

吉田―吉田神社には延喜式内の神々ん殘らず祀れり
うつちん―痴者
げしん―わかり
松の位―遊女の最上位太夫

御侍―御侍御笠と申せ宮城野のこの下露は雨にまされり、古今集

○つまぐる珠數のたもと川、水盃はゑひもせず、京の吉田の神帳に、顔だしもせぬ産神は、野暮てん神かうつちんか、げしんのわるい神さまと、うらみ卿ちしとがめにて、今また今の身の恥を、さらしなはてのみこしより、松の位とゑやされし、そもまあわしはぬし樣の、つまといはれし初言葉、七十五日過ぎもせで、かくなるやうなよめ入は、宿世いかなる因果ぞと、襟につゝみしたきつせの、はだもふちにや沈むらん。

此曲、俠客の氣象今みるがごとし。其比の當世文なるべし。

景清道行

○みのならば、花も咲きなんくんせ川。（發句なる歟）

蟬丸道行

○やゝあつて希世の卿、かやうの御すがたにては、盜賊のおそれあり。御衣を給はつて、簑をまゐらせ候べし、[是は雨にきる、田みのの島と詠ぜしみのか、[又雨露の御爲なれば、同じく笠を參らする、[是は御侍御笠とよみし物よなう、[又この杖は御道しるべ、御手に持たせ給ふべし、[げに〳〵これも、つくからに千歳の坂も越えなんと、かの遍昭がよみし杖か、それは千とせのさかゆくつゑ、爰は所も逢坂山。

つくからに―千早振神のきりけんつくからに千年の坂も越えぬべらなり

第一第二の―白居易の新樂府五絃彈に、第一第二絃索々、秋風拂松疏韻落、第三第四絃冷々、夜鶴憶子籠中鳴、

同笠の段

○第一第二の絃は索々として、秋の風松をはらつて疎韻落つ、第三第四の宮は、われ蟬丸がしらべも四つの。をりからなりける時雨かな。

かぶろ萬歳

○ふみに宿かすふり袖の、あけほの染もやう〳〵と、むらさきだちし初空に、はるもをさなき鶯の、わやくをおのが姿にて、心にならふとりなりは、いさみあるみのさへかへる、朝おそげなる雲の帶。

○ちよの數ある御代ながら、枝もならさぬ内氣はいやよ、世心しらぬ嬢小松、初音をしへん手枕の、夢見おぼえていたづらや、おとな心の春もさて、つとめせぬ間にさく梅の、雪だまされし風情あり。

○夜はすがらに燒きすてて、けさは霞もにぎはしき、香聞きならふはじめより、客といふ名のいとしさは、どうともこうとも言へばえに、いはねにおふる戀草の、ふた葉に物や思ふらん。

過ぎこし方の―枕草紙に、過ぎにし方戀しきもの枯れたる葵

泔坏―髪だらひ

此曲全文ともよろし。一二の警句を抄出す。

狂女あらじよたい

○さかりなる、男ふたりを清少や、二つまくらの草紙にも、過ぎこしかたの戀しきは、かれたる葵ひな遊び、調度品ある姫ごぜの、十ヲより内のたはぶれを、二九や十九のやよひまで、女夫もてなすうらやまし、こるもをしまず野良猫の、心のまに妻こふる、唐も大和もつながるゝ、是煩悩の犬はりこ、ひいなの祭のさきばらひ、うきを載せたるのり物は、さりし夕の合籠や、それより後のおとづれは、鳴くねをそふる色鳥の、ゆかしくのつもりきて、身のかひをけは外になき、行器香筥玉くしけ、かゝげの筥に泔坏、二つべつつひ火吹竹、れん木すりばちわれからと、やつす今年の新所帶、とんとみづしの黒棚や、すゞり香ほん高つきや、かけばん合子蛤の、さら盃もぴいどろを、置きまどはせるしどけなや。

○悔の八千度ふりしきる、のきの點滴、とひ竹を、二つにわりて見せたきも、ちかくはあらで遠ひらと、松蘿の契り引かへす、破鏡のわかれ、つきなくも、缶をたゝくうれひ有り。

巡簷點滴似琴筑、三體詩、又箏曲にみえたり。松蘿の契、毛詩に出づ。破鏡の別、古詩。破鏡飛上天又故事。鼓缶は易に出づ。

京わらんべ

此曲全文ともによろし。されどこれぞといふべき佳句も見えず。

ひとへ帶

○外のつとめのさはりとて、内外の者にせかれては、文も通はず主もこず、待乳の嵐箕輪の雨、いづれ思ひのつまごとの、うき寝にたつや名取川。

松の内

○新玉の空青みたるあけぼのは、つね聞く鳥も若々と、若水はやき車井の、めぐりくるくる年の朝、こぞのまゝなる亂髪、こぼれかゝれるさし櫛は、誰結べとかしどけなや、しどけなりふり品定め、しつけぞ殘る戀衣、どの袖ひかん移香の、峰にひとはけ夕霞、二日は茶屋にゐの日にて、手まづさへぎるはご板に、軒より傳ふつくばねの、笹にからまり裳へ纏が、纏が袖くゞる、手もとに一つ袂へ二つ、笹にからまり、もすそへまりが、まりが袖くゞる、手もとに一つ袂に二つ、戀ごつもりていつの

間に、ちよと百ついたまりの數、とんと落ちては名はたゝん、どこの女郎衆の下紐を、結ぶの神の下心、かねてしりたし問はまほし、三日は客のきそはじめ、抱てねの日のひとたきの、かをりほのめく奥座敷、君がちびきの丑の日や、うしとやいはんわがおもひ、五日やみなん懲りずもかよふ、土手にあけたゝ身ぞつらき、大いそのかねは、七つなゝもどり、虎に逢をとて、裾につゆ、小づまは嵐松風、實に君が代の繁榮は、虎もすみなん千本の竹、梅はづかしきえりの香に、まだ青陽の夕ぐれ寒く、かりぎの袂ちはやぶる、かみもおもひのあればにや、いつしかけふはきぬぎぬの、沅湘日夜ひがしには、あま戸もはやくあくる日の、しめてねななん七くさは、ごぎやうたびらこ佛の座、鈴菜すゞしろ芹蕣、君がためとて若菜摘、ちたねの色こそ久しけれ。

青陽—春

沅湘—沅湘日夜東流去、唐詩の句

ちたね—ちとせの誤なるべし

此文、北里初春の景をつくせり。

松の後（此文松の内の甚しきをとれり）

○ながれ久しき夕汐の、挿櫛さはるけづりかけ、かねてきのえと寐てまつ枕、障子まばゆきあさあけに、見おろすよもうらゝくと、はたけくの賤がわざ。

きさわけあひの山

○君とわれとは綟障子、はてはうき名のたて附けに、身をひそめても影やどす、弓張月にいとかけて、するや胡弓の忍びねに、きかせまほしきまへ渡り。

おせんものぐるひ

○人めの關を忍ぶが岡、よし不忍が池の面、けにいさぎよき清水村、弓張月や入さの山、谷中の木立しげり合ひ、花の盛りはみよしのの、よしのより猶上野山。（清水村とは清水門のあたりを云歟。是は考證のために抄出す。）

○霞のまより仄にも、見てし人には逢ひたらぬ、淺黄ちりめん茶ちりめん、鬱金べにかば薄鼠、色ある人に見せばやな、をじまの海士の濡衣、もしほ角袖一つまへ、繻子や唐綾白どんす、縫すり箔のはゞひろに、ゆかりの色やむらさきの、ちりめん手ほそ結びさげ、たれ白菅の加賀笠を、まへ深々と著なしつゝ。（此頃の衣裳の風俗おもひやるべし。）

きよつら道行

○諸行無常の鐘のこゑ、けふを限とひゞけども、身の夕ぐれをしらかしの、杖を力に

霞のまより—山櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ（貫之）

見せばやな—見せばやなをじまのあまの袖だ

にも濡れにぞ濡れし色はかはらず（殿富門院大輔）

たど〳〵と、一足ゆけば姿婆とほく、二足ゆけばさきちかし。（實に大夫の道行なるべし。）

とら少將道行

○戀はくせもの皆人の、戀はくせものみな人の、まよひの淵やきのどくの、山より落つるながれの身。

○御身とても、われとても、花ならば初ざくら、月ならば十三夜、盛にたらぬ身をもちて、おもふ人には添ひもせず、かゝる憂きめをみる事と。

袖とめ曾我かみ結の段

○ふたみがうらの玉櫛笥、千筋の髪の數々に、たのむ誓の末かけて、すがれの伽羅のけぶりとも、消えなばともにわれとても、ながらふべきか今日有りて、明日をば誰かしらかみの、うすき契と思ふにぞ、くしの齒毎にもる涙、袖より傳ふ五月雨、おもひくらべてあはれなり。

○いうては歎きくどきては、又ひとむすびふたりねに、むすぶ契の元結を、くり返してはまき戻し、まき返してはくる〳〵と、めぐりあふ夜の手枕に、もつれあひたる亂髪、ゆひがひもなき妹背ぞと、泣いつ啣ちつとら御前、わりなく髪をそけづらるゝ。

髪を結ぶ體、今見るがごとし。妙々。

しのだづま

○又飛出でて細道の、一もと柳かいめぐり、しやんとたゝずむ姿見の、池水寒きうたかたの、うたてやかをる燒鼠、さはるとはねんねぢ返し、あらおそろしや。

紋盡しかご蒲團

○六つをうき世の火影とは、此里よりもともしそめ、歸るあみがさ來る頭巾、おくるなごりと待つ人と、みちは二つにかはれども、同じ堤の通路に、いたゞくほしの挑灯は、くぎぬき松皮木村ごう、木村ごうと申すは、三浦のたれとしら茶苧の、下著に物をおもへとや。

○やみとふる夜もかよひ來て、三本からかさ雪折の、竹町にての九つは、土手の四つかや三つへいじ、大すながしの長刀、はおりは富士の腰をまき、袴のすその清見が、浪の字をなす右巴、左どもゑにくる〳〵と、くるふや戀のつなぎ馬、間夫のた

づなにからまれて、矢筈のちがふその夜半は、籬にひとり立ゐほし、大一大萬大吉の、首尾を千とせと羽をのして、舞うたる鶴の松たかき、すだち禿のしきせもの。

炙ゐ岩ほのたゝみ夜著

○ふたりねの、夢ばかりなる春の夜の、みじかき年をうらやみて、世話になるをば姉といひ、うきをかたるを妹と、名をよびかはす世界なり、今日しも聞けば虎御前、いとし男とかくろひの、淋しさとはん心ざし、常盤の色の松のはに、つゝむ事をもかくさぬは、中よいどしの誰彼と、手づから持ちしくだ物も、なにたちばなの懐は、母ある人の誠とや、是は姉へのみやげ物、茶やあつらへはふるめかし、思ひ附きなる品々は、けふの笑と夕まぐれ、「風の襖をさしもぐさ、さしもならはぬ竹ばしの、かみにかゝれば取直し、節のないのは我ふたり、するでやるのは恩ならず、すゐさするのを恩にして、男心の憎いのも、嬉しきほどの野暮となり、貧の病は苦にならず、外の病のなかれかし、左より先するそめて、右にとめるも夫婦合、灸によい日と定むるも、暦にまかす世のならひ、だまし賺してさながらに、おとなげないと恥しむる、熱こ怺のる「たはぶれに、一かたに思し召すかや深きかや、人をおもふ

たちばなの懐―三國の陸績橘を懐せられて之を懐にし誤つて地に墜せしかば主人之を咎む績曰く母に贈らんとするのみと

か慕ふかや、逢へば別れをそのまゝ喞ち、きせる取る手に横雲渡り、さをなぐる間もやるせなや、「禿はそばにゐねぶりの、顔に愛宕の山を見よ、今ふた火との何偽りも、男おもひのうら詞、根切は切のまじなひの、熱湯にひたす手ぬぐひの、ぬれてかわかぬ「勤ながらの憂き身にも、もれてや人の戀衣、恨みられてはまたうらむ、心のそこの溜水、すまず濁らず出ず入らぬ、其しこなしも化粧坂、しる人ぞしる物おもひ、さはる雲なき夕月夜、てり添ふ中の戯れかな。

此文、曲節の妙を得たり、因て全文を出す。結語餘情あり。

○一年市村座大人にて、中村座寂しかりし時、

潮みちて隣の潮干なかりけり　何江（市村羽左衛門）

春の蛤ふんでふみつけ　柏筵（市川海老藏）

市村家橘かたりき。

○天明八年戊申のとしの春のころ、名見崎大喜（始名喜三治）予が先の年書き置ける狂歌のことばがきと、歌とをあはせて、めりやすとせりとて、持て來て見せしかば、名をつ

け遣しぬ。

晦日の月

誠は嘘の皮、うそはまことのほね、迷へばうそも誠となり、悟ればまことも嘘となる、まよふもよし原さとるもよし原、うそと誠の中の町、（合スカヾキ）傾城のまことともうそも有磯海の、はまのまさごの客の數々。

○此ほど三又のほとりに、北里焼けてのち、假宅あれば、書きて遣しぬ。

かりまくら

身はひとつ、思ひは二つ三つ又の、ながれに淀むうたかたの、解けて結んで、結んでとけて、寢るもあだなる假枕、うはぎをぬいで下締の、あかつき頃の雲の帶、なくや中洲のほとゝぎす。

○鶴澤蟻鳳（初三村蟻鳳養子）「鎌倉三代記」といへる淨瑠璃のうち、姫君の水仕するところの文妙なりとて、口づから傳へし。

桶にひしやくとさま〴〵に、名も聞きはじめ天人の、おりゐの清水むすぼれて、酌めどもなれの水仕の手品、かへりかねたるつるべ縄、戀路におもひまゐらせの、なれのーなれぬなるべし

筆よりほかはもたぬ手に、どう炊ぐやら、しらげの米に、こゝろばかりのはてしなき。

享和元年酉浪花千日寺にて、蟻鳳墓を見て此事を思ひ出せしが、今年文化十五年戊寅二月八日、堺町にて、芝翫、三升、路考が、俳優に鎌倉三代記をなすを見て、又此事を思ふも、三十年前の昔なるべし。

戊寅二月望春雨中　七十翁　蜀山人書

○芝居の破風口に穴あり。トヒヨ〳〵にて鳥の下る所へ、樂屋の方よりみれば階子かけてあり、ひおほひと云ふと見えたり。

ひおほひへ上る事、かたくなり不申候。

といふ張札あり。

○市川三升（五代目）狂歌を好む。名を花道のつらねといふ。丁未のとし十月晦日、曹司谷へまうでたりとて、歸路にたちより、暫といへる大字をかき、かたへに、

いまが最期かんねん佛といふうちにしばらくありて立歸る春

と書したり。

暫ー市川家相傳の荒事

○天明四辰年十一月、顔見世、葺屋町市村羽左衛門座、櫓幕をおろし、桐長桐座にかしてより、今年（天明八年なり）申年まで五年なり。市村（當）羽左衛門（龜藏）より到來書。

（天明五年巳十月十七日、家督相續羽左衛門となる）

今日御番所樣御内寄合え被召出、羽左衛門芝居再興被仰附、難有仕合奉存候。興行之儀者、來る霜月朔日より、顔見世興行仕候樣に是亦被仰附候。右爲御知申上度如此御座候。以上。

申五月十八日

市村羽左衛門
菊屋善兵衛
同　茂兵衛

○「曲舞揃」（二册）のうちおもしろき文句。

初瀨六代

○かりにみゆる親子の夢、幻の時のまと、かねてはかくと思へども、誠わかれになる時は、思ひし心もうち失せて、唯くれ〳〵と堪へかぬる云々。

花車（全文）

○濡れつゝも鶉なくなる深草や、たれをしのぶの淺茅原、實に住捨てし故郷の、野となりてしも露しげき、草のはつかにくれのころ、伏見の深田水しろく、薄霧迷ふ夕べかな。

露（全文）

○つゆほどもかけじと思ふ盃に、むかへばかはる友人の、立はの花にたはぶれて、十五の數わかて其まゝ心亂歌の、春の日ながきもわきまへず、秋の夜しばしめぐるなと、おもふも友の心なり、何までもはなれぬ此度ぞうれしかりける。

隱岐物狂

○綺羅の御姿を引きかへて、衲衣を御身に奉り、御似せ繪（今のにがほの畫也）をかゝせ給ひて、七條の女院に參らせらる。（前後略）

由良物狂

○いにしへ人にあひなれて、偕老同穴淺からず、同じ契とおもひしに、人の心の花か

葛城山の一
新古今集に
よそにのみ
見てややみ
なん葛城や
高間の山の
峯の白雲

とよ、葛城山の嶺の雲、よそにかよふと聞きしより、ひとり心はすみよしの、ねたくも人を、まつといはれしとおもひしに云々。（略）

横　山

○在原の中將二條の后にまゐりしを、いかなる人か大君に、つけのをぐしの髻の髪、さしたる科にふせられ　遠島の身と業平は、當國に下りて、入間郡みよしのや、今の川越の山家の鄕にありしに云々、（中略）それは秋かる鹿の聲、妻戀の歌の心にや、又夏がりの玉江の蘆、あしくかたりなば、當座の恥辱家の恥、よし〳〵いはじ、唯酒飲うであそばん。

反魂香

○立さりて跡もなく、形も消えて跡は唯、烟ばかりぞ反魂の、孝行の子ならば、などやしばしもとゞまらぬ。（下略）

歌　占

○命は水上の泡、風に消えて江めぐるがごとし、魂は籠中の鳥の、開くを待て去るにおなじ、きゆるものは二度見えず、去るものは重ねて來らず、（中略）しばらく目をふさいで往事を思へば、舊遊皆亡ず、指を折つて故人をかぞふれば、親疎おほくかくれぬ、時うつり事去つて、今何ぞ渺茫たるや、人とゞまり、我行く、誰か又常ならん。（下略）

地獄の苦をとく月の夕の雲は、後の世の迷ひなるべし。

那　須

○有時張良母にむかひて申すやう、我戰場に望み、密謀をなす隙に、後につゞく味方の勢、箙にさせる箭をぬきて敵を射る事あり、いかゞはせんと申ししに、母是を聞附、上衣をぬいで縫つゞけ、箙の矢にかけしかば、八百萬の軍神、母衣の縫目にうつりつゝ、將帥の名をかゞやかす、それより母衣とは耀衣と書きたり、扨又母の衣とかきしも、今の謂也。（下略）

徑山寺

○糸をみだせる柳は、綠なる色をそのまゝに、錦をおるてふ花は、又紅の色の外ぞなき。（下略）

玉　取

○邪見偸盗は貧困の因縁、慈悲惻隱は富貴榮花の基とかや。（下略）

○市村羽左衛門（家橘）かたりけるは、家に三幅對の掛物あり。千歳、翁、三番叟の畫なり。顔見世の朝ごとに掛けけるが、過ぎし燒亡に失ひたりとて、その發句計を覺えてかたる。

千歳　顔見世　なる瀧の水鳥遊ぶ日の出かな　何文（善兵衛）
翁　顔見世　この所久しかれきもはなの雪　九口亭　何江（羽左衛門）
三番叟　顔見世　水仙のはなぶさふつて鈴の段　玉淵亭　何亮（茂兵衛）
千歳　元日　若水やたえず吾等に掛烏帽子　何文（善兵衛）
翁　元日　千早振る神も最貧の春きたり　何江（羽左衛門）
三番叟　元日　元日や喜びあるを親にまつ　何亮（茂兵衛）

○五代目市川三升、その子海老藏柏筵、七歳の時かけを達磨の畫に贊して曰く、

如何是祖父西來意　庭前柏筵子

○天明元年辛丑、小石川布施氏（狂歌の名、山手白人）の宅へ、洲崎望汰欄の主祝阿彌を招請、獻立。（客萬年氏、祝阿彌、文竿、予）

十月十七日

たばこ盆　蠟色火入宣德　竹はいふき　手あぶり
茶　肥後ほしの出し茶　葉わん南京染附
盃　貳つ組　地まき瓦
牡丹ちらしまき瓦　銘月すり出しまき　瓦菊、屋州すオ
吸物　膳琉球もやう牡丹　鯛切身白みそふき
古渡南京青地中皿　箸あらゝ木五角
銘々口取　朝日ぼら　二色しやうが　鹽梅酢
琉球　大丸盆　南京染附　どんぶり　車えび　あはび鹽もみ
同　断　どんぶり　鰯ぬた　唐がらしみそ
つくし、よめな、みつば
ごま、けし、くるみ
古渡南京染附　平鉢　しやうゆ
古肥前小皿　銘々

八幡木地蠟色
大硯蓋　いつかけ、大かまぼこ一色、あられ鹽

盃品々盆かざり

赤繪南京　ちよろぎ　木地
大鉢　鯉半作り　黒くわぬいり酒入　吸物　鱸　こんぶこせう

古渡南京壺
銘々ふたあり　木地らふいろまき繪
土器　白魚玉子とぢ　硯ぶた　きす、なし、白魚やき、おにがら燒

白かうらいやき
茶わんくしこ、くず　かけ、わさび　膳玉ざいくまき畫

溜ぬり上
膳　しん溜ぬり　細はし

十きん出南京
向鯛　さんばいず　大こんおろし　黒くらげしやうがめし　白うな　榎たけ　汁　しやうがかいわりな

引て
平　いも、丸ふ、薄くず　まきゆば、せり、柚　青地　燒物　鯛

色かさり南京
香の物　みそづけ大根、花丸（古づけ）　あさ漬、一口なす（新づけ）

朱
吸物　みそ、こだひ、うど　硯蓋　ふき、松風くわぬ、にくし、かうたけ、あはび　赤みそ　吸物　いとよりだひ、うどめ

春慶小角
湯　仙だいあられ　かうせん　木具足なし木地吸物わん

辻燒　銘々　赤みそれりもの　吸物　せんかんなめ溜、膳朱くわしわん、あんかうひれかは　赤みそ
ふた茶わん　赤貝

南京鉢
酢肴　みるくひ

後段　割めし

坪すまし　しひたけ、かんぺう、はんぺん　　菊手白南京
引て　　猪口　やくみ打込
香の物　あさづけ　なづけ
吸もの　すまし　たひらげ柚　　口取　品々
わん小形　まきゑ　寶づくし
菓子　しよあんくず　山吹まんぢう　八重なりやうかん　　薄茶　銘こくそう
茶碗　黒らく、古唐津、古瀬戸とりまぜ

あくるとし壬寅正月十六日、望汰欄へ布施氏夫婦子息予招請料理附。

孟春十六日　望汰欄

文　臺　かや
御吸物　鯛切め　尾はだなめうど　　御硯蓋　かちぐり、せん也　ほだはら　せん也　ところ　のり卷鮒　さけすし　いせえび　しやうが

御小皿　おろし大こん　このわた　酢びてうを　田作りほくづき

御膳部

御向　たら干附、さるぼ、こんぶ、わさび
小猪口　いりざけ
御煮物　いりとり鴨、こんにやく、な
御手箱
御湯
御吸物　うすみそ、馬刀、岩たけ、からし
御鉢　大ふな、若大こん、山ぜう
御肴　うど黒あへ　色白あへ

御汁　米つみ入、かぶ、からとり
御飯　ぼうろく
御焼物　あまだひ　ふきのたう
御菓子　さらさやうかん　さわらび
御肴　漬あゆ、うにせん、鹽かつをせん、なすび、たうがらし
御茶碗　ちよ鮒　りうきういも
一　みそづけ　ちよろぎ

御吸物　うしほ安かう　こんぶしん　黒くわね　ぜんまい　コンブノシンノ所ヲタンザクニ切タリ色白クカンペウノ如シ

山川酒

一 鹿だひ　かいわり　河たけ　花がつを　青す　みるがひ、　一 ばう風　ひじき、くり

御吸物 ばか、いも。イモハサトイモ也　たひほね、同目、みやうがたけ、

御吸物 あかみそ、もろこ、たゝき大根、ねぎ

御 看 竹の子、白うを　にしん、千疋

御 肴 こせうみそ、ふか、す貝、さより、わけぎ

御 夜 永

御 坪 今出川　みそかけ

御茶わん つけなめし

椀もり はうぼう　若め

御香の物

御 湯 あしのはかれい、長いもせん、青のり、こんぶ、のり　御くわし　パリ〳〵トスル味也

御乾肴

此時あるじの思ひつきにて、先に布施氏にて南京の器を用ひしゆゑ、器物に唐物を一つも用ひず、和物のみ也。酒闌にしてあるじ出で挨拶あり。布施氏、去年の調理はいかがと問ひ侍りければ、あるじ答へて、器物といひ調味といひ、殘る所も侍らず。唯恨むらくは、一色申上げたき事あり、と申せしに、布施氏うなづきて、問はず止みにき。今はなき人なれば去年の暦を見、昔時の獻立紙にむかふがごとし。

予問祝阿彌以此事。祝云。白人料理。佳則佳矣。但恨美味累々。腹中飽滿。故料理以不飽腹中不厭口中爲要。

○江戸の人、一日に黑砂糖百六十樽を嘗むるといふ。是は新川大島といふ家の藏より附出す故、大數知れ侍る也。杭州の人、日に三十丈の摺小木を食ふといひしも、同日の談なるべし。

○とぼし油、一年に二萬樽づつ京より下す也。

天明のはじめより八年文月の二日にいたる。

此書南畝翁所著也。然るに碌々たる人の手に傳寫して誤脫甚し。
他日全本を得て再び校すべし。

安政五年戊午四月上澣　　活東子識

俗耳鼓吹終

奴凧序

和名抄に、紙鳶を師勞之と書しは、其頃の方言にや。都には「いかのぼり」といひ、あづまには「たこ」とよぶ。長崎にて婆羅門と稱し、びいどろよまをもて、彌生の十日に金毘羅の山にて、互に婆羅門をたゝかはしめ、かのよまといへる糸に、びいどろ粉を引て、糸をきりてかちまけをあらそふも、その國々の風俗なるべし。老のねざめに思ひ出せるくさ〴〵を、そこはかとなく書さしぬるはじめに、やつこだこのことあれば、奴凧と名づけて、雲のはたでに、かいやりすてぬ。

文化十まりいつゝのとし、卯月のはたちむゆかの日　　七十翁　蜀山人

名主持―名主の支配

奴師勞之

(一)やつこだこは、鳶だこの形をうつして、足を尻尾にしたるもをかし。是は安永の初より出來たり。其頃木室卯雲(二鐘亭と號す、後白鯉館と改む。)發句に、

初午や地に白狐天にやつこだこ

(二)夏の頃、枝豆をありきながら喰ふは、明和の頃、三ッ又に築出しの新地出來し時よりなり。誰やらが句に、

冬はなく夏は中洲の涼かな

椿軒先生(内山傳藏)の狂歌に、

大橋のある上にまたかけたかと鳴くや鳴かずに行くほとゝぎす

此地を三ッ又富永町と名づく、深川の名主持なりき。わづかに十九年にして、もとのごとく川となれり。朱樂菅江(山崎氏)著す所の、「大抵御覽」といふ小本にくはし。是中洲

の實錄なり。

(三) 明和のはじめまで、「針がね〳〵、二尺壹文、針がね」と呼びて、江戸中を賣りありく老父あり。予が若き時、牛込に居りしに、此邊へは毎月十九日に來りしなり。風說には、此老父隱密を聞出す役にて、江戸中を一日づつめぐると云へり。

(四) 馬鹿ものの事を、十九日と呼びしは、牛込赤城の緣日十九日なり。其頃赤城に山猫といふ娼婦ありしが、此所にていひ出せし隱名といへり。ぞろと書きて、十九日といふ字體にちかき故とも云へり。

(五) 明和九年壬辰二月二十九日の大火の時、通鹽町に大島蓼太といへる俳諧宗匠あり。(稱雪中庵) 火さかんになりし時、文臺に草稿を載せ、藥鑵に白湯を入れて、心靜に立のき、深川六間堀要津寺の庵にゆきて、文臺を直しおき、發句をして、火のために問來る人をとゞめて、一夜に百韻をみてりといふ。今はかばかりの宗匠もありやなしや。其發句、

緋ざくらをわすれて靑き柳かな

(六) 予が牛込にありし時、此蓼太淸水の藩の谷田貝左傳次といへるものを介として、酒一陶をたづさへ來りて、

高き名のひゞきは四方にわき出て赤ら〳〵と子どもまで知る

といへる狂歌を持來れり。其後深川要津寺に、毎月蓮華會といへる會ありしが、招かれて行きしに、一席皆禁酒なれども、ひそかに蓮社の禁をゆるして、酒などすゝめたりき。蓼太晩年要津寺境內に小庵を占む。蓮華會は毎月二十五日にて、先師櫻井吏登の忌日なり。吏登は寶曆四年八月二十五日卒。

蓮社—晉の惠遠法師廬山に白蓮社を結ぶ

(七) 木室七左衞門(初名庄左衞門、後改七左衞門)卯雲はもと御徒目附なり。延享年中八月十五夜、殿中にて板倉氏細川侯を害せし時、細川の紋九曜の星なれば、

名月やけふ近星も間にあはず

といふ句を戲れにせしが、其句ひろまりて迷惑せしといへり。其後小普請方にうつれり。

浚明院—德川家治

一とせ濱御殿に浚明院樣成らせられし時、其頃の若年寄松平攝津守、濱御殿のうち船番所の柳かげに立とまりて眺望し給ふ時、卯雲たゞちにお側に進みて、今日はよき天氣なり、御發句はなきや、と問ひければ、懷紙に矢立の筆にて書きつけて給ふ發句、

しばしとて日かげをつくる柳かな

西行が—西行のは、流るゝ、なり

番の頭—番頭の番を小鳥の鷂にかけたり

あがた—田舍

それより御やしきにも立入りて親しくまゐりけるとなん。彼の西行が、

道の邊の清水流れて柳かげしばしとてこそ立ちとまりけれ

と云へりしをとれるか。

(八) 卯雲久しく小普請方をつとめし時、年老て頭はげ赤くなりければ、

色くろく頭の赤きわれなれば番の頭になりさうなもの

此歌、執政の御列座にきこえて、やがて御廣敷番の頭になされけり。

(九) 卯雲の狂歌を集めしものを、「今日歌集」と云ふ。其中に、

あがたのものに狐つきたりし時

狐ならきつねならぬぞ心得ぬきつねにせよや狐なりせば

そののち落ぬやら沙汰なし、と書けり。此の左註、尤も妙なり。

(十) 江戸にて、狂歌の會といふものを始めてせしは、四ッ谷忍原横町に住める小島橘州なり。(源之助と稱す、田安府の小十人なり。) 其時會せしもの、わづかに四五人なりき。大根太木(山田屋半右衞門と云へる町人、辻番請負なり。飯田町中坂下に住す。松本氏俳名雁奴。) 馬蹄(後に飛鹿の馬蹄と號す、咲山氏。田安府の士なり。) 大屋裏住(金吹町の大

貞柳—由緣齋

卜養—半井

曉月—藤原

定家の弟

幽齋—細川

未得—石田

白玉翁—正親町公連

口あみをになひ出し—

市令—町奉行

屋なり、後萩の屋と號す。) 東作(四谷内藤新宿の煙草屋なり。稻毛屋金兵衞といふ。へづつ東作なり。) 四方赤良等なり。(予はじめは赤人といひしが後に赤良と改む。) 其のち大根太木、きり金を請とりに、市令の腰掛にありて、かたへに湖月抄をよむえせものありしを尋ぬれば、大野屋喜三郎といへるものにて、京橋北紺屋町の湯屋なり。是もとの木あみ事なり。此妻もまた狂歌をたしみて、知惠の内子といへり。それより四方赤良を尋ね來り、太木もくあみともなひて、橘州をとひしなり。橘州の唐衣といへる號を附けしは、椿軒先生なり。

(補) 岷江はじめ觴をうかぶる計なるも、楚に入て底なし。予額髮の頃より、和歌を賀邸先生に學び、はたちばかりより戲歌の癖ありて、しかも貞柳卜養が風を庶幾せず、たゞに曉月の高古なる、幽齋の溫雅なる、未得が俊逸、白玉翁の清爽なる姿をしたひ、事につけつゝ口あみをになひ出し侍りし中に、臨期變約戀といふことを、今さらに雲の下帶ひきしめて月のさはりの空ごとぞうき

とよみて、先生に見せ侍りしに、此うた流俗のものにあらず、深く狂竦の趣を得たり、とほと〳〵賞し給へりしは、三十年あまりの昔なりけり。其頃は友とする人、は

つかに二人三人にて、月に花に予がもとに集ひて、莫逆の媒とし侍りしに、四方赤良は予の詩友にてありしが來りて、おほよそ狂詠は、時の興によりてよむなるを、事がましくつどひをなして、詠む痴者こそをこなれ。我もいざしれ者の仲間入りせんと、大根太木てふものをともなひ來り、太木また木網知恵の内子をいざなひ來れば、平秩東作、濱邊黒人など、類をもてあつまるに、二とせばかりを經て、朱樂菅江また入來る。是又賀邸先生の門にして、和歌は予が兄なり。和歌の力もて狂詠おのづから秀でたり。かの人々よりく、予がもとあるは木網が庵につどひて、狂詠やうやく興らんとす。赤良もとより高名の俊傑にして、其徒を東にひらき、菅江は北におこり、木網南にそばだち、予も亦ゆくりなく西によりて、ともに狂詠の旗上せしより、眞顔、飯盛、金埒、光が輩ついで起り、是を狂歌四天王と稱せしも、飯盛はことありて詠をとゞめ、光ははやく黄泉の客となり、金埒は其業によりて、詠を專らとせず。眞顔ひとり四方歌垣と名のりて、今東都に跋扈し、威靈盛んなり。まことに草鞋大王なり。又一已の豪傑ならずや。是につぎて名だたるもの、淺草に市人、玉池に三陀羅をはじめとして、枚舉するにいとまあらず。ついで尾陽上毛駿相奥羽

咏み出でし、「土佐日記の口あみも諸持にて」の詞をとる

草鞋大王―眞價なくして尊ばるゝ

もの玉池―神田お玉が池

總房常越より、其外國々のすき人、日を追ひ月を越えて盛なり。かく世にひろごれるは、實に赤良菅江の功にして、予はたゞ陳涉が旗上のみなり。されど又臭きを追ふの徒すくなからざる中に、尾陽はすべて予が門葉のみにして、他の指揮をうけざるは、まさに雪丸、田鶴丸、玉涌、金成、挑吉、有文の諸秀才、よく衆を誘ふ故なるべし。この頃東都の諸大人の、餘國の歌に評するにも、尾陽を甲とし、上毛、駿河これに次ぐと聞きはべるに、予鼻うごめく計なるは、けに我をおこす輩といふべし。こたび玉涌翁、此册子を人に託して、四方の諸君の詠をこひ、弄花集と題して、序を予にもとむ。もとより否むべきにもあらねば、繁文のつたなさをかへりみず、筆を醉竹庵にとるなるべし。

寛政九丁巳仲夏

こは橘州大人の序文にて、弄花集といへる書に載せたれど、前の條に因あれば書そへつ。

（十一）天明三年癸卯正月十三日、京橋伊勢屋勝助方にて、木あみ狂歌の會をせし時集りしもの、三十餘人ありき。勝助が網の破損針金と云ふ名は、木あみより讓りし名なり。（後に靜廉と稱す。）其時の著到帳、おの〳〵自筆にて記せしもの、予が家に納む。（天明樂事

の巻物に入たり。）

（十二）朱樂菅江は、市谷二十騎町にすめる御先手與力なり。もと内山先生に學びて、本歌をよみし人なり。はじめの名を景基といひしが、家基公の御諱を避けて景貫と改む。靜山先生年忌の時、内山先生の出題に、

本歌―和歌
家基公―家治の長子

古寺鐘

鳴く鹿の園のわかれはさらぬだに悲しき秋を鐘ひゞくなり

と詠みしを、先生鐘ひゞく聲と直し給ひき。其時はじめて菅江の歌よみなることを知れり。「菅江」といふ名は、はじめ俳名を貫立といひし故、皆人貫公々々とよびしを、菅江と書きしなり。中ごろ菅江の名憚りあるべき歟とて、漢江と改めしが、日光の宮（公遼親王）の聞かせ給ひて、菅江にても苦しかるまじ、と仰せられしより、又もとのごとく菅江と書したり。「朱樂」の字を加ふる事は、安永の頃、我やどにて諸人酒のみし時、戯に行燈の紙に、我のみひとりあけら菅公と書きしを始とす。

憚り―菅家
江家は朝臣の名家なればなるべし

（十三）市ヶ谷左内坂の名主島田左内、酒を嗜みて面白き男なりき。狂名を酒上熟寢といふ。安永二年寶合といふ戯をなして、狂文を書きしことありき。牛込原町恵光寺に談義のありし時、此書院をかりて寶合なせし時、長持に寶物といふ札をはりて、恵光寺にはこびしかば、皆人まことの寶物と思ひて、うや〳〵敷拜せしに、あらぬ物どもなれば、怪しみてかへりしものありき。此「寶合の記」一卷、市ヶ谷左内坂富田屋新兵衛（曾尚堂といふ、狂名文屋安雄）板行にして世に傳ふ。今は此本すくなし。其のち天明三年、萬象亭竹杖爲輕、兩國橋の邊河内屋にて、寶合をなせし本三卷あり。

（十四）わが若かりし頃は、孟宗竹至つて少なし。大久保外山やしき門前腰掛外繋場といへる石の榜示のたちし所の農家に、植ゑありしを見に行きし事あり。（内山先生もともなひたり。）其後麻布六本木の植木屋にありしを見き。はじめ薩摩よりうつして、吹上の御園に植ゑられ、其のち四ッ谷大木戸の邊の、田安の園に根を分ち給はりしより、所々にひろまれりとぞ。かの大久保にありしは、四谷の園よりわかてるにて、麻布にて見しは、秋月侯の屋敷より出しなるべし。一年秋月侯にて、孟宗竹の羹を食ひしに、味ひことに美なり。是は薩摩よりうつせる種によりてなるべし。其後染井の植木屋根岸邊にひろまりしは、暫時のことなり。大久保百人町に、速水運藏といへる屋敷は、ことゞく孟宗竹を植ゑ置きしなり。

有德院殿―德川吉宗
地錦抄―觀賞植物の圖說

（十五）明和の頃、四谷に藥草吉兵衛といふ植木屋あり。藥草多しとて、内山先生、大森見昌などともなひて見に行きしは、わが十六七の年の頃なり。（吉兵衛揚梅瘡にて苦しげに案内せしなり。）

（十六）染井の植木屋伊兵衛が許に、享保の頃、〔有德院殿より〕拜領せしといふ躑躅の大きなるが三本あり、面向無三唐松といふ木なり。其のち尋ねて見れば、其木もいづち行きけん見えず。伊兵衛は〔地錦抄〕つくりし者なりしが、其子孫衰ろへて、植木もすくなし。花屋十軒の内、小左衛門八五郎などが植木よろしくありしが、是また久しく見ざれば、いかゞにや。

伊兵衛の園中に、有德公より拜領の楓樹一本あり。今猶存す。拜領の年月享保十二年九月なり。

（十七）〔地錦抄〕の外に、〔長生花林抄〕といふあり。躑躅の事計書きしものなり。淺草御藏前のさらし見世にて、半本を見しことありき。

（十八）福壽草に八王子より出づる一種よろしきあり。巢鴨の植木屋彌三郎にて見し事ありき。

猫も見え―涅槃の畫には多くの獸を畫きたれども猫は畫かれざるなり此下に猫あり―此の畫は猫を畫きたるにて特

彌三郎は齋田氏なり。近頃此種多くなりて所々にあり。

（十九）彌三郎物語に、巢鴨の古文書に、小石川の事を礫川と書けり。詩人の礫水といへるも是によるなるべし。

（二十）深川八幡を富賀岡といふは、フカ川、フカ岡なるべしと云ふものあり。木下川淨興寺に、室町の頃の古文書ありて、龜下川とあり。江戸砂子に龜毛川といふも、これらによれる歟。

（二十一）天明の頃まで、兩國橋の東回向院前（高野山大德院やしき）に隱し賣女あり。金一匁を金猫といひ、二朱を銀猫といひしなり。其頃川柳點の前句附に、

回向院ばかり涅槃に猫も見え

といふ句ありしもをかし。京の東福寺の開帳に、兆殿司の涅槃像ををがませしに、下の所まで見えがたければ、札をさげて、此下に猫ありと書きしもをかしかりき。文化二年乙丑の冬、長崎より歸りがけに、立寄りて見しなり。

（二十二）同じ開帳に、虎關禪師の草本の〔元亨釋書〕に、黃山谷の眞跡の卷物などもあり。渡唐の天神の像に、渡宋の天神と書きしもをかし。徑山の無準に衣を授り給ひしな

に名高きなり　聖堂―昌平黌　將門―神田神社の祭神　孔子―聖堂の大成殿に孔子を祭る　公家惡―芝居にて公卿の敵役、將門實事仕―芝居にて善人、孔子

どは、渡明の天神なるべし。

（二十三）寛政の年、聖堂御再建ありて、神田明神の前の町屋を拂はれ、聖堂の圍ひ廣くなりし時、前句附の句に、

將門の前へ孔子は尻を出し

又其のち、

公家惡の前に魯國の實事仕

といひしもをかし。明和九年の大火に、聖堂の孔子の像と、神田明神の神體とともに、あたり近き櫻の馬場に移して一夜明せしもをかし。夜もすがらいかなる物語かありけんと、其の頃の人笑ひ興じき。

（二十四）すべて城門の渡櫓の上の鴟吻は、（御作事にて鴟吻といひ、小普請方にて鯱といふ。）棟の上に向ひあひて立てり。大成殿の屋の棟に、鬼狀頭は外を向きてたつ。御作事の人夫ども是をあやしみて、しやちほことは違ひて外を向きたるはいかゞ、といひしに、十人の人夫のあざ笑ひて、宵の内は脊中合せしても、曉にはこちらを向くべし、といひしもをかし。

舜水談綺―朱舜水の話を安東省菴の筆記したるもの　牛門―牛込　東江―澤田麟、當時有名の書家

（二十五）元祿の聖堂は、小普請方にて建てしが、寛政には、御作事方に仰附られしなり。もと小普請方棟梁を勤めし中村七右衞門といふもの、（本所の焉馬が兄なり。）庄内侯酒井家の作事奉行たりしが、大成殿の地割の圖といふものを持ちたり。其繪圖に鬼狀頭を鬼狀頭とあり。「舜水談綺」の板本には、鬼狀頭とあり、また鬼狀頭の瓦の下に、猫の如きものありて鬼龍子といふ。是は「談綺」にも見えず。

（二十六）明和のはじめ、牛門の四友と稱せし岡部平次郎（名正懋、字公修、號四溟。後剃髮改素觀）大森兒昌（名彝倫、字君叙、號華山。）菊地角藏（名禎、字叔成、號匡廬。）など、東江先生をむかへて、目白臺の潺々亭といふにあそび酒盛せし時、此あたりに白馬道人といへる醉客來りて、座中の客を罵りければ、我ひそかに其兄をよびてかへせしことあり。東江は至て臆病なる人なりしかば、かゝるもの又も狗竇より來りて、騷がせんもはかりがたし。早くこゝを立去るべし、とて牛門山伏町の岡部氏の嘯月樓にかへりて、又々酒酌みかはせし時、予狂詩を作れり。

諸君斜曲脊　白馬横推車
已及戰場所　逃歸岡部家

(二十七)東江先生、八丁堀地藏橋に居たりし時、門人いまだ少かりしかば、正月の會はじめに、岡部公修と共に來るべき由をいひければ、行きしに、日向氏その外十餘人なりき。「吉原大全」といふもの作りしとて、板下のまゝ見せられき。かつて「唐詩選」の句と、百人一首の下の句を合せて、青樓の事をしるし、「異素六帖」といへる小本を著し置けるなど物語あり。其座にて、池の端須原屋伊八が番頭迂平といふものに逢ひしが、「萬載狂歌集」の約束して、つひに其書をかきておくれり。

(二十八)「萬載集」「德和歌後萬載集」は、須原屋伊八が板なり。「才藏集」は蔦屋重次郎が板なり。「萬載集」よりさきに、唐衣橘州「茗葉集」を撰ぶ。其のち朱樂菅江が「故混馬鹿集」あり。是を狂歌集のはじめとして、其後の集ども數をしらず。

(二十九)「萬載集」の跋は、橘八衢(千蔭の隱名)にて、自筆也。此集あまりに行はれければ、橘八衢の跋を除きて市中に行ふ。我家に其跋ある本を求めおけり。

(三十)「茗葉集」は、内山先生の長子の隱名にして、置本とあり。實は先生の文なり。集の中に椿軒とあるは、内山先生淳時の歌なり。

(三十一)酒上熟寢は、狂名のはじめにして、太根太木は狂歌の歲旦摺物のはじめなり。二人とも先立ちてうせぬれば、木あみ、菅江、橘州、赤良の門人の盛りなるを見るに不及。

(三十二)木あみはよき男にして、角をぬきたるあとさだかに、常に居士衣のごとき物を著て、紫の服紗に包みし物を脊負ひてあるけり。其頃本芝二丁目に、三河屋半兵衛といへる本屋、剃髮して齒を黑く染め、青き道服を著たり。色黑く太りたる男なり。狂名を濱邊の黑人とよぶ。人皆齒までの黑人とあだ名せり。此人狂歌の點をして、半紙にすりて出す。板料を取るを入花といへり。(今の狂歌の點料を入花といふの初めなり。)時の諺に、木綿は兼好を一ぺん湯がきたるやうなり。黑人は文覺を油揚にしたるがごとし、と云へり。

角をぬきたる―額の上部左右の角の毛を拔きあげたるなり

(三十三)東涯先生の「名物六帖」に、蒼鼓の字をトショリノイウヂョと訓ぜり。平賀鳩溪(名國倫、字士彝、戲號風來山人、稱源内)見て笑つて曰く、たゞトシマといふべきを、先生の訓笑ふべし、と云へり。(今の名物六帖に蒼鼓の事なし。古寫本にありし歟。)

(三十四)平賀源内は讃岐の人なり。浪花にありて年を經しが、江戸に出て學校を建てんと思ひて出來りしが、寶曆の末の風俗を見て、其事の行れざるを知れり。性質物產を好みしゆゑ、田村元雄(坂上登)につきて、物產の事を講究し、物產會をなす。凡物產會

は、寶暦七丁丑年、田村元雄はじめて江戸湯島にて興行。翌年戊寅又神田に會し、同九年己卯平賀氏湯島に會し、同十年庚辰松田氏市ヶ谷に會し、同十一壬午年平賀氏又湯島に會す。亭主方より出すものを主品とし、諸子の携へ來るものを客品とす。凡三十餘國の物產、二千餘程の品の內に、すぐれたるを擇びて一書とし、「物類品隲」と名附けて、寶暦十三年癸未の板なり。當時躋壽館の物產會も、是にならへるなり。

（補）平賀源內、名國倫、字士彝、鳩溪と號す。狂名は風來山人、又號天竺浪人、讃州志度浦の人なり。寶暦の末始めて江戸に來り、聖堂に寓居す。官醫田村元雄とともに、物產の學をつとむ。火浣布を考へ出して、御勘定奉行一色安藝守殿につきて公に獻り、上覽に入る。後神田白壁町の裏に住す。又藤十郎新道にうつり、又柳原細川玄蕃殿屋敷前の町家に移り、（此頃門口に柳一本を植ゑたり。）終に馬喰町の町屋に移る。（檢校の住居を買つて移る。凶宅なり。）是より前、明和七年癸辰の頃長崎に赴き、大通辭吉雄幸左衞門が家を主とす。阿蘭陀本草をまなび、エレキテルセイリテイトといへる奇器（人の身の火を取て病をいやす器なり。）を造る事を學び得てかへり、專ら蠻學をなす。或は伽羅の櫛（銀むね、象牙の齒、月に時鳥などの細工あり。）をつくり、或は金から革等をつくりて常の產とす。安永八年己亥十一月二十日の夜、病狂喪心して人を殺し、（豐島町米屋の子なり。鳩溪門人なり。）獄に下る。同十二月十八日病にて獄中に死す。屍を從弟某に給ふ。橋場總泉寺のうち左の方に葬す。その友杉田玄伯私財を以て墓碑を建て表とす。墓表に、

火浣布―石綿にて織りたる布、火に投じて汚を去る故に名づく

大通辭―通辭は今の通譯官

蠻學―洋學

智鑑靈雄居士

紋あり。（是は「一話一言」にみえたるを鈔出す。）

（三十五）誹諧師のつくれる「海の幸」といふ書あり。魚の正うつしなり。平賀鳩溪是を「日本魚譜」と名づけて、阿蘭陀人に贈りし事あり。魚の圖の上に發句あり。彼人形狀を解きし事とおもひしや。

（三十六）鳩溪みづから風來山人、又天竺浪人と號して、狂文を書きしは、「根なし草」「志道軒傳」をはじめとす。明和のはじめなり。其のち「根なし草後編」「放屁論」「同後編」「痿陰隱逸傳」「里のをだ卷」「飛んだ噂の評」「天狗觸髏鑒定緣記」「菩提樹の辯」等を書きしなり。皆不遇のあまりに鬱懷を吐きし文なり。

（三十七）鳩溪、義太夫本を初めて書きしは、「神靈矢口渡」なり。三段目南瀨六郎由良兵

庫の段は、「曾我物語」の引事にある、杵臼鄭嬰が事にて書きしなり。四段目の口、わたしもり頓兵衛が所の文を、はじめ稲毛や東作よみて見て、此よしみね臺とも、今の六郷通りを來れば、矢口の渡しにかゝらず。此言譯なくてはいかゞ、と難ぜし時、直下に筆を採りて、「六郷は近き世よりの渡しにて、其水上は弓と弦、矢口の渡しにさしかゝり」と書きしを見て、流石に東作も稱嘆せしなり。

(三十八) 風來淨るり本の名は、福内鬼外と稱す。「矢口渡」の名文は、「忠臣義士のため涙、天に通ぜばあまの川、堤もきれて流るらん。」といふ文句を自讃せり。「琥珀のちりや磁石の針、粹も不粹も一樣に、迷ふが上のまよひなり。」といふ文句は、例の物類品隲の餘習いまだぬけず、舊癖のおこりたるもをかし。

(三十九) 十六羅漢は、「寶雲經」第七に見えたれど、黃檗の十八羅漢は、第一の賓頭盧尊者と、第十七の尊者は、同とせんや、異とせんやといふ事、「谷響集」に見えたり。江戸にて十六角豆といふ物を、大坂にては十八さゝげといへり。十六と十八の數いづれにもかよふものにやとをかし。

按に、李卓吾が梵書にも十八羅漢とあり。

心中宵庚申―お千代半兵衛の情死をつくりたるもの

(四十) 童謠に、

ほゝづき程な血のなみだ、おちて松露になりやしよまい。

近松門左衛門作の「心中宵庚申」に、

ほゝづき程な血の涙、はら〳〵こぼせば走りより、わしも病者な父樣を、先へおくるが尊榮を、かへつて憂き目みせまする。是も何ゆゑ相生の、松だけゆゑといだき、つき、木末にしらぬ松の露、おちて松露になりやせん。

といへる文句を中略したるなるべし。

(四十一) 筋違御門内、柳原に茶店あり。般若面をかゝげてしるしとす。是宇治の橋姫によれるなるべし。其ならびに、翁の面をかゝげし茶屋あり、わらふべし。

(四十二) むかしは、蕎麥振舞の跡には、かならず角きりがくの豆腐を、味噌に煮て出せしが、近頃はなし。豆腐は蕎麥の毒をけすといへり。

(四十三) 近頃まで、市の温飩に、胡椒の粉をつゝみておこせしが、今はなし。撿校勾當は、衣きてありきしが、今は羽おり著てありくもをかし。

近松作「大經師昔暦」に、本妻の恪氣と、うんどんに胡椒はおさだまりにて、とあれば、

撿校―盲人の官
勾當―同上撿校の次

古くよりありし事なるべし。

(四十四)天明の頃まで、橘町藝研堀の藝者、座敷へ出づるに振袖著て來り、留袖に著かへ、又歸る時は、必振袖を著しが、今振袖を著るものなし。それより柳橋同朋町、本町、日本橋とうつり來て、眉を落し齒を染めたる藝者多くなりぬ。

留袖―振袖に對して並長の袖をいふ

(四十五)女藝者の事を　昔はをどり子といふ。明和安永の頃より藝者とよび、者などとしやれたり。辨天おとよ、新富などいひし、橘町に名高し。「妓者呼子鳥」といふ小本(田にし金魚作、後に虎の卷と改む。)此二人の事を記せり。橘町大坂屋半六といへる藥種屋の邊に、藝者多し。俳諧の點者祇德、其邊に住みしゆゑに、祇王祇女がほとりに、祇一祇德などいひし白拍子の名にたぐへて、祇德とは附きたり。辨天おとよ追善の句に、

蛇は穴辨天おとよ土の下　祇德

といひしもをかし。

(四十六)むかしの藝者は娘ゆゑ。まはし方にお袋の附來る事多し。今は眉なく、齒を染めたる藝者多くなりし故、お袋の來るを見ず。お袋の役を兼帶するなるべし。これもまた流行の變を見るべし。

(四十七)乙丑の年の初午に、長崎にありし時、稻荷の社に詣でけるに、神にさゝげし行燈あり。

十三むすめとかけてはな、ちんちく小藪と解きまする。其心はな、まだけがはえぬじやないかいな。

と書けるもをかし。

因に曰、稻荷の社關東に多し。大坂より西には稻荷なし。たゞ安藝路にて一社ありしとおぼえし。長崎にもたゞ一社なり。すべて西國に多きは、八幡宮と天滿宮なり。富士を見ぬ故か淺間はなし。大師は弘法大師のみにして、元三大師はなし。天王寺に元三大師あるのみなり。

(四十八)木曾道中の髮結床の障子に、「そるは千年髮は萬年」と書きしもをかし。

(四十九)木曾道中には、二十三夜と庚申塚の石表多し。淺間山の麓に小社あり、楷書にて、「遠近宮」と書し、額を鳥居に掲ぐ。「をちこち人の見やは咎めぬ」の歌によれるなるべし。芝居もの、「みてのみや」といふ神を信ずるよし、「かたをなみ」は片男波となり、伊吹山の「かくとだに」と云へる谷の艾よしといふも大笑なり。おしつけ「さなさだ」と云ふ新田

をちこち人の―上の句は、信濃なる淺間の嶽に立つ烟、伊勢物語の歌

芝居もの―

もひらくなるべし。

（五十）青樓にて、客人權現の宮を信ずるもをかし。山王二十一社の客人權現は女神なり。青樓に女客は入らぬものなり。

（五十一）九州にて、石地藏のかはりに、石のえびすの形あるもをかし。天道の宮といふあり。大日如來にや。

（五十二）鰻鱔に酢は毒なりと關東にては云ふに、長崎にては、浦上のうなぎを、酢味噌にてあへて喰ふもをかし。うなぎを一斤二斤とて、死うなぎを提げて來るを見しなり。

（五十三）長崎は暖國にて、すべて柑類よろし。橙など九年母の味ひありてよろし。豐後梅に星なくして大なり。密柑の味よろし。

（五十四）安永三甲午年四月十日、或日記、

宮内卿殿郡奉行

御裏切手番之頭　日野小左衛門

眞方小平次跡

右被仰附旨、於御祐筆部屋緣頰、老中列座、右近將監申渡之。

此條のこと假名世說に出でたり、參照

星―實の斑點

此時、小普請方木室庄左衛門（卯雲）跡役を願ひしが、叶はずとて述懷の狂歌あり。今日はからず此日記を見て、此時の事なるを知れり。（八月二日記）

けなげなりなるも最さねかたのあいたところへ日の小左衛門

（五十五）（省略）

（五十六）小松百龜が若き時、元飯田町に、小紋の羽織を持ちしもの一人もなし。百龜など外へ出る時、小紋の羽おりを懷中して、護持院の原のあたりにて著たりといふ。町内をば遠慮せしなり。今はいかなるいやしき裏店にても、羽織もたぬもの有るべきや。

（五十七）文武丸といへる丸藥は、小松屋が祕方なり。老人など大便祕結するによろし。委くは、予が板下をかける功能書に見ゆ。

（五十八）安永六年丙申日光御社參の時、道中にて見し駄菓子に、五荷棒といふものあり。其ころ駄菓子に達磨糖といふものに似て、一口も味ふべきものにあらず。三間梁の飴と、よき對なりと思ひしが、今年庚辰ある友のもとより、武州忍領北秩父の邊の菓子とて、五かぼうといふものを贈りしを見しに、昔見しよりは形大にして、其質もまたおこし米をもてつくりたり。其形は野鄙なれど、四十年の昔にくらぶれば味ふべし。其頃は千壽よ

千壽―千住

五荷棒―駄菓子さへ時勢につれて上品になるものを上菓子の依然たるは禪家の三十棒をくらはしむるに堪へたりといふ事か

紅屋越後屋船橋―いづれも菓子屋の名

り先には、干菓子なし。駄菓子の中にも、粟燒といふものなど丹綠青もて彩れり。今は左にてはあるまじ。

昔駄菓子達磨糖　安永道中滿二日光一

秩父長傳五荷棒一　大飴猶唱二三間梁一

五荷棒や三間梁を見るにつけ三十棒はいまの上菓子

紅屋、越後屋、船橋などは五十棒々々々。

（五十九）品川の飯賣女の價、茶屋よりの勘定は、歲暮は事多ければ　毎年正月十日の勘定なり。小錢にて十匁を一貫文、七匁五分を七百五十文と定めて、兩替屋三軒にて是を賣るなり。一年何とやらんいひし兩替屋一軒、是を賣らんとせしを、三軒のものむづかしく言ひて、車に積みし小錢を通さず。然れども大道は、天下の大道なれば、通すまじきともいひがたし。たゞ青樓に賣ることを禁ぜしをいかりて、右の車をわざ〳〵三軒の見世先を廻りて通りしもをかし。すべて所々のならひにて、曹司ヶ谷にては、十月の晦日を以て大晦日に比するも、かの會式の賑ひ故なるべし。今年（文政四年辛巳）正月十日、品川宿こと〴〵く燒失して、かの勘定の日にあたれり。

寺社門前地―然るべき寺社の門前地はその寺社の支配

底なき―徒然草に、男の色好まざ

本宿新宿ともこと〴〵く燒失。御代官支配計りも、千八百軒と云ふ。寺社門前地、町方支配ともあまたなるべし。此火に品川妙國寺の門の二王も燒失せたり。古きものにて惜むべし。

（六十）新吉原京町大文字屋市兵衛が狂名を、かぼ茶元成といふ。妻を秋風女房といひ、隱居の姥を相應内所と稱す。一とせ此内所にて狂歌會ありし時、持佛堂を見るに、先の市兵衛が位牌あり。「釋佛妙加保信士」とありしもをかしかりき。

此市兵衛、河岸にありし時、かぼ茶といふ瓜を多く買ひ置きて、妓の惣菜に用ひ、產業をつとめて此京町へ出でしとぞ。皆人かぼちや〳〵と異名せしなり。顏色も童の謠ふ歌のごとく、背ひきくて猿まなこなりしとぞ。自ら此歌をうたひ、人を笑はせしとなん。寶曆の初の頃歟。

（六十一）「さくら鏡」に、（享保十九甲寅板）　山口屋七郎右衞門内やりて　は　る

櫻にも出ぬは底なきうつはもの

「洞房語園」（元文三戊午板）、

らんは玉のさかづきに底なきが如し

イッチよく咲いたおいらが櫻かな　かしく

あまたの中に、此二の發句をもて、歴卷とすべし。「續江戸砂子」に、往し丑年、藪をひらきて櫻樹を多く植ゑて、寅の春をまち顔なり、とあり。又「洞房語園」(元文三戊午板)淺草寺蘭若の後園に、往し年櫻を植ゑられし事のはじめは、鷹叟の「歳旦輯」の序に述べられたり。千株に越えたる櫻の枝ごとに、遊君が名の札をつけたるを、それかあらぬか、木の下蔭によみあたりたる其名には、心の花ひらけと、歌ふもありけり。(下略)

(六十二) つら〳〵思へば、老病ほど、見たくでもなく、忌々しきものはあらじ。家内のものにはあきられて、よく取りあつかふ者なし。われ四年前戊寅きさらぎ十八日、登營の路すがら、神田橋のうちにて、躓きころびし後、八月十日に血を吐きしより、もとの健にたちかへるべくもあらず。酒のみても腹ふくるゝのみにて、微醺に至らず。物事に倦み退屈して面白からず。聲色の樂もなく、たゞ寐るをもて樂とし、奇書も見るにたらず、珍事も聞くにあきぬ。若き時酒のみて、とろ〳〵眠りし心地と、狎たる妓のもとに通ひし樂は、世を隔てたるごとくなりき。

ながらへば寅卯辰巳やしのばれんうしとみし年今はこひしき

こは南畝翁の書きつゞ置かれし草稿にて、其の弟子文寶亭といへるものの傳へ持てりしを、ゆくりなく己が所藏となりてより、ある人に見せしに、切に乞ひければ、否みがたくて讓り與へつ。されどをかしき册子なれば友だち某に寫さしめ、いさゝか補訂してわが文むろに收めおきつ。

待賢堂主人識

奴師勞之終

松樓―江戸吉原の娼樓松葉屋
内證―主人の居間
おかん―雑煮餅
はりうち―元結の數をまきて男髷

松樓私語

大晦日の晩、内證より、座敷持女郎にみす紙三〆、へや持に二〆、まはりに一〆、玉たばこ一つづつ、こしもと持來る。中座より著物二つづつ内證へやる事也。

大晦日の晩、下にて田樂をやき、來る人にふるまふ。晦日のおつけは例の豆腐汁なり。二かいにては蛤そばを買うてくふ。

正月元日、宵より支度して、明七つ頃少しねる。やりて來る。もはや〳〵おそくなる。おかんを御いはひなされ、といつて二階中まはる。一人も起るものなし。年男先へ湯へ這入りて、旦那衆も入る。旦那とかみさん、背中合にすわりて年神ををがむ。女郎衆目をこすり〳〵起き、一所に湯へ入る。髪ゆひ長次、髪結部屋へ踏込み子どもを起す。子供湯に入り髪をゆふ。髪ははりうち、やつこしまだなり。女郎衆らふそく一丁、すきあぶら一貝遣し、子どもにやる。程なくやりてまたまはり、もはや〳〵といひて起し、お

の如しやつこしまだ―髪を出し、島田わげに結ふこと也　かさ―椀のふた

内所―内證に同じ　とさん―盃　畫三―娼妓の階級の名

かんをいはふ。内證より奥まで順にならぶ。おかんは味噌汁にかたき餅、菜、芋、大根なり。皿にごまめ二つ、長ねぎ二本、かさに數の子、酢牛房、豆あり。小きおそなへ一つ、小きだるま一つ、土にてつくりたる大黒えびすをくれる也。それより髪をゆふものはゆひ、ねるものはねる。子どもはあそぶ。畫の頃例のやりて、もはや〳〵おそくなつたといひて來り起し、おせちをいはふ。

おせちをいはふ時は、髪を兵庫結にゆふ。ざうげにべた金のくしかうがいをさしてゆく。(此ざうげのくしかうがい、金一匁三分ほど也。つね不用なれば質に入置き、貳朱づつにてうけてさす。)おせちの椀うるしくさし。おつけ鯨と大こん、むかふにひだこに午房、にんじん、いもを盛りたる平あり。鱠は大根とにんじんとごまめ也。香物は鉢にいれて出す。おせちすみて女郎衆みな内所へ行く。お職より順々にかみさん土器をさす。肴にするめをはさむ。いたゞきとさんに入る。かみさん、たれ〳〵は大分せいが出る。ずゐぶん客人を大事にして畫三にでもなりや、とあやなす。すみて皆々引く。元日の夜内所大さわぎ也。二日の朝起きておかんをいはひ、こしもと、臺に白むく三つ、孔雀絞上著をのせ、畫三へ内所より持來る。へやもちは白むく一つ、あや衣孔雀一つ也。まはりは白

くひつみ―蓬莱飾

跡尻―番頭と遣手の居る所

むく一つ、たゞのきぬの孔雀一つ也。八時頃禮に出る。是迄女郎の内所大さわぎ也。みなみなうらつけ草履をはく。一丁目を河岸の方へ行き、とつてかへし、中の町へ出で、ふしみ町に入り二丁目へ出で、中の町の下へゆき、京町、あげや町、新町、角町へ廻り。夫より中の町上總屋新二郎前まで來りわかれ、又々茶屋へゆく。やくそくのなきは、客のあるかほにて内へ歸る。客のあるは客をつれてよる歸る。わかいもの、くひつみを持來る。吸物出る。下にて茶をたてもつて行く。

三日は中座許へ仕著せ出る。絞にて黒鳶色、梅に鶯などの模様なり。三日迄雑煮汁なり。四日五日は、てん〳〵物ずきの著物をきる也。中座は、しきせともに五通ほど著物をきかへる也。へや持は四通、まはりは三通也。(但孔雀とも)四日より十六日迄醤油の雑煮なり。

上草履はく事なし。中座へやもち二人程、としまばかりこれをゆるす。まはり、髪丸わげにゆふ事ならず、島田也。年明まへなればかまはず。女郎衆みせのかうし先へ出る事ならず。子供計出す。もし用あれば跡尻へことわりて出る。みせにて見立ありてあがりても、直に二階へ行く事ならず。内所へ一寸目禮してゆく。

仕切場もの―劇場の事務員

ぜうがみ―たゞ來てゐる客

引込―病氣などにて引

みせに居るに横ずわりにする事ならず。三線ひきても歌うたふ事ならず。しのびて小聲にうたふ。たび〳〵小用にたつ事ならず。客人の座敷にて何にても物くふ事ならず。しやれことばいふ事ならず。聞きつければ呼びつけて叱る。客人によりても、かけま、役者、仕切場ものは法度也。座敷へつれてきても、ねかす事ならず。

二十日は中の町の恵比壽講。二十一日は内の恵比壽講也。たいこちちだんな衆より合ひ、下座をうちぬき素人狂言あり。内所にて膳をならべ、かみさんめ〳〵を盛る。高盛也。いくらかへても何ともいはず。本膳坪汁にさるほゝと午房也。鱠は海鼠、大こん、にんじん、九年母也。香の物は膳へくまざさの葉をしきておく。二日の膳はあらひ鯉子つけ、二の汁は鱈にこんぶ也　此日ばかり、どんなに食うても小言いはず。焼物は鹽引鮭に白酒をかけてひく。三味せんや殿（傳八）久しく出入る。片眼なり。をどりなどをどり、をかしき男、やき物をみな〳〵持ちゆきし事あり。

内所にぜうがみ絶ゆる事なし。引込甚だうるさがる也。きふじなどに使はれるから。ほゝづきふく事ならず、口が大きくなるといふ。玉をとる事ならず、手が大きくなるといふ。きさごはじきする事ならず。客をはじき出すといふ。すがきはふり袖計ひくも

籠り居る女郎―お手玉

ふり袖―振袖新造

左平次―さしで口するものの異名

の也。ゆゑに二人三人ほどより外になし。もしみせの出る時引手なければ、中の町中さがして來る。

人々にあだ名をつけて、隠してひそかに呼ぶ。

だんなは、おやゆび。ちゞともいふ。（あたまの毛ちゞれたる故也）

かみさんは、（つる蔦やの若紫也。今の名はおいね。）ちんころ。（なりがちひさくて利口也）

よめは、（丸海老屋のまきしの也。今の名はおとよ。）小ゆび。（はなはだこんじやうわるし）

番頭仁平次は、佐平次、はなじわ。（はなに皺あるゆゑ也）

やりておまさは、へそ、（やくにたゝぬといふ事也）もはや、とも。

わかだんな（平助）は、めだま。

若いものの清次は、おはちのかよひ人。

同又助は、よくふか。

同源助は、和尚。（似たるゆゑ也）

同傳兵衛は、おきつね樣。

同十助は、横とび。

同源太郎は、帆たてがひ。（顔が大きいから）

同甚平は　よばひぼし。

ねずの番二人づつかはりぐ〜につとむ。甚平常番也。

三月節句、内證にて雛をかざり、子供のひなとて内裏雛を別段にかざる。白酒をつくり、皆々にのましむ。禮日にあらず。仕著せなし。きものはてんぐ〜也。

袷きる事なし。五月節句もきものわたいれ也、わたいれ仕著せ、惣模樣にて古風なるもの也。いたじめの單物も二通也、中座ひとへ物二つ、へや持、まはりは一つ、ふり袖は麻也。六月朔日より、内にゐるは著物、中の町へは帷子也。

火鉢、十月えびす講より出し、正月夷講に仕廻ふ。みせの火鉢は、大きなるしかみ火鉢にて、眞中へ置く。寄りてあたる事ならず。

毛氈しく事なし。みせに花ござ計也。

七月十五日、仕著せ惣模樣のかたびら也。跡にてたれも著るものなし。子供へは麻也。

毎月二十七日髪をあらふ。あらひ仕廻て、ふきぬ内かたい油をつけ、人によい事をいうてもらふ。坊主のみぬうちよい事を聞くものといふ。

八朔はしろむくなり。中座は三つ、へやもち、まはり、二つ重ねてきる。仕著せにあらず。

年中いつち賑かなるは、月見とつき出しの出る也。

八月十四日待宵にぎやかなり。

十五日十六日、肥前座人形來る例也。夜一夜かひきり也。月見には新造二十人程つく。出みせの内をかりる也。

つき出しの出るまへ、よりあひといふ事あり。内證の奥へ女郎衆のこらずよばれ、かみさんたのむ也。よく引廻してやつてくれろといふ。内の庭にて道中のけいこあり。かみさんこれをゐしゆる也。うちかけをして前帶の中へ扇をいれてつつばる。つき出しの出る日になりて、金銀の扇などに紋所をつけてくばる時もあり、盃をくばるもあり。中の町たいこ持、茶屋の兄さんをたのみ、ついてあるかせる。金壹歩づつ也。しやん〜と手をうちてわかるゝ也。

七月十五日に、かゝへ四人にしきせをするなり。よい客は花をやる也。

つき出の出る日、強飯をふかす。五町中へ配る也。蒸籠ばてんぐ出る茶屋へ計配る也。
月見の挑灯百張ほど出來る。十五日十六日二日には、客人みな〳〵持行く。かざり物年
年思ひつきちがふ也。蒸籠二階の口までかざる。（月見の衣類二日に二通なり。）
月見の日、若者惣花、かゝへ四人に惣花なり。
若者下の惣花三匁貳分。
後の月は前ほどに賑にてはなし。
七月盆には、赤豆、きなこをつけし團子を食す。八月は、團子に豆、くり、かき、など、
九月は汁團子也。
九月節句は仕著せにあらず。各物ずきの著類也。
十月玄猪、ほたもちを食はしむ。二季の彼岸も同じ。玄猪には又著物をきる事也。酉の
町は物日なれども著物は著ず。
十二月八日ほたけには著物をきる也。
毎月晦日豆腐汁也。
庚申、甲子、已巳待には、引ずり豆腐、ぜんまいに油揚の煮物、茶飯也。赤豆きなこを

ほたけ―事納

つけし餅を内證の客に出す。
晝みせは八つ時過、夜みせは五つ頃出る。
二階にて身ごしらへする事一切ならず。内證の次に髪べやあり。
座鋪代（瀬川座鋪四間）金壹兩、松人其外は金壹分貳朱、へや持も新造のつくは壹分、外
のへや持は二朱也。五節句に内證へやる也。茶屋のつけ金は一月置壹分づつ也。
唐紙張かへは暮計、一年に一度なり。床計が三匁位也。あるは張りかへぬもあり。
疊かへは七月十二月計也。四疊で金一匁也。蛤一つは七十二文程、鮑生貝一貫程也。
身ごしらへござ、油じみてあしき時かふに、價二百文也。
蕎麥など、二朱か三百文あつらへても少し計よこす也。これは中居（二人あり）にたのむ。
中居中途にてあたへをとると見えたり。
波多野大根五本ほどにて二十四文歟三十二文也。飯は下へおりて食ふ事也。菜はてんで
んに持て行く也。數なし。二階にあがらぬ時は下にてくふ。客ありて二階に居ればかへ
して食ふ也。お茶をひきたる女郎、二階に一切ねる事ならず。
禿廻し女一人あり。子どものせわをやく也。衣類等のせわまでやく也。

若いもの、ふるきはみせを出し、かよひて勤る也。
敷初の時、蕎麥三兩二分ほど入る也。内證のそばはよき蕎麥なり。

右雜妓三穂崎口授

天明丙午元日蝕

四方山人

上下のひざから酒をかけはじめますくすゝむ元日のしよく

おなじく二日の夜瀬川の座敷に此歌を見て

幇間長門萬里
狂名 猿萬里大夫

元日の朝から客をかけはじめますくすゝむ松葉屋のしよく

松樓私語終

此書也。天明乙未春日。亡妾阿賤所口授也。宜於畫簾障中。喫梅子飲溫酒。與山東外史所著總籬併讀。時人有詩以爲證。曰。

松葉樓中三穂崎　更名阿賤落蛾眉
天明丙午中元日　一擲千金贖身時

嘉平幾望　山谷道人書於越烏巢

四段目の由良之助と不老門口の引け四つは來る事遲しといへども、光陰のうつることは猪の牙の舟のいちはやければ、芦葉に乘し初祖菩薩もおかんの膳にばからしう、拂子を投げて孔雀の袖をしぼりなん。三保の松葉屋羽衣の、賤のをだまきくりかへさす、惜き硯の水調子に、いうた詞のかぞへがきも、美婦人去て返魂香のなきをかなしむ。彼小冊の昔おもへば、師走のはての狐舞、初買の四手駕籠に夢を結びし輪かざりの、わかざかりの時もありしが、命といふ字をけさせたる、吸膏藥の芭蕉も破れ、居續の火鉢にのせし榮螺もくだけて、身をうすの目に鶴龜の臺もキの字にお茶をひき、たがたがかけし屋の棟の、天水桶もすくなくなり、かんざしでくふ帆立貝にも、はからざる世の古風を失ふ翠簾の障子もう

つりかはり、昔の禿はばゝアとなり、小町のはてにたまくあへば、オヤおひさしいといふばかり、三日見ぬ間に流行おくれ、二十五の曉と、しるせし年をさかしまに、五十二の畫みせ時分、艶示老人、懐舊箱入恩借の此小册の奥の間にかきつけて、唯今返上仕るといふ。

太田南畝集索引

（語句は凡て發音に從つて五十音順に排列し、目錄に出でたるは概ね省略に從ふ）

ア

○青梅撰食盛（ヂラウイヅ　バリヤカリ）　六二六ノ七
○青木坂　三五二ノ一三
○閼伽井　三九〇ノ二
○赤羽先生　四五四ノ三
○赤本　一四八ノ三
○赤前垂　三八三ノ一四
同　三九五ノ四
○秋風女房　七〇七ノ四
○あきしべばな　四四七ノ四
○朱樂菅江　二六ノ三
同　六九〇ノ二
同　一〇九ノ一〇
○あけち館の主　六二ノ七
○淺黄うら　一三三ノ四
○淺草菴　三〇二ノ一一
○足利學校　五五六ノ五
○足利尊氏　五六四ノ一三
○蘆づくし　一〇七ノ三
○蘆屋の道滿　一〇七ノ七
○あそ　一一九ノ二
○愛宕山　一六六ノ六
○小豆飯　四三五ノ一
○東鑑　五一六ノ一二
同　五七六ノ一
○吾妻權現　三三七ノ三
○吾妻錦繪　一四五ノ五
○跡尻　七一三ノ一三
○穴一　一一ノ一〇
○穴八幡　三〇五ノ二
○穴太記　三八五ノ一二
○安倍川　三四九ノ一二
○天國（アマクニ）　二六九ノ一一
○天野信景　五五三ノ一一
○編笠茶屋　四三六ノ九
○網の破損針金　六八九ノ一三
○安國寺　五六四ノ一四
○飴の餅　三五三ノ三
○飴寶引　八四ノ九
同　一四一ノ九
○あやめうち　一〇ノ九
○あらにごはらへ　二〇八ノ三
○有難坊　四八二ノ五
○粟田口　三九四ノ二

イ、ヰ

○いほり　六四八ノ一二
○菴崎の隅田川　三四八ノ九
○いかきの團子　五五ノ六
○幾代餅　四三四ノ二
○石川丈山　四六七ノ一三
同　五四六ノ九
○石部の金山　三八四ノ四

○石卷山　三六三ノ五
○衣裳繪　一四五ノ七
○異制庭訓　五一五ノ五
○伊川法眼　三一五ノ六
○異素六帖　六九六ノ四
○一圓窓　二五六ノ七
○市川三升　一八一ノ一〇
同　六二二ノ一四
○いちぐら　七ノ一一
○いちご　七〇ノ七
○一二の松　二九二ノ六
○市原野　四四二ノ一四
○一枚繪　一五三ノ一
○市村家橘　一八ノ二
○一文取　一七二ノ一一
○一路老人　五九七ノ一三
○嚴島　五四一ノ五
○一心二河白道　四三三ノ一
○いづ平　六三三ノ一四
○一本氣　一ノ一
○一本亭芙蓉花　六三一ノ八

ウ

○いづみ川　三七五ノ一〇
○井出の玉川　一九〇ノ九
○稻荷の社　七〇三ノ六
○稻荷町　一一七ノ二二
○猪鼻の立場　三八〇ノ七
○伊吹山　四八六ノ五
○衣服の流行　六六一ノ八
○今井四郎　三八七ノ七
○今川記　五七八ノ一一
○今福　八七ノ一〇
○因樹屋書影　五〇〇ノ四
○以呂波石　四四四ノ一一
○いろはの考證　四四四ノ八
○以呂波問辨　四四四ノ一四
○岩井杜若　三一五ノ九
○岩上　三八一ノ九
○岩根山　三八二ノ八
○いはほ琵琶　四四三ノ二
○石見銀山　一五ノ三
○外郎（ウキラウ）　三三八ノ一〇
○外郎賣　一七八ノ九
○上杉管領　五四〇ノ五
○上田餘齊　四六二ノ六
○上野山　一九〇ノ六
○鵜飼金平　四七四ノ二
○うかむ瀬　四三一ノ二
○浮島が原　三四五ノ一一
○浮世又平　三九二ノ七
○牛天神　三〇ノ一一
同　九九ノ二
同　二六四ノ七
同　二九七ノ一〇
○牛の御前　六三一ノ三
○有心無心　一一一ノ一一
○歌合　九九ノ五
○氏綱　四六五ノ一三
○内山先生　六九〇ノ二
○うつくし松　三八三ノ一〇
○鵜衣（ウヅラゴロモ）　一〇二ノ三
○鵜山櫻花　三〇三ノ九

○烏亭　一二一ノ二
○烏亭馬　二八四ノ一
○うなぎの酢味噌　七〇四ノ六
○宇野三平　四六九ノ五
○姥が餅屋　三八六ノ六
○うば玉　三〇五ノ一三
○飲ゞ馬乎　一五一ノ五
○午まつり　一〇ノ八
○海の幸　六九九ノ七
○雲谷雜記　五一二ノ二
○溫飩に胡椒　七〇一ノ一二
○梅の木和中散　三八四ノ一一

エ、エ

○永欣寺　五〇〇ノ四
○榮山寺　四九九ノ一二
○榮之　三一三ノ八
○廻向院　二八九ノ六
○廻向双紙　五七七ノ四
○江尻村　三四五ノ九
○えぞ櫻　三七七ノ一
同　四一一ノ二
○枝豆　六八三ノ四
○江戸鬼子、江戸砂子　一九ノ六
○江戸川　六ノ四
○江戸節　一二四ノ一
○夷石　三七九ノ一
○燕斜　二四九ノ六
同　二九一ノ七
○延壽寺　三三五ノ一〇
○宴中郎集　五七六ノ六
○焉馬子　一一八ノ三
○延命靈　一七九ノ六
○エレキテルセイリテイト　六九八ノ一二

オ、ヲ

○笈さがし　三三六ノ一〇
○大久保　三五七ノ八
○おうなゝおもて　二四三ノ一四
○大井川明　三二ノ一四
○大池町　三八二ノ三
○大池村　三五五ノ九
○大岩觀音　三六三ノ五
○大江匡衡　一四ノ四
○大岡寺繩手　三七六ノ六
○大かめ川　三八六ノ一〇
○大かれ木小かれ木　三四二ノ一一
○鳳箱　四四一ノ七
○王凝齋　五三六ノ一一
○大藏千文　四二二ノ一二
○王阮亭　五六七ノ一三
○大雜書　五二七ノ八
○大薩廳　一七六ノ一一
○櫻壽院　五四〇ノ一
○大島蓼太　六八四ノ八
○大高清助　四七〇ノ二
○太田金吾　三五ノ一〇
○大谷　三九七ノ一四
○大谷町　三九二ノ一二
○大津繪　一六ノ六
同　一七四ノ四
同　三一四ノ六

大津繪　三九三ノ一
同　三九二ノ七
○大津馬　四〇〇ノ八
○大歳　二一三ノ一
○應仁の亂　五九二ノ一
○大根太木　二三ノ一
同　二九ノ一
同　六八六ノ一二
同　六九六ノ一四
（栄苣殿（オホバコトノ）の
みとぶらひ　一一ノ七
○近江八景　二九八ノ八
○大三輪　六六ノ一一
○大飯食人　一二六ノ二
○大森宗勳　六〇二ノ四
○大屋川　三六七ノ四
○大屋裏住　六八六ノ一四
○岡焉計　三五ノ五
○岡西惟中　五四〇ノ二
○岡部八脩　五七二ノ七
○岡部の宿　三五一ノ二
○おかん　七一二ノ一
○岡本一抱子　四二一ノ一二
○沖津川　三四八ノ一
○沖津のり　三四七ノ一四
○然籃内傳（オキナイデン）九三ノ一一
○奥山宗鱗　五七八ノ三
○小栗堂　三三三ノ一
○おことをさめ　二六二ノ一〇
○御作事　六九四ノ一一
○おじやれ　二一三ノ五
○御關所　三四二ノ三
○おせち　七一二ノ五
○おせん　三三ノ一四
○御草子かけの松　三六五ノ七
○おたふくの面　一〇八ノ五
○於玉於杉　一七四ノ六
○お玉坂　三四一ノ四
○小田原記　五二八ノ四
○遠近の宮　七〇三ノ一二
○お茶をひき　七二三ノ九
○をとり子　七〇二ノ五
○鬼をする　五一四ノ六
○鳴呼（オエガハラ）　六九四ノ一〇
○鬼ついほ　一一ノ一
○鬼念佛　五二ノ八
同　二三七ノ五
○鬼の首の紋　四三五ノ四
○鬼の手柄　一四八ノ一
○おぬいの道行　三七ノ一〇
○小野川榮藏　六三〇ノ二
○をはぎのもち　四八ノ一一
○小原　四八三ノ二
○於針　一六七ノ九
○お萬が紅　一一ノ一二
○音樂（調子の説）　四六〇ノ五
○面模似足　三四ノ八
○面八句　五四ノ七
○阿蘭陀人獻上物・　三三一ノ一〇

カ、クワ

○かひこ菴　二四三ノ二
○海樓餘錄　五〇八ノ八
○諧聲字箋　五五八ノ一
○海棠　四八一ノ一一
○海防纂要　五七六ノ九
○臥雲橋　三九九ノ一
○臥雲日件錄　五二三ノ一二
○顔見世（つらみせを見よ）
○下學集　五一六ノ九
同　五三七ノ二
○火浣布　六九八ノ八
○加賀屋　三一二ノ一二
○香川太沖　四六七ノ七
○柿頭巾　三一ノ六
○歡歸堂合集　五〇〇ノ九
○格古要論　四九九ノ八
同　五一二ノ九
○權蜀（クワクドウ）の場　四〇一ノ六
○加久縄　五五三ノ七
○鶴南飛　五八五ノ二
○鶴林玉露　五一九ノ一三
○かくれん房　一一ノ二
○確連坊　四二三ノ八
○影づくし　九〇ノ一
○かげとり　三三二ノ一二
○かげま　七一四ノ三
○花甲重逢　五三一ノ三
○加古川行國　一八ノ八
○がごせ　九六ノ九
○籠目々々　一一ノ四
○葛西太郎　四二ノ五
同　一六四ノ一一
○かさご　六九ノ四
○笠寺觀音　三六九ノ一二
○笠堂　三七四ノ一三
○風祭　三三九ノ一
○柯山隨筆　五四四ノ八
○笠森稲荷　三三ノ八
同　一八〇ノ四
○鹿嶋禰宜　一七八ノ三
○賀勝水　三六六ノ五
○春日部錦江　二六ノ七
○春日部左衛門尉　二七ノ五
○片岡丑兵衛　三九三ノ五
○かた言　五五四ノ四
○華頂山　三九五ノ九
○梶原山　三四九ノ七
○かつを　九ノ二
○上總念佛　一七七ノ一三
○上總木綿　一八四ノ五
○葛飾蟹子丸　二六六ノ一一
○葛飾のせき　二八八ノ一四
○カッソウ善兵衛　四二六ノ一三
○賀邸先生　六八七ノ九
○河東節　二五一ノ一
同　六四六ノ八
○門びらき　六七ノ一〇
同　六二六ノ二
○兼平が手向の花松　三八八ノ四
○兼平の松見　三九〇ノ一二
○狩野探幽齋　三〇二ノ九
○歌舞伎年代記　二八四ノ一二
○かぶろ　六五七ノ五
○かぼちやの元成　四三ノ三
同　八六ノ四

加保茶元成 四七八ノ八
同 七〇七ノ四
○鎌倉三代記 六六六ノ一一
○鎌倉志 五三三ノ六
同 五四一ノ七
○紙花 九一ノ九
同 一六七ノ八
○感應寺 二八二ノ一三
同 二九三ノ一三
同 四九二ノ三
○寒山子 一七〇ノ七
○元三大師 四五九ノ一二
同 七〇三ノ八
○顔氏家訓 五一五ノ九
○神田祭 三〇九ノ九
○神田明神 五一一ノ一四
○樒銅（クワンドウ） 三二九ノ一
○願人坊 一四五ノ二
同 一六七ノ九
○願妙山妙星寺（貫妙山妙日寺） 三五五ノ一四
○秃廻（カムロマハシ） 七二〇ノ三
○龜成 四六九ノ一
同 六二四ノ七
○龜屋太助 四七七ノ一三
○鴨三竹 四七一ノ一一
○加茂季鷹 二九六ノ一三
○がらく 六三一ノ五
○輕尻 四七七ノ四
○川合橋 三五七ノ二

キ

○寄園寄所寄 四九八ノ七
同 五一〇ノ八
同 五一九ノ八
同 五二二ノ一二
○祇園執行日記 五四四ノ二
○祇園豆腐 四二〇ノ一
○聞き上手 四二九ノ七
○菊合 四三七ノ一三
○菊煙草 五ノ三
○菊の滑革 四四六ノ三
○義經記 五一一ノ五
○鬼狀頭 六九四ノ一一
○きさご 一一ノ一三
○書山上人 五七四ノ一四
○鬼子母神 三〇八ノ九
○吉書はじめ 一〇五ノ一一
○喜瀨川 三四三ノ五
○黄瀨川の龜鶴 三四四ノ一三
○歸藏抄 五九六ノ五
○北村季吟翁 五八二ノ一
○きちん 七六ノ八
○熙朝樂事 五一九ノ七
○吉祥山安祥寺 三九三ノ七
○橘仙 一八ノ七
○橘奴 一八ノ七
○狐が崎 三四九ノ七
○歸田錄 五〇九ノ一三
○義堂 四九七ノ六
同 五〇一ノ一
同 五六四ノ一三
○紀海音 六二六ノ五

○紀の國や 二六二ノ一四
○紀國屋作内 五三二ノ七
○紀定麿 四九ノ五
○木の下おこし米 四三三ノ七
○紀文衰へて後の住所 四七八ノ一二
○紀文が涼の酒盃 四八三ノ一
○金華 四三五ノ二
○きん〳〵 六一ノ四
○きん〳〵たろ 九二ノ三
○金谷 四六八ノ五
○近松寺 三九一ノ一
○金錢（莫謂目腐金） 一四二ノ四
○金錢物價（日清の比較） 六〇九ノ六
同（遊廓い諸費） 七一九ノ七
○銀出 一六六ノ一〇
○金猫銀猫 寶女） 六九三ノ八
○金羅 六二二ノ四
○木村源之進 四六七ノ一〇
○金埒 二四一ノ四
○金龍山の淺草餅 四三四ノ三
○客人權現 四八六ノ七
同 七〇四ノ二
○龜越國王 五八五ノ七
○舊唐書 五二四ノ一
○牛門の四友 六九五ノ六
○狂雲寺 五九八ノ四
○教恩寺 三六一ノ九
○俠客 六五六ノ七
○狂歌盃 一二三ノ六
○狂歌堂 一一三ノ七
○狂歌堂の主人眞顔 一二七ノ一一
○狂歌の滑革 一一一ノ四
○曉月房 七六ノ一一
同 八八ノ六
○行狀記 四三八ノ四
○京間田舍間 二二ノ六
○玉海 五〇八ノ一
同 五六〇ノ一四
○玉桂 四二八ノ一四
○玉梅 二四一ノ七
○きり金 四三四ノ三
○桐座 四八六ノ七
○きりしたん 一三四ノ二
○桐づくし 四六ノ七
○麒麟 六一一ノ一三
○貴嶺問答 五一五ノ三

ク

○くひつみ 七一三ノ五
○空華集 五〇一ノ一
○空華日工集 四九七ノ六
○公家惡 六九四ノ六
○草津川 三八六ノ四
○草薙村 三四九ノ四
○曲舞（クセマヒ） 六六八ノ一一
○九十九庵風之 四八五ノ一
○くつかけ村 三七九ノ九
○九年酒 三ノ四
○熊膽子 五五八ノ一
○雲切よけ 一三三ノ二
○倉澤の立場 三四七ノ三
○栗のもと 六三ノ九
同 一一一ノ一一

○車どめ　五ノ一〇
○黒吉　一一九ノ八
○黒づくし　四五ノ九
○委しくは先の辻番に問ふべし　一三五ノ九
○桑名彌次兵衛　五二六ノ一三

ケ

○蹴場　三九四ノ五
○藝苑日渉　六〇三ノ一
○繼華會　九八ノ六
同　四九七ノ七
○桂開會　四九七ノ六
○京華集　四九九ノ一
同　五〇二ノ六
同　五二九ノ一〇
同　五三三ノ二
同　五五四ノ一三
同　五六五ノ一
○藝者　七〇二ノ五
○藝者其孝記　二八四ノ一〇

○妓者呼子鳥　七〇二ノ六
○傾城　三ノ七
○慶念山誓願寺　三六八ノ三
○下戸　二三九ノ四
○蹴轉　一七二ノ五
○結制　四五〇ノ一一
○卷懷食鏡　五六六ノ五
○源五兵衛餅　四三三ノ一二
○源五郎鮒　三八八ノ一三
○拳酒　一二一ノ七
○源氏物語　四三四ノ七
○源氏やしき　五四〇ノ一
○幻住菴　三八八ノ一
○元政上人の墓　三九九ノ七
○けんどん　四四六ノ二
○劍菱　三〇一ノ七
○乾隆帝　六一五ノ五

コ

○戀川春町　二〇三ノ八
○小磯宿　四六〇ノ一二
○小諸　四二六ノ一〇
○光悅寺　一九ノ一
○古近江　三七六ノ三
○鉤匙橋　八ノ六
○皇館太神宮　一七〇ノ五
○香玉子　五九五ノ五
○弘慶子　二〇六ノ一
○黃山谷　四二四ノ三
○荒神　四九九ノ一
○高嵩谷　五〇二ノ六
○横川　五六五ノ一
同　五三〇ノ六
○香祖筆記　五三一ノ三
○江泰交　五八八ノ五
○高枕表號の說　三八三ノ五
○弘法大師二本杉　五三二ノ四
○弘法大師の靈夢　三九二ノ九
○弘法大師火除名號石　四四四ノ七
○高野山日記　三六七ノ二
○高野參

○甲陽軍鑑　四九八ノ一二
同　五二二ノ二
同　五四〇ノ四
○氷うめ　二六九ノ六
○香爐山彌陀寺　五七八ノ一
○幸若のお禮　二〇五ノ一
○靈蓋權現　二八九ノ六
○五荷棒　七〇五ノ一〇
○虎關禪師　五六五ノ九
○こぎく　一九二ノ一四
○こきりこ　四七ノ二
○穀粱傳　五一四ノ三
○國朝詩別裁　五七六ノ九
○國分散　三五八ノ一一
○御げん　二五〇ノ七
○吳剛　二四ノ八
○故混馬鹿集　六九六ノ八
○五雜俎　五一五ノ一四
同　五一七ノ一
同　五一八ノ一二
同　五五四ノ一一
○乞兒橋　一七三ノ九
○五色山　三五七ノ六
○小島橋洲　五一七ノ一三
同　六八六ノ一一
○御所謎の本　一二九ノ一〇
○子育の觀音堂　三五三ノ四
○碁太平記　二八四ノ一一
○護持院原　四八九ノ四
○胡兆新　五三〇ノ一一
○滑稽詩文　五四二ノ九
○牛頭天王　三八〇ノ一一
○御殿山　二九八ノ四
○琴の橋　三七七ノ四
○ことのまゝの明神　三五三ノ一二
○車觸　一七八ノ四
○子とろ〳〵　一一ノ四
○諺、格言、警句　一五一ノ一一
朝寢坊而宵迷　一八ノ一〇
麻布に住すればきがしれぬ
怪しきを見て怪まざれば怪しみおのづから消ゆ　二〇ノ四
生馬眼　一五一ノ一
一富士二鷹　三〇〇ノ一〇
一富士二鷹三茄子　一五二ノ二
一文惜　三二〇ノ五
一粒萬倍　二〇五ノ九
一升樽と百の錢に手を附くるとその儘皆になる　四七二ノ五
一寸先は闇　三六ノ一四
一寸さきを闇　一二四ノ七
犬ぼれ折つて鷹にとらるゝ　三〇〇ノ一四
牛はれがひがらはなづら通す　二九七ノ一一
えてに最手をあげ　九九ノ九
おくり狼　二二ノ九
驕平家不レ久　一四一ノ五
金三棒於鬼一　一四九ノ九
鬼目亦應レ含三淚雨一　一七六ノ八

鬼外福内　一四九ノ一〇
親も嘉兵衛子も嘉兵衛　一二七ノ二
子ノ抔追附貧乏多　一四一ノ一
稼ぐに追ひつく貧乏なし　二六一ノ九
蝸牛の角をちゞめてはいり、蟹の甲に似せて穴を掘る　五六ノ一二
果報寝待　一五三ノ六
愛子爲ノ旅　一四九ノ七
禿興寺にかませんきやうごんきごも讃　五九六ノ二
佛のゆかりなり　四八ノ九
京の女郎に江戸の張なもたせ長崎の衣裝をきせて大坂の揚屋で遊ぶ　九三ノ三
京夢大阪夢　一五一ノ一〇
食ひものは小勢でくひ仕事は大勢でせよ　二六一ノ八
くさいもの身しらず　二三八ノ九
くじもたふるゝ戀の山　六〇ノ二
口も八町　五八ノ五
下駄と燒味噌　四七ノ一四
高野六十　一九二ノ一
同　二五七ノ六
こりては思案にあたはざる　六ノ五
三味線と蛸は血を狂はす　四七四ノ一一
したしき中の垣根七尺さつて師の影を踏まず　六五ノ一一
七里かへりて喰ふ　二八五ノ一
七里けんぱい　三一二ノ七
知らぬが佛　二八五ノ二
師走女　二五ノ五
同　二〇ノ六
大隈は朝市にあり　七二ノ五
　二三ノ三

麁は死すとも穢はつまず　三〇〇ノ一三
他人のはじめちかしき中はかきをせよ　六五ノ一〇
地獄沙汰金次第　一九〇ノ一二
忠臣は孝子の門に求む　一四〇ノ八
土一升金一升　七三ノ五
以ノ槌掃ニ庭前一　二四九ノ一一
天道不ノ殺ノ人　一七九ノ五
天道人を殺すべし　一五三ノ五
毒を食ふとも盟なれぶろことなかれ　一二四ノ八
隣の糟糠　一二四ノ七
隣の痴氣を頭痛にやむ　六五ノ四
ないものは食ひたく　六五ノ七
こはい事は見たし　九六ノ八
茄子のならぬ蔓　七〇ノ三
夏の雨は馬の脊をわくろ　五一八ノ二
なんだら法師　八九ノ一〇
人間萬事塞翁が馬　二八四ノ三
人間萬事早馬のごとし　三四ノ五
人間萬事晦日暗　一四〇ノ五
人間六十二年　二三五ノ二
ぬかぬ大刀の高名　八八ノ八
ねこもしやくしも　二五一ノ八
寢不ノ待ニ果報一　一五二ノ四
能書不ノ擇ノ筆　一六八ノ一一
箱根よりこなたに野夫と化物なし　九六ノ七
畠水練　一三七ノ二
はつち坊の報謝米はど　六三二ノ一
花は三芳野人は武士　九四ノ一
人ごといへばかげがさす　九〇ノ四
ひとつ星をみつけた人に三愛の辯ありて牛に雙角のあらそひなし　六四六ノ一二
爲ノ貧爲ノ鈍　二九ノ九
武士不ノ食高楊枝　一四〇ノ八
屁をひらば尻すぼめよ　一四一ノ一二
ほれが舍利になると　一二四ノ七
も　三一一ノ六
迷へばうそも誠となり悟ればまことも嘘となる　三ノ五
味噌之味噌臭非ニ上味噌一也　一三七ノ一
三子魂迄ノ百　一四八ノ五
見ぬ唐土の京物語　一一六ノ一二
見ぬ京物語　八七ノ二
美濃と近江の寢物語　六〇八ノ一〇
むかひ三軒兩どなり　六四ノ五
目之所ノ寄晴之寄　一三七ノ一〇
もえ杭に火のつきやすく　一〇三ノ一一
餅は餅屋　五四ノ六
同　八七ノ五
桃栗三年柿八月　二八四ノ二
桃栗三年柿八年　一七六ノ二
燒木杭ニ火乃附安仮　一三四ノ八
山師の玄關　九七ノ七
山のぬしはおれ一人　一一ノ八
山主余一人　一五五ノ九
管から天ぢよくを窺ふ　九三ノ七
ろにご讀みろにご知らす　三二ノ七
論語不ノ知論語讀　一四六ノ八
禍物三年亦有可用者焉　一五八ノ一
破鍋にとぢ蓋　一〇八ノ九
○小普請　六九四ノ一〇
○五分緣　二二ノ八
○古文眞寶抄　五八三ノ七

○古文眞寶のはなし 三三ノ六
○古法眼筆捨山 三七九ノ三
○小松百龜 七〇五ノ五
○こまどり 一一ノ四
○古馬屋 三七六ノ四
○金剛山平間寺 五三一ノ九
○金堂 三九〇ノ一
○今日歌集 六八六ノ七
○甑山姥〔コモチヤマウバ〕 六三六ノ一一
○小紋の絹羽織 四二九ノ四
○五葉の松 一〇三ノ二
○小吉田の立場 三四九ノ四
○古列女傳 五二四ノ七
○語路 四三九ノ八
○語路萬句 六二一ノ七

サ

○西園雅集 一〇八ノ二
○柴屋寺 三五〇ノ一一
○才牛 一七四ノ三
○西行忌 一六六ノ一
○西行法師 六ノ九
○再昌院法印 三〇三ノ一
○濟松寺 三〇五ノ四
○才藏集 六九六ノ七
○塞の河原 三四一ノ一四
○濟北集 五一一ノ三
同 五六六ノ二
○堺川の土橋 三六八ノ一三
○盃のいろ〳〵 一一六ノ一二
同 一一二ノ九
○盃の米人 四二四ノ一二
○倒柱 五〇二ノ一
○酒勾川 三三七ノ一三
○策彦 五〇四ノ三
○櫻井谷 一一二ノ四
○さくら鏡 七〇七ノ一一
○櫻川 三八三ノ八
○鮭 七〇ノ七
○酒(其德) 一二二ノ六
同(飲酒法令) 三二二ノ六
○酒上熱鬢 六九〇ノ一三
同 六九六ノ一四
○酒上不埒 四二ノ一三
同 一一九ノ一
○さゝ粽 四三三ノ七
○笹屋の胡麻どうらん 四三四ノ三
○左慈 一〇九ノ五
○さし出し 二五七ノ五
○薩埵峠 三四七ノ七
○左内坂の粟燒 四三四ノ三
○讃岐圓坐 五二九ノ一三
○三黃湯 二四ノ一四
○さんぐわん餡 四三三ノ一二
○三間樑 七〇五ノ一一
○三間屋 一八五ノ四
○三酸 五〇二ノ五
○三條の大橋 三九四ノ八
○三體詩抄 五〇二ノ一〇
○酸物圖 一二九ノ七
○三寶荒神 四七七ノ四
○三本傘 一八一ノ一四

三本傘 一八三ノ五
○三本松 三五七ノ八
○山門五三桐 二四〇ノ八
○山谷 八ノ四
○鞘繪 一四五ノ一〇
○猿が馬場 三六二ノ一一
○猿寺 二五七ノ三
○猿拔山 三六八ノ六
○さるぼう 七一四ノ七
○猿萬里大夫 七二一ノ五
○澤村宗十郎 二五五ノ五
○澤村訥子 二六二ノ一〇

シ

○慈安寺 三八一ノ一
○思案橋 二七一ノ一一
○鹽尻 五五三ノ一一
○鹽瀨饅頭 四三三ノ七
○鹽見觀音 三六二ノ七
○汐見坂 三六二ノ六
○鹿津部眞顏 一〇一ノ三
同 一一三ノ一
○似我蜂物語 五二八ノ一
○しかみ火鉢 四五〇ノ四
○色紙 五一三ノ五
○鳴立庵 三三五ノ一四
○師行未師行 五八八ノ九
○仕切場 七一四ノ四
○時雨蛤 三七二ノ八
○恃古之節 四九七ノ六
○自殺の一例 四五三ノ六
○子子孫彦 四九ノ一
○自性院 四八一ノ一三
○自墮落先生 三四ノ一一
○糸竹初心集 五九八ノ八
○絲竹大全 六〇一ノ七
○七拳 一二一ノ八
○七賢圖式 一一六ノ一一
○七の字づくし 二八四ノ四
○七面の社 三四ノ一一
○實事仕 六九四ノ六
○詩轍 五四九ノ一〇
○信濃屋 二五ノ一二
○不忍の池の蓮 六四六ノ四
○芝居(其四時) 一八二ノ一二
同(其光景) 四四六ノ八
同(竹本八太夫堀川の唱歌) 六三二ノ一四
○芝居狂歌摺物はじめ 六四〇ノ一四
○芝全交 九四ノ四
○慈悲心(鳥の名) 一八九ノ五
○嶋田の宿 三五一ノ七
○四萬六千日 二九三ノ二
○清水谷大納言實業 四二八ノ一
○沈歸愚 五七六ノ九
○信玄公 五四〇ノ六
○新五左 一三三ノ四
同 一五一ノ三
○新齊諧 五一九ノ一〇
○晉子 二六〇ノ一一
○新鄰濱 一三九ノ五
○神泉苑 三九五ノ一
○眞俗交談記 四九七ノ七

○新年(江戸の春) 一四一ノ七
同(松の内の遊里) 六五九ノ八
同(遊女屋の元日) 七一一ノ五
○新年おとし咄 二八四ノ一二
○新命婦 一二五ノ六
○神門寺 四四四ノ九
○直立寺 五四〇ノ六
○神靈矢口渡 六九九ノ一四
○四溟陳人 三三〇ノ六
○釋氏要覽 五一〇ノ一二
○釋名 五〇九ノ五
○捨樂齋 四二三ノ七
○十王堂 三六八ノ三
○十九日(馬鹿〇事) 六八四ノ五
○收魂 五一九ノ六
○修性院 二五三ノ三
○衆星閣 三二七ノ一
○秋燈叢話 五三六ノ一一
○秋坪新語 五一二ノ七
○十六羅漢と十八羅漢 七〇〇ノ一〇
○宿次 二一六ノ五
○壽德院 三五〇ノ三
○遺生八隱 五〇一ノ七
○春臺 四六五ノ七
○聖一國師 四四七ノ二
○松隆寺 三四五ノ一三
○生姜市 二五五ノ一二
○せうがみ 七一四ノ一二
○勝軍 五六五ノ二
○驛牙 五一四ノ九
○正慶寺 五八二ノ一
○松月院 五七二ノ六
○尙齒會 四九二ノ三
○上々等 一一九ノ八
○紫陽業隆 五〇二ノ一〇
○裝束模 一〇四ノ一〇
○正直喬麥 四三九ノ一四
同 六二一ノ七
○正傳節 三ノ一
○正燈寺 一三一ノ五
○紹巴法橋 四三四ノ九
○菖蒲にて作ろいろ〳〵 五五四ノ一四
○蕭鳴草 五五三ノ一四
○小右紀 五一四ノ一二
○逍遙亭 三八ノ四
○鐘離權 五三〇ノ五
○蕉了 五八八ノ一一
○諸類本草 五五四ノ八
○淨瑠璃の沿革 一二三ノ八
○書畫(櫻の寫生) 四八一ノ八
同(印の押し所) 四八二ノ六
同(猿の寫生) 四七六ノ四
同(名畫無二對軸〇) 五一二ノ九
○蜀山人の老病 七〇八ノ七
○徐氏筆精 五〇〇ノ八
同 五一〇ノ三
○白菊 五四一ノ九
○白子の奎 三三二ノ九
○白鳥陵 三七四ノ一四
○虱先生 四六八ノ三
○知れずば先の辻番にと はん 三三ノ四
○しろ水 三四一ノ五

○詩話類編 五三〇ノ一

ス

○駟僧(スアイ) 四七六ノ一四
○隨園詩話 五一七ノ七
○瑞應山廣德寺 三八二ノ一二
○すいじやぐわらじや 四七五ノ五
○水晶宮 五一八ノ一四
○水道 一八五ノ八
○すくわい(駟僧) 一五ノ一二
○すががき 二九六ノ四
同 七一五ノ一
○巢鴨 二九三ノ五
○助三鈇 四三三ノ一〇
○助惣ふのやき 四三四ノ四
○すけん 一三三ノ四
○資盛殿下と乘合及髻切の考證 五五九ノ二
○酢吸の三聖の圖 五〇二ノ二
○鈴鹿の關 三七六ノ一三
○煤掃の考證 五七六ノ一
○雀いろ 二三六ノ一四
○雀色時 二九四ノ一四
○硯水 三七四ノ九
○簾 三四五ノ四
○すれくさ 一六ノ一
○相撲 九九ノ四
○須磨寺 五三七ノ六
○諏訪明神 三七三ノ一一

セ

○青雲寺 六三八ノ一二
○清見寺 二六八ノ二
同 一五三ノ三
○西湖志餘 二六二ノ七
○西湖志輿 三二ノ一一
○清淨光寺 九五ノ六
○盛衰記 三七六ノ五
○西藏院 七〇ノ九
○青特 一七五ノ九
○西肥の水秀才 五八三ノ一三
○菁川 五一八ノ五
同 四六一ノ一一
○瀨川菊之丞代々の墓 五八八ノ七
○瀨川仙女 三三三ノ一一
○瀨川路考 二六二ノ七
同 三二ノ一一
○石燕翁 九五ノ六
同 三七六ノ五
○關川 七〇ノ九
○赤光 一七五ノ九
○節季候 五八三ノ一三
○赤壁の五個所 五一八ノ五
○世諺問答 四六一ノ一一
○勢多唐巴詩 五八八ノ七
○雪舟 三四三ノ一一
○攝待 四九七ノ一
○薛文清公 二六六ノ三
○錢屋金塔 三四四ノ三
○千貫樋 三四五ノ二
○淺間の社 三〇六ノ三
○善光寺 二七一ノ一二
○千石通 三〇ノ一〇
○泉松山

○錢湯 一三二ノ五
○千人塚 三六八ノ一四
○千本松 三九四ノ二
○千里亭白駒 三一ノ五
○ぜり出し 二五七ノ五

ソ

○草鞋大王 六八八ノ一四
○早雲寺 三三九ノ五
○相應内所 七〇七ノ五
○曹司谷 三一ノ七
同 二六八ノ一二
○宗心寺 三五五ノ九
○掃塵會 五七七ノ二
○宗鐵居士 一二九ノ七
○相場高保 二六ノ五
○總離 七二二ノ二
○草履かくし 一一ノ二
○曾我五郎が割石 三四〇ノ五
○曾我十郎五郎 二八ノ一
○疏儀莊の記 五八二ノ五
○續博物誌 五一八ノ二
○續無名抄 五四〇ノ二
○祖仙の猿 四七六ノ九
○袖の梅 二一ノ九
○袖の岡 二九八ノ五
○曾根崎心中 六三五ノ五
○蕎麥に豆腐 七〇一ノ一〇
○尊圓親王 四四四ノ一一
○存義 四七八ノ一〇
○徂徠 四四〇ノ一〇
同 四六四ノ九
同 五四六ノ一三
同 六三五ノ一一
○楚割 七一ノ二

タ

○大輝長老 五四五ノ三
○たいこ 一三三ノ一
○大黒石 三七九ノ二
○大極上 一一九ノ八
○大師河原 五三二ノ四
○大臣ばしら 三〇八ノ六
○大正 一二五ノ六
○太中庵 三〇九ノ三
○大通 六一ノ四
○鯛つくし 八七ノ一
○大抵御覽 六八三ノ一〇
○大道めぐり 一一ノ七
○鯛の味噌津 一四六ノ二
○太平樂 四六一ノ一一
○太平樂の卷物 二八四ノ一〇
○たいまつ山 三六三ノ三
○大名行列 一四四ノ一一
○大門屋 一三九ノ五
○平忠度の腕塚 五一二ノ一
○第六天 一八〇ノ七
○タヲ(峠) 五二三ノ一三
○高尾 八ノ八
○鷹が峯 四三八ノ八
同 四六〇ノ一二
○高觀音 三八九ノ九
同 三九一ノ六

○高師山 三六二ノ五
○高田の馬場 二五ノ一一
○鷹の沿革 三〇〇ノ一
○寶谷 六九〇ノ一四
○財のみなしと福の湊 二四八ノ一〇
○瀧水 七六ノ一〇
○竹本住太夫 一七四ノ一〇
同 六三二ノ一一
○竹本文起 三九ノ一四
○竹本政太夫 三八ノ一二
○紙鳶の名稱 六八一ノ二
○多田人成 四九ノ三
○疊算 一九五ノ一
○疊のかず 二二ノ五
○立岩の觀音 三六二ノ一二
○立君 二八八ノ一二
○橘づくし 一八ノ一
○橘まち 五五ノ三
○龍田詣 四二二ノ二
○辰巳屋 二三六ノ八
○立石助兵衛 五二七ノ五
○立髮五人男 四六四ノ六
○喩草 四七二ノ一一
○谷風 一六八ノ七
○谷風梶之助 六三〇ノ一
○谷左仲 四六九ノ六
○谷水音 五一ノ一〇
○烟草 四三七ノ四
○談淵 五一〇ノ五
○淡海錄 五四〇ノ一四
○談洲樓 一一七ノ一一
○譚友夏 五〇〇ノ九
同 六〇七ノ一三
○探幽の鷹 四四二ノ五
○田村丸の社 三八〇ノ五
○爲朝 五七九ノ七
○爲朝明神 五七七ノ一三
○大夫格子 四三ノ四
○達摩 三二四ノ九
○達磨忌 五七七ノ四
○達磨糖 七〇五ノ一一
○俵藤太秀郷 三九〇ノ五

チ

○地赤 一九一ノ一二
○千秋井 二七二ノ三
○知惠の内子 六八七ノ五
○智慧院 三九五ノ九
○近松御坊 三八九ノ八
○地錦抄 六九二ノ六
○地口 四八ノ九
○地口有武 四二ノ六
○兒淵 五四一ノ七
○ちゞら糖 四三三ノ一一
○乳附親 一四ノ五
○地主權現 三九七ノ一一
○ちのわ 一九一ノ一四
○池北偶談 五六七ノ一四
○ちんがらこ 一一ノ五
○陳繼儒 五〇九ノ七
○陳獻章 五三一ノ七
○椿軒先生 六八三ノ七
○沈草亭 二六二ノ四

○ちんちん　六二七ノ一四
○狆の名　六四三ノ一〇
○茶きん餅　六三四ノ五
○長元記　五二六ノ三
○趙恒夫　四九八ノ七
○長者が丸　一九ノ一
○長嘯子　六六ノ五
○長生花林抄　六九二ノ一一
○帳中香　四九九ノ五
同　五二三ノ三
同　五八四ノ一一
○兆殿司の涅槃像　六九三ノ一〇
○鳥文齋榮之　二五〇ノ四
○朝野雜記　五五二ノ七
○千代菊　二六二ノ二
○畫三　七一二ノ一二
○中正子　五七三ノ一一
○報條（チラシ）　五三ノ一〇
○知立神社　三六八ノ一〇
○ちりめん饅頭　四三三ノ一〇

ツ

○杖衝坂　三七四ノ二
○塚越榮陽　六二五ノ九
○月づくし　二三ノ一〇
○つき出し　六〇ノ七
同　六四八ノ一一
同　七一七ノ六
同　七一八ノ三
同　三八六ノ一二
同　一三二ノ五
○月輪の池　三九〇ノ一二
○月見　三〇ノ九
○月見の舞堂　五一一ノ一四
○津久戸明神　三六ノ六
同　一三三ノ一
○筑波山人　一〇六ノ一一
○附祭り　一一四ノ一二
○蔦の唐丸　四八七ノ五
同　一三六ノ一〇
○土物語　一七一ノ九
○土屋清三　五二三ノ一〇
○土弓場　一五二ノ六
○ツヽカフ　一〇九ノ六
○壺瓶　四ノ二
○壺屋　一六七ノ一二
○つらみせ　一七〇ノ一〇
同　一八三ノ八
同　二一一ノ七
同　六二五ノ二
同　六六八ノ一
同　六七二ノ三
○釣燈籠のいろ〳〵　一一九ノ二
○鶴吉　一七一ノ三
○つる〳〵　一一ノ四
○龜滿丸　五三三ノ五
○つれ〴〵草　九ノ三
同　五〇七ノ七
○つれ〴〵草野槌　五〇四ノ八

テ

○庭湖石　一二ノ五

○帝城景物略　五一五ノ八
○出女　二一三ノ五
○手柄岡持　二九一ノ五
○出替　一六九ノ三
○出來秋萬作　二六ノ一一
○適從錄　四七〇ノ二
○徹山　二四一ノ一四
○鐵石軒吉久　四三九ノ一
○手孕村　三八五ノ七
○てんぐろま　一一ノ五
○てんごう　一八ノ五
○天竺浪人　四二八ノ四
同　六九九ノ九
○沾項子　一八ノ一一
○田汝成　五一三ノ九
同　五一九ノ七
○傳通院　二九七ノ一二
○天道の宮　七〇四ノ四
○轉法輪三條家　四四三ノ二

ト

○唐衣橘洲　二七ノ四
同　二八八ノ二
○東醫寶鑑　九ノ二
○唐院　三八九ノ一四
○東海道名所記　五三二ノ三
○東牛齋蘭香　一一一ノ三
○東牛子　八九ノ三
○東海平子文　五五二ノ七
○東江先生　六九六ノ一
○唐獨樂　一一〇ノ一一
○東作　六八七ノ一
○豆三　二四九ノ六
○蟷車　一〇九ノ五
○洞簫曲　六〇一ノ一
○十團子　三五一ノ一
○涛項香　一七八ノ一一
○道場法師　五九五ノ一一
○楊鳴曉筆　六〇七ノ四
○東坡　五九五ノ一四
○東坡懿蹟　五〇二ノ三
○東坡紀年錄　五八四ノ三
○洞房語圖　一二五ノ四
同　七〇七ノ一四
○道本　五五三ノ一四
○銅脈　二七七ノ六
○東明寺　五七二ノ六
○遠目鏡　三五三ノ六
同　三九〇ノ一二
○唐來參和　九三ノ四
○戸隱大明神　三〇六ノ五
○鷄冠海苔　三四七ノ一四
○讀書錄　四九七ノ一
○ドクハンス（宴席の戲）　六二四ノ四
○とくほん（德本上人）　一二九ノ一二
○德和歌後萬載集　六九六ノ七
○吐月峰　三五〇ノ一二
○とこ夏　一九一ノ一〇
○床花　三ノ一
○土佐軍記　五二六ノ一三
○とさん　七一二ノ一一
○豐島屋　六九ノ二
同　二九〇ノ一三

○豐島屋の大田樂 四三四ノ三
○鳶坂 三一ノ七
○富田座 一七二ノ一一
○富突 一五〇ノ五
○富本豐前太夫 五八ノ一
○曇龍上人 五七四ノ一一
○巴寺 三八八ノ三
○豐川 三六四ノ一
○豐國社 三九八ノ六
○豐臣秀吉 五四四ノ九
○豐原龍秋 六〇七ノ六
○虎御石 三三五ノ一〇
○鑼燒甘藷 一四五ノ一四
○島追 八三ノ六
○島毛槍 二五八ノ一
○鳥の跡の千二郎 一一ノ一二
○取退〔トリノキ〕 一五〇ノ五
○鳥邊山 三九八ノ一

ナ

○中泉 三五七ノ一三
○長井の浦 三二三ノ一二
○中岩 五七三ノ一
○中汲 二一ノ四
○中座 一五〇ノ五
○中島點の四書 七一三ノ七
○長門鮨 四五八ノ二
○長門本平家物語 三四九ノ五
○中貫 五五八ノ六
○中芝居 三四二ノ四
○中乘山人 六三二ノ一二
○長櫃 一二〇ノ四
○中村座 一二八ノ四
○長等山 一六八ノ一
○謎の沿革 三八九ノ七
○夏草のかすゝ 一二九ノ一
○夏見 一六ノ一
○撫子 三八三ノ六
○七くさ爪 一九一ノ一〇
○七種の一種 一三ノ五
○七陰囊〔ナナフクリ〕 五四四ノ七
○涙花五人男 一五六ノ二
○鍋とり公家 四六四ノ一
○名見崎大喜 二八一ノ四
○南齋書 六六五ノ一三
○南條山人 五一一ノ一〇
同 五七二ノ七
同 三三〇ノ七
○南浦文集 四五九ノ三
○南遊藁 五四二ノ一四
○南嶺 五〇四ノ三
○成田屋 七一ノ一一
○鳴子瓜 八九ノ三
○なるとぼれ 七〇ノ三
○鳴海神社 八七ノ一一
三六九ノ一二

二

○鳴の湖鏡 三八七ノ三
○西三條實澄卿 五四五ノ一一
○西どつち 一一ノ九
○西本德寺 三六〇ノ三
○二水樓 一一四ノ一
○似せ繪 六六九ノ四

○日輪寺 六三二ノ八
○日蓮上人御書撰時抄 五七四ノ一
○日觀要考 五二八ノ一二
同 五五四ノ七
○日工集 五二三ノ一〇
同 五二九ノ五
○二寶荒神 四七七ノ四
○日本魚譜 六九九ノ八
○日本左衛門 三八六ノ一一
○日本詩史 五五一ノ一〇
○日本人物史 六〇二ノ三
○日本風土記 五一〇ノ一〇
同 五五〇ノ一二
○仁如和尚 四一九ノ一
○入花 六九七ノ六
○入梅時の光景 一六ノ一三
○俄と茶番 六二四ノ九

ヌ

○鵺學問 四六七ノ五
○布引山 三八一ノ九
○沼津 三四五ノ四

ネ

○猫 一三ノ三
○鼠 一三ノ一二
同 一四ノ九
○鼠木戸 六一ノ一四
○鼠算 一五ノ四
○ねぢがれ 五五三ノ七
○年魚 七〇ノ六

ノ

○野牛門 三六四ノ三
○機關〔ノゾキ〕 一七二ノ二
○のべ 二六八ノ九
○呑掛山ノ寒鴉 一四六ノ三
○野見てうなごんすみか 二八四ノ二
ね
○乘かけ 四七七ノ四

ハ

○梅園主人 四二一ノ一〇
○佩文齋書畫譜 五二四ノ四
同 五四三ノ一三
○貝まわし 一〇ノ一一
○羽織 七〇五ノ五
○博多ごま 一〇ノ一一
○はきだめおまつ 二八八ノ一四
○萩寺 三〇一ノ一三
○萩の屋 四二四ノ一一
○白沙子 五三一ノ七
○白獅 六三九ノ一〇
○莫愁 五〇九ノ八
○白水眞人 一五七ノ八
○白馬道人 六九五ノ八
○白鯉館卯雲 二六ノ一三
○坡谷菴 四一九ノ四
○箱根權現 三四一ノ九
○巴人集 一三五ノ二
○巴人亭 五六ノ一二
○橋本 三六一ノ八
○芭蕉 二〇ノ七

○走り井 三九二ノ一三
○早稲蕻〔ハゼウリ〕 一四一ノ八
○長谷寺 三〇四ノ一二
○畑 三四〇ノ七
○はたうち川 三四八ノ九
○島中頼母 四六一ノ四
○馬端臨 五二二ノ三
○八詠櫻 三九一ノ七
○八王子 三七五ノ六
○八居題詠 五五一ノ六
○八軒屋 四〇〇ノ一四
○八丈島宗福寺 五七七ノ九
○八里半 二九七ノ七
○初がつを 九ノ七
○初倉山 三五二ノ四
○八朔 二五二ノ六
○服部南郭 五七四ノ一一
○馬蹄 六八六ノ一四
○ばてれん 一三四ノ二
○英一蝶 二八三ノ一一
○花道のつられ 六六七ノ一二
○花水橋 三三五ノ四
○馬入川 三三五ノ三
○濱名の湖 三六〇ノ四
○濱邊黒人 二七ノ一
同 六九七ノ五
○濱むら 二六二ノ八
○半田稻荷 二九五ノ一〇
○半陶稿 五八八ノ二
○飯道寺 三八二ノ九
○嶮方 六八ノ一〇
○腹唐の秋人 三八ノ二
同 四二ノ一一
○腹川 三五五ノ一〇
○原富 八ノ五
同 六三九ノ九
○馬蘭亭 一〇三ノ一一
○播磨清絢 四三二ノ一
同 四七〇ノ七
○はりうち 七一一ノ九
○春駒狂歌集 五四八ノ三

ヒ

○ひおほひ 六六七ノ八
○檜垣寺古瓦の記 五七四ノ一一
○干菓子 一六四ノ七
○日暮の宮 三五ノ六
○引け四つ 二八九ノ三
同 二九六ノ二
同 七二三ノ一
○肥前座 七一七ノ八
○引込 六〇ノ六
同 七一四ノ一二
○一節切尺八 五九六ノ五
○雛のいろ〳〵 六八ノ一
○干饅 六九ノ四
○彬師 一三ノ一一
○貧貧堂 一五〇ノ一〇
○貧民窟の光景 四六二ノ九
○百喜齋 七五ノ五
○冷水ばんそ 三〇ノ九
○兵庫結 七一二ノ六

○病目鏡 一五七ノ九
○日吉元服記 五二五ノ一一
○ひよどり塚 三七四ノ一四
○平賀源内 六九七ノ一二
○琵琶行の翻案 六四九ノ七

フ

○笛の息 四五六ノ一二
○笛吹大明神 三七七ノ七
○鱈やぶ 二二四ノ六
○福内鬼外 七〇〇ノ六
○福壽草 一八九ノ一
同 三一四ノ八
同 六九二ノ一三
○ふくろふの暖め土 四四九ノ一二
○普濟寺 五六七ノ一
○浮機散人 五一二ノ七
○富士川 三四六ノ九
○富士山 五二ノ一〇
○富士沼 三四六ノ八
○富士の白酒 三四六ノ七
○伏見 四〇〇ノ一
○富士見平 三四三ノ四
○不成就日 五二七ノ八
○覆醬集 五四六ノ九
○二瀬川 三五五ノ七
○藤枝 三五一ノ四
○藤の森 三九九ノ一三
○藤卷寺 三三七ノ七
○藤本由己 五四八ノ三
○普茶會 五二九ノ一二
○物產會 三三七ノ一四
○佛祖統紀 三五〇ノ九
○佛法僧 一八九ノ五
○物理小識 五〇九ノ三
○物類品隲 六九八ノ四
○太印太之根 一四五ノ一四
○船繫松 三五ノ一〇
○文獻通考 五二二ノ四
○文庫山 三四一ノ三
○文武丸 七〇五ノ八
○文武火茶釜 一七七ノ七
○文鳳 二八二ノ七
○文賓亭 三二七ノ一〇
○文彌節 六四五ノ一四
○ふらそこ 六八ノ四
○ふり袖 七一五ノ一
○不老門 七二三ノ一

ヘ

○平家物語 五五九ノ一〇
○閉戸先生 四六九ノ九
○瓶山 四四七ノ八
○邊越方人 七四ノ六
○臍の穴守禪師 七三ノ一
○平秩東作 四四四ノ一
○べらばう燒 四三三ノ九
○べろ〳〵の紙 一一ノ一二

ホ

○寶繪錄 五四三ノ一二
○放下師 二九七ノ四
○放下僧 二六九ノ七

○放下著　六四〇ノ三
○放魂　五一九ノ五
○報謝宿　四八七ノ五
○北條氏綱　九ノ九
○北條五代記　四六五ノ一二
○坊主合羽　一九四ノ三
○法藏寺繩　三六五ノ五
○望陀襴　六三〇ノ一一
○寶塔寺　三九九ノ三
○棒鼻　三三〇ノ一一
蓬萊亭翁屋　三〇七ノ一
○牧溪　四二八ノ一三
○遊墨水賦并序　五八六ノ一三
○北肉山人　四四二ノ一四
○星見世　九三ノ一一
○蒲州府志　五七一ノ六
○ほたけ　七一九ノ一
○法華堂　五四二ノ九
○本宮山　三六三ノ五
○本多風　一六五ノ五
○本多髷　六二三ノ一三

○本なれ　一九一ノ一一
○堀口幽谷　四五九ノ一〇
○保曆間記　五六〇ノ一一

マ

○舞坂　三六〇ノ三
○舞鶴　一七四ノ二
○前野村　三八一ノ二
○鉤川〔マガリガハ〕　三八五ノ一〇
○枕橋　四五一ノ八
○馬込川　三五八ノ九
○政右衛門　三四三ノ一
○鱒岩　三八二ノ一一
○ますの芋　五五ノ七
○木天蓼〔マタタビ〕　一三ノ八
○松岡玄達　五六六ノ一一
○松風瀨平　四三七ノ一〇
○末社　一三三ノ一
○松人　七一九ノ七
○松本のわたし　三八八ノ一二
○松屋せんべい　四三七ノ一〇

○まないた橋　三六四ノ八
○間部河岸　一八九ノ三
○萬歲　八三ノ七
○萬載集　六九六ノ七
○萬人講　二四九ノ九
○萬八樓　三一〇ノ四
○豆いり をくばる　六四ノ一〇
○まめ男　三一二ノ三
○豆づくし　三一二ノ三
○鞠子川　三三八ノ一
○丸鑑　一二五ノ一
○まはり　七一二ノ一四

ミ

○御井　三九〇ノ二
○三浦屋　八ノ四
○三浦安貞　五四九ノ一〇
○三香野橋　三五七ノ四
○三上山　三八二ノ八
○三河記　一九〇ノ一〇
○三草山　一二ノ七

○みす紙　七一一ノ一
○みせすががき　三八ノ八
○三千風　三三五ノ一三
○水いなり　三〇五ノ二
○水懸論　一五三ノ四
○水潛　四二九ノ一二
○光富權之助　五二六ノ一三
○水の行方　四五九ノ三
○三叉　六六六ノ六
○源經基　一九ノ一
○三升（市川三升參照）　二五九ノ一〇
○みゝづく　四〇ノ三
○みゝづくの形　六三ノ九
○三圍稻荷　二五七ノ八
○都春雪　一二九ノ一二
○宮古路一中墓　三九三ノ一二
○都の富士　三八五ノ五
○みやこぶし　三九三ノ一二
○宮の驛　三六九ノ一二
○明阿彌陀佛　二四〇ノ二
同　四二二ノ一一

○妙恩寺　三五八ノ三
○妙國寺　七〇七ノ二
○妙秀　四三八ノ一一
○妙有菴　四四八ノ一一
○みれんなし　六四三ノ四
○瀰勒といふ年號　四三五ノ八

ム

○無思庵　四二三ノ七
○昔の反古　三四ノ一四
○昔八丈　一六五ノ一一
○無間山觀音　三五三ノ五
○無間鐘　一五二ノ八
○向島　四一ノ一
○むさし屋　四二ノ六
○貉　九六ノ一〇
○無盡　一五〇ノ一
○六玉川　三八六ノ九
○紫の帽子　三九一ノ二
○紫のゆかり　一二八ノ三
○紫蓼　三六七ノ一

○村瀨梅亭　六〇三ノ一
○無量寺　三六八ノ八

メ

○名物六帖　六九七ノ九
○若葉集　六九六ノ八
○目かくし　一一ノ三
○目川榮飯　三八五ノ一三
○目鷹市　二五五ノ一三
○飯盛　六ノ二一
○飯賣女　四四四ノ一
同　七〇六ノ七
○めりやす　二一ノ八
同　六六五ノ一四

モ

○孟宗竹　六九一ノ六
○戾子肩衣　一五ノ一〇
○戾擂石　五三三ノ九
○文字大夫　三ノ一
○尤草紙　五〇六ノ九

○元宿 三六五ノ三
○もとの木綱 三八ノ一
同 八六ノ七
同 六八七ノ四
同 六九七ノ二
○物見塚 三六ノ二
○百川樓 三一〇ノ四
○桃栗山人 八八ノ九
○桃太郎 一四九ノ三
○森下の立場 三七五ノ三
○森田座 一六八ノ五
同 二三七ノ一一
○諸白 二一ノ三
○諸羽大明神 三九三ノ四

ヤ

○屋形尾の鷹 一九四ノ七
○藥研堀 一九ノ一〇
○八十瀬 三七九ノ三
○やつこしまだ 七一一ノ九
○やつこだこ 六八三ノ一
○奴茶屋 三九三ノ五
○宿屋飯盛 一ノ八
同 七七ノ四
○柳堂 三六八ノ三
○矢野 六九ノ二
○矢矧川 三六七ノ二
○藪柑子 三六三ノ一
○藪疊 二四四ノ三
○藪の下 四七三ノ一三
○山川白酒 三九三ノ九
○山科 六九ノ二
○山だし 三九三ノ三
○大和七言城 四七五ノ一一
○大和屋 三六六ノ一一
○山中村 一七八ノ八
山猫 七ノ四
○山の手 三五四ノ一一
○山ばなの立場 三七四ノ九
○山邊村 三七九ノ一
○やり梅 一八九ノ九

ユ

○由己法橋 四一九ノ五
○友泉染 六四三ノ六
○湯本 三三九ノ一二
○油煙齋言因 二六〇ノ一〇
○百合若大臣野守鏡 六三七ノ一

ヨ

○楊貴妃 五二二ノ九
○容齋四筆 五四三ノ三
○雍州府志 六〇二ノ八
○楊子方言 五〇九ノ一
○要津寺 四七〇ノ一〇
○用心土 四ノ九
○養福寺 三四ノ一一
○横田川 三八二ノ一〇
○芳澤 一八一ノ五
○吉田橋 三六四ノ一
○吉田李園翁 七三ノ八
○義朝の首洗水 三八一ノ一三

○吉野拾遺 四九八ノ四
○良村安世 五〇ノ一
○よし原 三ノ六
○吉原草摺引 一二五ノ一
○吉原戀の道草 一二四ノ九
○吉原細見の沿革 一二五ノ四
○よし原雀 一三三ノ一
○吉原大黒舞 一二五ノ一
○吉原大全 四九一ノ七
同 六九六ノ三
○吉原年代記 二八四ノ一一
○夜鷹 一四二ノ一二
○夜鷹蕎麥 一七五ノ一四
○四つ切 二三ノ三
○淀鯉出世瀧徳 六三七ノ六
○夜啼の石 三五三ノ一一
○讀うり謎かけぶし 一二九ノ一〇
○四方山人 六一ノ三
○四方の赤 一ノ一
○四方酒〔ヨモノアカ〕 一四六ノ二
○四方赤良 二一ノ一
同 五七ノ一三
同 一三五ノ二
○よりあひ 七一七ノ一〇

ラ

○羅漢寺 二六〇ノ二
○樂心 四八一ノ一二
○蘭雨 一〇九ノ六

リ

○李委 五八五ノ一
○栗花集 一〇九ノ五
○隣松 三〇ノ一〇
○立慶橋 二八九ノ一二
○龍尾石 五〇五ノ六
○俚謠 三二〇ノ一三
一りけんぢやう 四九ノ八
遠州灘松 三二二ノ一四
お月さまいくつ 六四四ノ一四
おまへその樣に
君と寢やるか
駒勇則花散
してやんして
しやうなら〳〵
そも〳〵われらは
そよ〳〵風に
にくい〳〵は
のび上られば
橋の下の菖蒲は
富士のしら雪
文がやりたや
ほゝづき程な
向ふ通るは
めでた〳〵
まうそ〳〵赤事申す
○涼苑 一五一ノ一
○龍頭雜字元龜大全 六二三ノ四
○兩巴尼言 六三四ノ三
○料理獻立表 六三五ノ一
○呂純陽 七〇一ノ二
一一九ノ一二
八九ノ一
五〇六ノ一〇
六三七ノ三
四九七ノ九
一二五ノ三
六七三ノ二
五二九ノ一四

レ

○冷齋夜話　五一一ノ一
○靈梅集　五五五ノ三
○歷代記　五二五ノ一一
○列山傳　五三〇ノ五
○聯珠詩格　四九九ノ二
○蓮如上人　三九一ノ一四
○連誹　二四ノ一二

ロ

○弄鐵子　一〇〇ノ七
○瑯琊代醉編　五一一ノ一二
○盧橘菴　四一二ノ三
○路考錦考　一七八ノ一二
○路考大明神　一七九ノ一二
○蘆水　一〇七ノ一二

ワ

○和繪唐畫　一五四ノ六
○若木の櫻　五三七ノ一四
○脇差の小刀　四三四ノ一二
○早稻田太神宮　四三ノ八
○和田の地藏　三七五ノ一一
○わやく　六五七ノ七
○藥店　三〇ノ五
○蕨餅　三五四ノ六

太田南畝集索引終

大正十五年九月二十日印刷
大正十五年九月二十三日發行

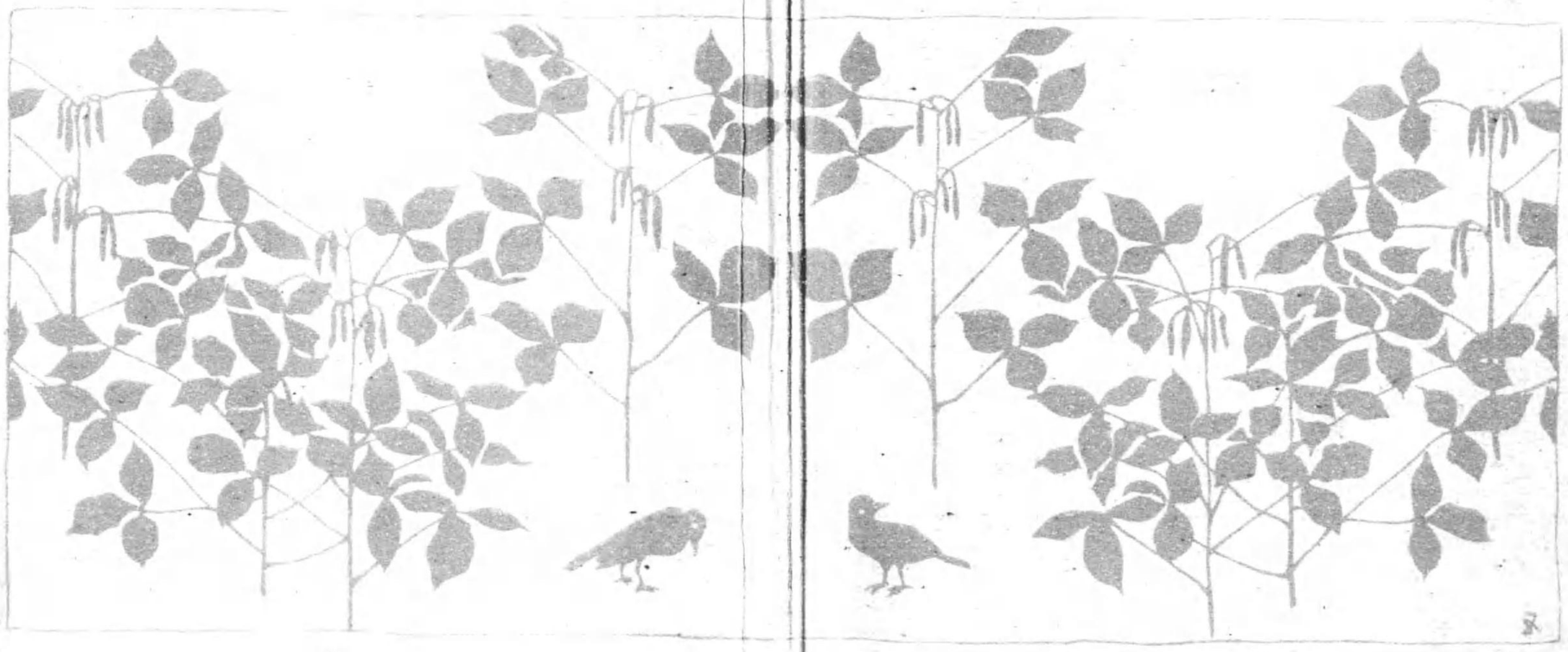
有朋堂文庫
太田南畝集（非賣品）

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地　塚本哲三
印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷所　東京市神田區三町三丁目九番地　有朋堂印刷所
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

不許複製

岡山製本

543
27



終